

スギラン

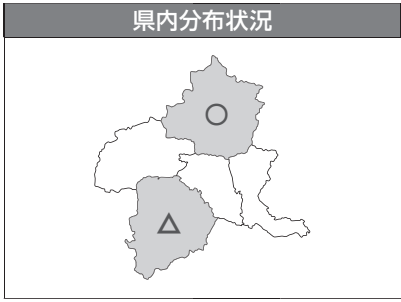
ヒカゲノカズラ植物・ヒカゲノカズラ目
ヒカゲノカズラ科

Huperzia cryptomerina (Maxim.) Dixit

評価理由	4地点で記録があるが、今回新たに確認された1地点以外では生育情報が得られなかった。現存個体数は極めて少ないと思われる。
主な危険要因	森林伐採、その他（崩落） 着生種のため、森林伐採による減少が危惧される。また急崖に生育する個体は、崩落による生育地の消失が危惧される。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
4	不明	2
	絶滅	1



チシマヒカゲノカズラ

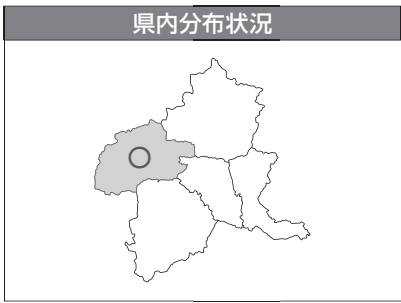
ヒカゲノカズラ植物・ヒカゲノカズラ目
ヒカゲノカズラ科

Lycopodium alpinum L.

評価理由	1地点のみで生育が確認された。生育基盤は脆弱で、遷移により消失する危険性が高い。
主な危険要因	自然遷移 裸地的な環境に生育するため、遷移の進行により消失する危険性が高い。
特記事項	群馬県では2020年に初めて記録された。米倉（2012）ではミヤマヒカゲノカズラ（チシマヒカゲノカズラ）として扱われている。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 I B 類

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0



タチクラマゴケ

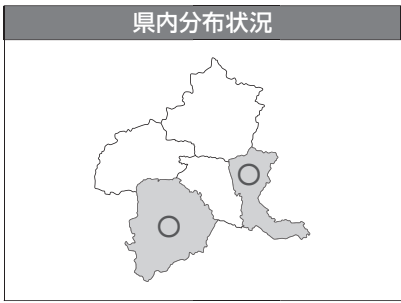
ヒカゲノカズラ植物・イワヒバ目
イワヒバ科

Selaginella nipponica Franch. et Sav.

評価理由	4地点中2地点で小規模な集団のみが確認された。生育環境が人里周辺に偏り、開発や道路工事などの影響を受けやすいと考えられる。
主な危険要因	土地造成（その他）、外来種競合・交雑、踏み付け 記録された地点は集落や都市かそれに接する丘陵地に限定される。希少種であることが認識されておらず、工事や除草に遭う危険性が高い。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	2
4	不明	2
	絶滅	0



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅危惧 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

ウスイハナワラビ

シダ植物・ハナヤスリ目
ハナヤスリ科*Botrychium nipponicum* Makino var. *minus* (H.Hara) K.Iwats.

評価理由

3地点中1地点のみで生育が確認され、残りは現状不明である。

主な危険要因

園芸採取、自然遷移、土地造成（ソーラー）
産地の1つは収集家による採取リスクが高い。さらに、観光施設やソーラー発電所の造成、草地・疎林の遷移も減少要因としてあげられる。

特記事項

今回評価

絶滅危惧 I A 類

群馬県 (2018)

群馬県 (2012)

群馬県 (2001)

環境省 (2020)

絶滅危惧 I A 類

絶滅危惧 I 類

指定なし

判定基準

定量 D

産地数

3

現存

1

不明

2

絶滅

0

県内分布状況



トネハナヤスリ

シダ植物・ハナヤスリ目
ハナヤスリ科*Ophioglossum namegatae* M.Nishida et Kurita

評価理由

1地点のみで現存が確認されている。隣接地域に大規模な生育地があるが、本県での分布面積は極めて狭い。

主な危険要因

湿地開発、その他（廃棄物投棄）
分布面積が狭いため、掘削や作業道設置などの小規模な工事でも絶滅する可能性がある。

特記事項

県植物誌改訂版（1987）には記録がない。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

群馬県 (2018)

群馬県 (2012)

群馬県 (2001)

環境省 (2020)

絶滅危惧 I A 類

指定なし

絶滅危惧 II 類

判定基準

定量簡易 ACD

産地数

1

現存

1

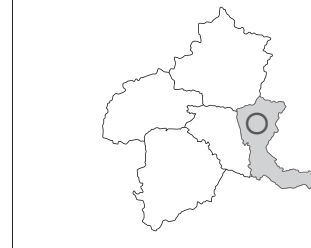
不明

0

絶滅

0

県内分布状況



アオホラゴケ（コケホラゴケ）

シダ植物・コケシノブ目
コケシノブ科*Crepidomanes latealatum* (Bosch) Copel.

評価理由

3地点で記録があるが、生育基盤が脆弱なため1地点では絶滅している。現存が確認された2地点では減少が危惧される。

主な危険要因

その他（災害、法面工事）、森林伐採
現存個体数が少ないことに加え、分布域は近年たびたび台風を含む豪雨災害の影響を受けている。

特記事項

県内では1954年に戸部正久ほかによってコケホラゴケとして記録された（里見 1956）。近年コケホラゴケは羽片の先端が著しくとがり葉の切れ込みが少ない形質を重視し、アオホラゴケから独立させる見解が出されている（海老原 2016）。県レッドデータブック（2001）ではコケホラゴケとして評価された。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

群馬県 (2018)

群馬県 (2012)

群馬県 (2001)

環境省 (2020)

絶滅危惧 I A 類

希少

準絶滅危惧:コケホラゴケとして

判定基準

定量簡易 ACD

産地数

3

現存

2

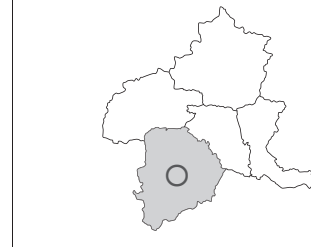
不明

0

絶滅

1

県内分布状況



キヨスミコケシノブ

シダ植物・コケシノブ目
コケシノブ科

Hymenophyllum oligosorum Makino

評価理由	1地点のみで生育が確認された。分布面積が狭く、生育基盤が脆弱である。
主な危険要因	自然遷移、特殊分布 樹幹に着生する種で生育基盤が脆弱なため、継続性が危惧される。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 C	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0



ヒメハイホラゴケ

シダ植物・コケシノブ目
コケシノブ科

Vandenboschia nipponica (Nakai) Ebihara

評価理由	3地点で記録があるが、1地点のみで確認された。目立たない植物で、確認が難しい。
主な危険要因	森林伐採、自然遷移 生育には地形、湿度、日射量などの環境条件が揃うことが必要であると考えられる。倒木や崩落などの環境変化に脆弱であると考えられる。
特記事項	いずれの生育地も極めて小規模と判断し、今回絶滅危惧 I A 類に位置づけた。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	情報不足
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定性	
産地数	現存	1
3	不明	2
	絶滅	0



デンジソウ

シダ植物・サンショウモ目
デンジソウ科

Marsilea quadrifolia L.

評価理由	最近まで確認された地点では、過去5年間再確認できていない。別の地点で新たに確認されたが、状況から逸出個体と判断され、生存情報からは除外した。
主な危険要因	湿地開発、農薬汚染、池沼開発 近年記録があった生育地は農地であり、除草剤散布により生育が確認できなくなった。それ以外の地点では湿地開発や湖沼開発で絶滅に至った。
特記事項	県レッドデータブック (2001) では絶滅種とされた。その後、記録がない地域で生育が確認されたが、今回確認できなかった。今回別の地点でみつかったが、これは生育状況や共存する植物から移入と判断された。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定性	
産地数	現存	0
4	不明	1
	絶滅	3



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅危惧 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

サンショウモ

シダ植物・サンショウモ目
サンショウモ科*Salvinia natans* (L.) All.

評価理由

19地点中生育が確認されたのは1地点のみ。近年は管理放棄や自然遷移により絶滅する事例が多い。水質のわずかな変化でも、激減する。

主な危険要因

池沼開発、管理放棄、自然遷移
池沼の埋め立てや公園整備により多くの産地で絶滅した。過去20年間は遷移に伴う抽水植物の繁茂や、湿田の管理放棄により消失が相次いだ。

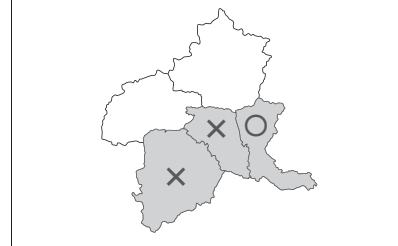
特記事項

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量 C
------	------

産地数	現存	1
19	不明	1
	絶滅	17

県内分布状況



イワウラジロ

シダ植物・ウラボシ目
イノモトソウ科*Aleuritopteris krameri* (Franch. et Sav.) Ching

評価理由

5地点に生育するが、株数は少ない。最大の産地は石灰岩の採掘により消失したと考えられる。1地点でロッククライマーによる踏みつけ、掻き落としの危険がある。

主な危険要因

石灰採掘、自然遷移、特殊分布
最大の産地以外は現在のところ石灰岩の採掘の予定はない。株数が少ないため、収集家による採取が消失に直結すると考えられる。

特記事項

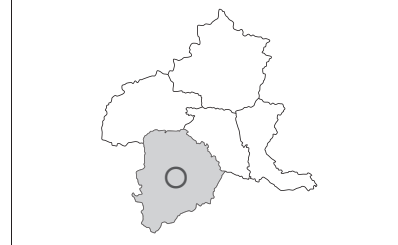
最大の産地は石灰岩採掘に先立って調査が行われ、本種の存在も確認されていた。その後は鉱区内で系統保存が行われている。2020年に国内希少野生動植物種に指定された。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 I B 類

判定基準	定量簡易 ACD
------	----------

産地数	現存	5
5	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



ウスヒメワラビモドキ

シダ植物・ウラボシ目
ナヨシダ科*Acystopteris taiwaniana* (Tagawa) Á.Löve & D.Löve

評価理由

1地点のみで生育が確認された。分布面積が狭く、良好な森林環境の保全が求められる。

主な危険要因

動物食害 (シカ)、森林伐採
森林伐採が致命的な影響を及ぼすが、現在はニホンジカの食害も大きな脅威である。

特記事項

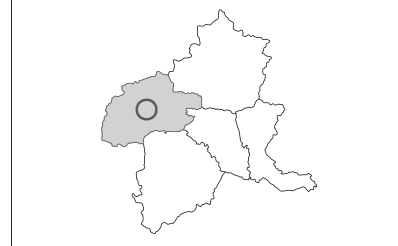
近年になって日本に産することが知られたシダ植物である (海老原 2016)。ウスヒメワラビに似ているが、4倍体であり、独立種である (Ebihara et al. 2019)。ウスヒメワラビと識別されることが多く、また、葉柄や中軸が赤みを帯びない個体もあり、イワヒメワラビなどと誤認されることもある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
------	------

産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



ヤマドリトラノオ

シダ植物・ウラボシ目
チャセンシダ科

Asplenium castaneoviride Baker

評価理由	5地点で記録されているが、4地点ではその後記録がない。残り1地点でも確実な生存情報はなく、残存していてもごく少数と推定される。
主な危険要因	道路工事、土地造成（その他）、その他（石垣の改修） 人里近くに生育するケースが多く、道路や駐車場の整備、石垣の改修工事の影響を受けやすい。
特記事項	群馬県レッドデータブック（2001）及び（2012）ではトラノオシダとクモノスシダの雑種としたが、近年、ヤマドリトラノオはこの雑種を起源とする4倍体で、種として扱うことが適当である見解が出されている（海老原2016）。本書ではこの見解に従うこととした。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県（2018）	
群馬県（2012）	絶滅危惧 I A 類
群馬県（2001）	絶滅
環境省（2020）	絶滅危惧 I A 類

判定基準		定性	
産地数	現存	0	
5	不明	1	
	絶滅	4	



オクタマシダ

シダ植物・ウラボシ目
チャセンシダ科

Asplenium pseudo-wilfordii Tagawa

評価理由	1地点のみで少数の株が確認された。ロッククライマーによる踏み付けや掻き落とし、落石防止工事による生育地の破壊が考えられる。
主な危険要因	踏み付け、特殊分布 生育地は一般登山者が立ち入る場所ではないが、ロッククライマーによって踏み付けられたり、登攀ルートで邪魔になる場合掻き落とされる可能性がある。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県（2018）	
群馬県（2012）	絶滅危惧 I A 類
群馬県（2001）	指定なし
環境省（2020）	絶滅危惧 II 類

判定基準		定量 D	
産地数	現存	1	
1	不明	0	
	絶滅	0	



チャセンシダ

シダ植物・ウラボシ目
チャセンシダ科

Asplenium trichomanes L.

評価理由	1地点のみで生育が確認された。生育基盤が脆弱で個体数も少ない。
主な危険要因	道路工事、その他（除草） 道路沿いの石垣に生育するため、道路工事による絶滅が想定される。また石垣の除草や収集家による採取に遭うことも考えられる。
特記事項	県内における初記録は2006年のものである（証拠標本：GMNHJ-BP-87140）。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県（2018）	
群馬県（2012）	絶滅危惧 I A 類
群馬県（2001）	指定なし
環境省（2020）	指定なし

判定基準		定量 D	
産地数	現存	1	
1	不明	0	
	絶滅	0	



イブキシダ

シダ植物・ウラボシ目
ヒメシダ科*Thelypteris esquirolii* (H.Christ) Ching var. *glabrata* (H.Christ) K Iwats.

評価理由

1地点のみで生育が確認された。園芸採取に加え、災害によって生育環境が変化し、株数の減少が著しい。

主な危険要因

特殊分布、園芸採取、その他（災害）
本県の生育地は以前から一定の採取圧がかかっていた。それに加え、台風による出水で流出するとともに環境が変化した。

特記事項

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
------	------

産地数	現存	1
	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



イヌイワデンダ

シダ植物・ウラボシ目
イワデンダ科*Woodsia commixta* Ching

評価理由

2地点で記録されているが、1地点のみからごく少数株のみの生育が確認できた。

主な危険要因

道路工事、自然遷移、その他（擁壁工事）
現存個体数が極めて少ない。保護されていない場所にあるため、工事によって消失する可能性がある。

特記事項

県内の記録はいずれも集落等に近い地点にあるが、保護体制が全く整っていない。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量 D
------	------

産地数	現存	1
	不明	0
	絶滅	1

県内分布状況



トガクシデンダ

シダ植物・ウラボシ目
イワデンダ科*Woodsia glabella* R.Br. ex Richards.

評価理由

4地点で記録があり、2地点から50個体未満が確認された。残りは現状不明と、絶滅した地点である。

主な危険要因

石灰採掘、自然遷移
絶滅した1地点は石灰岩の採掘によるものである。現存する生育地の環境は特殊であり、脆弱性が高い。

特記事項

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
------	------

産地数	現存	2
	不明	1
	絶滅	1

県内分布状況



キタダケデンダ (ヒメデンダ)

シダ植物・ウラボシ目
イワデンダ科

Woodsia subcordata Turcz.

評価理由	1 地点のみで確認されており、現存個体数は極めて少ない。
主な危険要因	その他 (希少)、自然遷移 岩場の窪みや裂け目に堆積した薄い土に浅く根を張っている。豪雨による洗掘や自然遷移による減少、消滅が危惧される。
特記事項	生育地は国立公園内にある。1991年に確認、伊藤洋博士の同定を受ける (里見ほか 1993)。2020年の調査では、自生個体は葉長1~5cmであるが孢子囊群をつけていた。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 I A 類

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0



テバコワラビ

シダ植物・ウラボシ目
メシダ科

Athyrium atkinsonii Bedd.

評価理由	1 地点で1950年代の採集記録があり、今回の調査において残存することが確認された。
主な危険要因	ダム建設、自然遷移 今回の調査で残存が確認されたが、個体群の大半はダム建設によって水没したと考えられる。
特記事項	1955年の標本採集後に完成したダムによる全個体の水没が危惧されたが、今回生育が確認されたため、絶滅危惧 I A 類にランクした。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	情報不足
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0



ミヤコイヌワラビ (ダンドイヌワラビ含む)

シダ植物・ウラボシ目
メシダ科

Athyrium frangulum Tagawa

評価理由	2 地点のうち1地点のみで生育が確認された。株数は極端に少なく、植林地に自生するため、森林伐採によって絶滅する危険性がある。
主な危険要因	森林伐採、自然遷移 民有の植林地1地点のみに自生する。伐採によって絶滅する危険性が高い。
特記事項	東部地域の記録は品種のダンドイヌワラビである。こちらは近年確認されておらず、絶滅した可能性もある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
2	不明	0
	絶滅	1



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅危惧 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

カラフトミヤマシダ

シダ植物・ウラボシ目
メシダ科*Athyrium spinulosum* (Maxim.) Milde

評価理由

3地点中2地点で生育が確認された。現状不明地点を含む2地点はニホンジカによる食害が激しく、残り1点では確認個体数が5個体未満である。

主な危険要因

動物食害（シカ）、その他（植林・登山道整備）
生育個体数の多い方の分布域はニホンジカの生息密度が高く、食害が著しい。一方の分布域では登山道整備による刈り払いの影響を受けている。

特記事項

西部地域のほか北部地域でも、過去の調査の証拠標本（西田誠 18 Jul. 1950 s.n., TI）の再確認と、2017年に現地での再確認がされた。しかし、生育株数は5株未満で、生育地は登山道維持のための刈り払いが行われている区間である。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

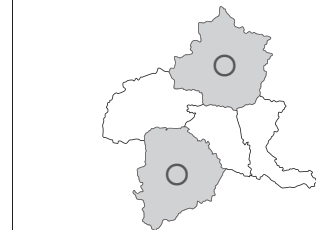
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量 D

産地数	現存	2
3	不明	1
	絶滅	0

県内分布状況



オオヒメワラビモドキ

シダ植物・ウラボシ目
メシダ科*Deparia unifurcata* (Baker) M.Kato

評価理由

2地点で生育が確認されているが、分布が局地的な種である。いずれの地点も生育面積は小さく、災害の影響を受けやすい。

主な危険要因

その他（災害）、森林伐採
生育地は地形的に水害や土砂災害の影響を受けやすい。生育地のみならず上流部の伐採によっても影響を受けると考えられる。

特記事項

県レッドデータブック（2012）の1地点はオオヒメワラビの誤認であった。今回の調査で、新たに1地点での新規確認があったが、その個体数がわずかであるため、ランクを絶滅危惧 I A 類に修正した。ニホンジカによる嗜好性は低い。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

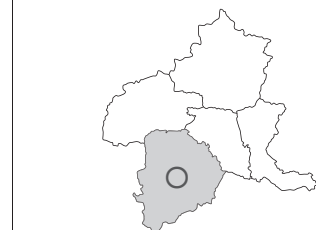
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量 C

産地数	現存	2
2	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



キタノミヤマシダ

シダ植物・ウラボシ目
メシダ科*Diplazium sibiricum* (Turcz. ex Kunze) Sa.Kurata var. *sibiricum*

評価理由

西部地域の2地点に生育が確認された。株数が極めて少ない上にニホンジカによる食害のために衰退傾向にあると判断される。

主な危険要因

動物食害（シカ）、森林伐採
確認された生育地周辺はニホンジカの食害によって林床の種組成が大きく変化している。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。西部地域ではニホンジカの食害により著しく個体サイズが低下している。現状不明の利根地域の生育地周辺も、ニホンジカによる食害が深刻化している。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

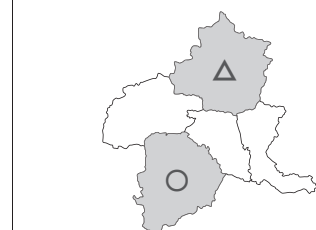
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	情報不足
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量 D

産地数	現存	2
3	不明	1
	絶滅	0

県内分布状況



オオクジャクシダ

シダ植物・ウラボシ目
オシダ科

Dryopteris dickinsii (Franch. et Sav.) C.Chr.

評価理由	2地点で生育が確認された。合計株数は50未満。植林地に自生するため、森林伐採によって絶滅する可能性がある。
主な危険要因	森林伐採、動物食害（シカ以外） 現存株数が少ない。伐採による絶滅が危惧される。また、生育地一帯にはイノシシが侵入し、掘り返し被害も危惧される。
特記事項	イワヘゴやキヨズミオオクジャクと生育環境や形態が似るので混同しやすい。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	2
2	不明	0
	絶滅	0



ワカナシダ

シダ植物・ウラボシ目
オシダ科

Dryopteris kuratae Nakaike ex Hoshiz. et K.A. Wilson

評価理由	1地点のみで生育が確認された。生育環境が特殊なことに加え株数が減少している。生育地周辺は近年伐採され、さらに絶滅リスクが高まることが懸念される。
主な危険要因	森林伐採、湿地開発、その他（乾燥化） 高い採取圧を受けてきた。また、湧水量の変化や伐採に伴う乾燥化が進み、生育地の一部で遷移が進行している。
特記事項	減少傾向が著しいため、今回ランクを絶滅危惧 I A 類に修正した。県内産地は長らく北限かつ隔離分布地として知られた産地であり、過去には標本採取のための乱獲があった。近年生育地周辺の伐採や歩道整備が進み乾燥化が著しい。湧水やそれから続く川や湿地の環境が維持できないと絶滅する危険性が高い。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0



ヒメサジラン

シダ植物・ウラボシ目
ウラボシ科

Loxogramme grammitoides (Baker) C.Chr.

評価理由	2地点中1地点で生育が確認された。個体数が極端に少ないことに加えて、生育地の環境は特殊で、脆弱性が高いと考えられる。
主な危険要因	その他（希少）、特殊分布、園芸採取 県内産地の生育環境は特殊で、個体数も少ない。また地域的に希少な種であるため、過度の標本採取が絶滅につながる可能性がある。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
2	不明	1
	絶滅	0



I
II
1
2
3
4
種の解説
(1) 絶滅
(2) 野生絶滅
(3) 絶滅危惧 I A 類
(4) 絶滅危惧 I B 類
(5) 絶滅危惧 II 類
(6) 準絶滅危惧
(7) 情報不足

オオクボシダ

シダ植物・ウラボシ目
ウラボシ科*Micropolypodium okuboi* (Yatabe) Hayata

評価理由

今回の精査により、同じ山域内の4地点で生育が確認され、現存個体数がほぼ把握されたが、各地点局所的な自生のため絶滅が危惧される。

主な危険要因

園芸採取、特殊分布

県内では脆弱性の高い限られた環境下のみで生育している。収集家による採取も考えられる。

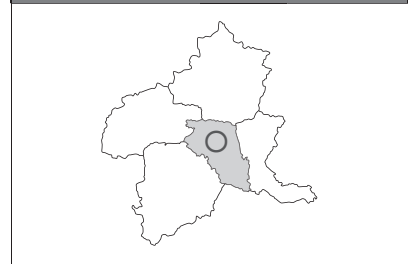
特記事項

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
------	------

産地数	現存	4
	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



イラモミ

種子植物・マツ目
マツ科*Picea alcoquiana* (Veitch. ex Lindl.) Carriere

評価理由

8地点中6地点で生育が確認されたが、いずれの地点でも個体数はごく少数である。遺存的な種と考えられる。伐採によって減少したと考えられる。

主な危険要因

動物食害 (シカ)、森林伐採、その他 (希少)

株数が少ないことに加え、分布域と隣接地域の一部は伐採され減少した。近年は実生のニホンジカによる食害の影響もあると推定される。

特記事項

急峻な山地に生育するため分布域の確認は困難だが、遺存的で個体密度は低く、現存する株数は50株未満と見積られる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
------	------

産地数	現存	6
	不明	2
	絶滅	0

県内分布状況



チョウセンゴヨウ

種子植物・マツ目
マツ科*Pinus koraiensis* Siebold et Zucc.

評価理由

7地点で少数の個体が確認された。遺存的な種と考えられる。伐採されたことに加え、園芸採取やニホンジカの影響により実生・稚樹の減少があると思われる。

主な危険要因

森林伐採、動物食害 (シカ)、園芸採取

分布域では伐採された。今も庭木とするために実生や稚樹が採取されている。ニホンジカの地表攪乱によって稚樹が影響を受ける可能性がある。

特記事項

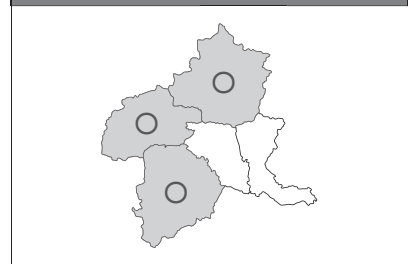
急峻な山地に生育するため分布域の確認は困難だが、遺存的で個体密度は低く、現存する株数は50株未満と見積られる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
------	------

産地数	現存	7
	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



オニバス

種子植物・スイレン目
スイレン科

Euryale ferox Salisb.

評価理由	5地点中2地点で生育が確認された。株数の年変動が大きく、保全活動に依存している傾向が強い。
主な危険要因	池沼開発、動物食害*、その他（除草） すでに絶滅した地点では、池沼の浚せつや水質汚濁、干拓が減少要因である。保護地ではアメリカザリガニの実生への食害が知られている。
特記事項	自生株や埋土種子由来の個体をもとに保護増殖された場所がある。アメリカザリガニの駆除や水位の管理などの保全活動の結果、辛うじて絶滅を免れている。一方、保護増殖地以外では、とげのある害草として除草されることもある。

*動物食害：アメリカザリガニ

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	2
5	不明	0
	絶滅	3



マルバウマノスズクサ

種子植物・コショウ目
ウマノスズクサ科

Aristolochia contorta Bunge

評価理由	5地点で記録があるが、今回の調査で再確認することはできなかった。うち2地点では絶滅したと考えられる。
主な危険要因	道路工事、土地造成（その他）、外来種競合・交雑 人里近くに生育するため、道路工事や築堤工事、また公園整備などの影響を受けやすい。さらに大型の外来種の侵入や管理放棄によっても減少したと考えられる。
特記事項	ウマノスズクサと並んでジャコウアゲハの食草であり、その食害も心配される。また、一部マニアによる採取もある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定性	
産地数	現存	0
5	不明	3
	絶滅	2



オオヤマレンゲ

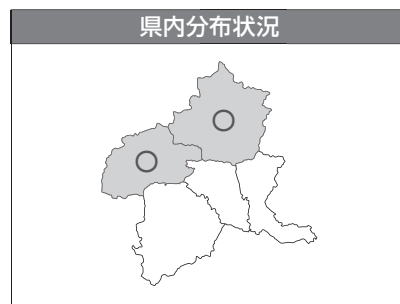
種子植物・モクレン目
モクレン科

Magnolia sieboldii K.Koch subsp. *japonica* K.Ueda

評価理由	8地点で記録があるが、いずれの地点でも個体数は少ない。
主な危険要因	園芸採取、その他（登山道整備） 登山道沿いに生育し、花期には花が目立つため、園芸採取の危険性がある。加えて、登山道整備により生育地の消失も想定される。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	8
8	不明	0
	絶滅	0



I
II
種
の
解
説

(1) 絶滅
(2) 野生絶滅
(3) 絶滅危惧 I A 類
(4) 絶滅危惧 I B 類
(5) 絶滅 II 類
(6) 準絶滅危惧
(7) 情報不足

ヒガンmamシグサ

種子植物・オモダカ目
サトイモ科*Arisaema aequinoctiale* Nakai et F.Maek.

評価理由

5地点中3地点で生育が確認されたが、どの地点でも個体数はわずかである。分布の北限にあたり生育基盤は脆弱である。

主な危険要因

園芸採取、分布限界、自然遷移
いずれの生育地でも個体数は少なく、園芸採取や環境の変化により容易に消失する。

特記事項

県レッドデータブック（2001）ではヨシナガmamシグサ（絶滅）として評価された。ヨシナガmamシグサは本種のシノニム（同物異名）とされる（邑田 2011）。大半はニホンジカの食害が激しい地域に分布するが、現在のところニホンジカの嗜好性は低い。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量 D

産地数	現存	3
	不明	0
	絶滅	2

県内分布状況



シコクヒロハテンナンショウ

種子植物・オモダカ目
サトイモ科*Arisaema longipedunculatum* M.Hotta var. *longipedunculatum*

評価理由

同一市町村の3地点から約80株が確認された。ニホンジカによる食害により衰退していると考えられる。

主な危険要因

動物食害（シカ）、園芸採取、分布限界
ニホンジカによる食害によりサイズが小型化し、開花株の減少が著しい。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。近年群馬県にも分布することが判明した。群馬県は分布の北限である。テンナンショウ類は株の性が個体のサイズに依存しており、ニホンジカ食害による小型化によって雌雄性株はわずかしみられない状況である。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 I B 類

判定基準

定量簡易 ACD

産地数	現存	3
	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



トウゴクヘラオモダカ

種子植物・オモダカ目
オモダカ科*Alisma rariflorum* Sam.

評価理由

5地点中3地点で確認されている。生育地点が水田やそれに接する湿地のため、除草によって株数が抑えられている。

主な危険要因

農薬汚染、湿地開発、その他（除草）
現在では水田に出現する機会が多く、除草作業により減少している。東部地域の自然湿地にも生育していたが、開発などによりすでに絶滅した。

特記事項

県植物誌改訂版(1987)には記録がない。2005年になって生育が確認されたが、その後ヘラオモダカと同定された標本のうち、館林市や前橋市内で採取されたものの一部が本種であることが判明した（証拠標本：GMNHJ-BS-40009、53711）。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準

定性

産地数	現存	3
	不明	0
	絶滅	2

県内分布状況



ヤナギスブタ

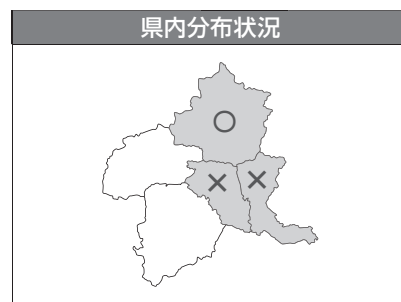
種子植物・オモダカ目
トチカガミ科

Blyxa japonica (Miq.) Maxim. ex Asch. et Gürke

評価理由	過去に記録がある4地点では絶滅が確認されたか、生育を確認できない状態が続いている。これらとは別の1点で新たに生育が確認された。
主な危険要因	土地造成（圃場整備）、農薬汚染、管理放棄 現存生育地については管理放棄が危惧される。近年まで残った生育地の減少理由は圃場整備、水田周辺の工事と農薬使用による環境悪化である。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
産地数	現存 1 不明 1 絶滅 3
5	



トチカガミ

種子植物・オモダカ目
トチカガミ科

Hydrocharis dubia (Blume) Backer

評価理由	7地点中2地点で生育が確認された。いずれの地点でも分布面積が小さく、隣接する農地からの除草剤の影響も危惧される。
主な危険要因	池沼開発、水質汚濁、農薬汚染 池沼や河川の開発や水系の分断、隣接する水田からの除草剤流入が減少要因として考えられる。
特記事項	県レッドデータブック(2001)では絶滅とされた。県レッドデータブック(2012)発行後複数地点で生育が確認されている。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量簡易 ACD
産地数	現存 2 不明 0 絶滅 5
7	



ムサシモ

種子植物・オモダカ目
トチカガミ科

Najas ancistrocarpa A.Braun ex Magnus

評価理由	1990年代に東部地域で採集され、トリゲモと同定された標本が本種であることが判明した。採集地周辺を調査したが、生育を確認できなかった。
主な危険要因	土地造成（圃場整備）、農薬汚染 水田で採集されたため、圃場整備や除草剤の使用が減少要因である。
特記事項	2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。トリゲモ類の中でも攪乱後一時的に発生して、その後種子休眠することが多い一年生の種であるため、生育の確認は難しい。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 I B 類

判定基準	定性
産地数	現存 0 不明 1 絶滅 0
1	



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

ホッスモ

種子植物・オモダカ目
トチカガミ科

Najas graminea Delile

評価理由

5地点で記録があるが、今回の調査では生育を確認できなかった。中山間地の水田の管理放棄により、存続が危ぶまれる状態である。

主な危険要因

管理放棄、農薬汚染

現在、最大の減少要因は耕作放棄による放棄水田の遷移進行であると考えられる。また、除草剤の使用も生育地の局限化の要因になっていると考えられる。

特記事項

過去にイトトリゲモと混同されてきた。2000年以降にも確認された生育地はすべて、高齢化・過疎化とイノシシやニホンジカの食害により管理放棄が加速した中山間地にある。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

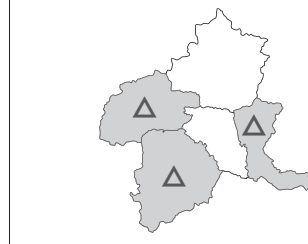
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定性

産地数	現存	0
5	不明	3
	絶滅	2

県内分布状況



オオトリゲモ

種子植物・オモダカ目
トチカガミ科

Najas oguraensis Miki

評価理由

6地点中2地点で生育が確認された。1地点で台風に伴う土砂埋没により今回新たに絶滅した。

主な危険要因

農薬汚染、水質汚濁、その他（災害）

池沼への除草剤の流入や水質汚濁、開発が主な減少要因となる。また、災害による埋没や流失によって消失する場合もある。

特記事項

かつて本種に対する認識が低く、トリゲモと誤認されることが多かった。知られていない場所に突然発生する場合があります注意が必要である。2019年の令和元年台風第19号により、1地点で完全に土砂に埋没し絶滅した。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

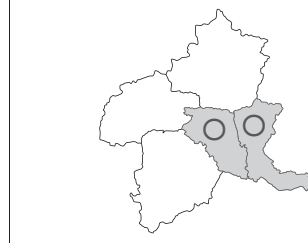
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量簡易ACD

産地数	現存	2
6	不明	0
	絶滅	4

県内分布状況



イトイバラモ

種子植物・オモダカ目
トチカガミ科

Najas yezoensis Miyabe

評価理由

1地点のみで生育が確認された。生育環境はやや特殊で株数が少なく、周辺の整備によって消失することが考えられる。

主な危険要因

池沼開発

園芸目的で採取される危険性は低いが、遊歩道や排水路などの水際の整備が危険要因となると考えられる。

特記事項

2010年に本県で初めて記録された（証拠標本：GMNHJ-BS-13723）。長らく北海道と青森のみに分布する種とされたことや、本種を含むイバラモ属は互いに形態が類似しており、分類が難しいことが発見の遅れた理由として考えられる。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

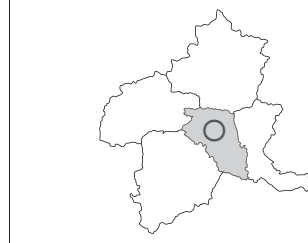
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準

定量簡易ACD

産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



コウガイモ

種子植物・オモダカ目
トチカガミ科

Vallisneria denseserrulata (Makino) Makino

評価理由	8地点中5地点で生育が確認された。3地点では河川改修や除草剤散布のため絶滅した。平野にのみ生育し、生育地点でも常に工事や環境悪化にさらされている。
主な危険要因	河川開発、農薬汚染、土地造成（圃場整備） 本県では平野部にのみ分布する水草のため、河川改修、水質汚濁、除草剤の影響を受けやすい。
特記事項	2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。本来は殖芽によりしばしば大規模な集団を形成する種。河川や水路に生えるため、種子や切れ藻の発生源となる上流側の集団を確保することが重要である。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠB類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 A	
産地数	現存	5
8	不明	0
	絶滅	3



ツツイトモ

種子植物・オモダカ目
ヒルムシロ科

Potamogeton pusillus L.

評価理由	1950年に採集された標本により、本県に生育していたことが判明した。その産地では絶滅したが、別の地点に現存することが今回判明した。
主な危険要因	池沼開発、その他（除草） 過去の沼の改修工事が壊滅的な影響を与えたと考えられる。現存地点では、釣り客による引き上げ除草や護岸整備が脅威となっている。
特記事項	2018年改訂版レッドリスト絶滅。みどり市では、湖沼開発により絶滅した。現存産地のものは、長らくイトモとして記録されてきたものと考えられるが、殖芽の形態から、ツツイトモに同定した。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	絶滅
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
2	不明	0
	絶滅	1



キバナノアマナ

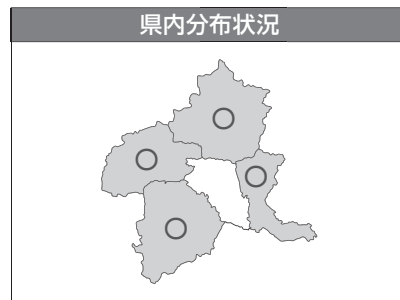
種子植物・ユリ目
ユリ科

Gagea lutea (L.) Ker Gawl.

評価理由	8地点中7地点で生育が確認されているが、いずれも株数は少ない。ほぼすべての地点でニホンジカまたはイノシシが侵入し、減少傾向が続いていると考えられる。
主な危険要因	動物食害*、道路工事、その他（不法投棄） すべての生育地でニホンジカやイノシシの食害が確認された。道路下や林縁の生育地では、廃棄物が投棄されることもある。また、目立つ開花個体は採取されやすい。
特記事項	集落に近い場所では、動物食害に加え、道路工事や不法投棄の影響もみられる。尾瀬でもニホンジカの食害により開花個体数の極端な減少がみられる。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	7
8	不明	1
	絶滅	0



*動物食害：ニホンジカ、イノシシ

I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧ⅠA類

(4) 絶滅危惧ⅠB類

(5) 絶滅危惧Ⅱ類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

ヤマホトトギス

種子植物・ユリ目
ユリ科*Tricyrtis macropoda* Miq. var. *macropoda*

評価理由

3地点で生育が確認された。いずれの地点でも個体数が少ない。うち2地点ではニホンジカの食害が顕著で、残りの地点では園芸採取の危険性がある。

主な危険要因

動物食害（シカ）、園芸採取、道路工事
2地点ではニホンジカによる食害が確認されている。また、残りの地点は比較的簡単に人が入れる立地のため、園芸採取が危惧される。

特記事項

県内における初記録は2002年である（証拠標本：GMNHJ-BS-6820）。2地点でニホンジカ食害によって開花が見込めない状況である。広域的なニホンジカの管理の成果が上がらない限り、絶滅が危惧される状態は続くと考えられる。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

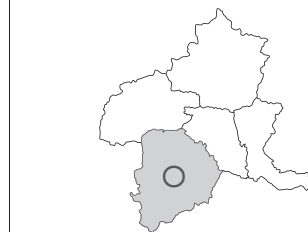
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量簡易ACD

産地数	現存	3
3	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



ミスズラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Androcorys pusillus* (Ohwi et Fukuy.) Masam.

評価理由

1地点のみで生育が確認された。生育個体数が極端に少なく、環境変化や災害によって容易に絶滅すると考えられる。

主な危険要因

その他（希少）、踏み付け
微小な植物であるため、踏み付けによる環境の悪化の影響が危惧される。

特記事項

生育地は国立公園内にあり、監視も行われている。2021年に国内希少野生動植物種に指定された。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

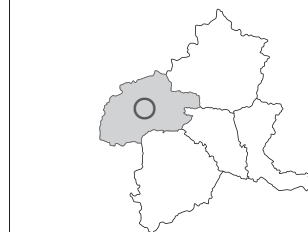
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	絶滅危惧ⅠA類

判定基準

定量D

産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



マメツタラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Bulbophyllum drymoglossum* Maxim. ex Okubo

評価理由

7地点で記録があるが、5地点で絶滅し2地点で現状不明であり、減少率が高い。

主な危険要因

園芸採取、河川開発、その他（岩石崩落）
絶滅した3地点は上記が要因だが、発見されればすぐに採取される確率が高い。

特記事項

桐生市と南牧村、下仁田町に知られていたが、いずれの生育地でも再発見されていない。特に下仁田のものはベニマメツタラン f. *atrosanguiflorum* Masam. et Satomi であった（前川 1971）。樹上や岩壁に生育するので見つけにくい植物であり、今後見つかる可能性がある。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

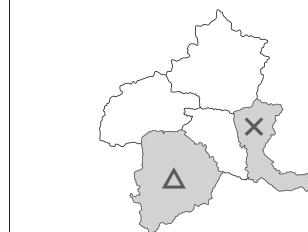
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準

定性

産地数	現存	0
7	不明	2
	絶滅	5

県内分布状況



ムギラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Bulbophyllum inconspicuum Maxim.

評価理由	4地点で記録があるが、1地点で絶滅し3地点で現状不明であり、減少率が高い。
主な危険要因	園芸採取、特殊分布 個体数が少ないため、園芸採取により容易に絶滅する。
特記事項	主に樹上生であるため目立たない植物であることから、今後見つかる可能性はある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定性	
産地数	現存	0
4	不明	3
	絶滅	1



キンセイラン

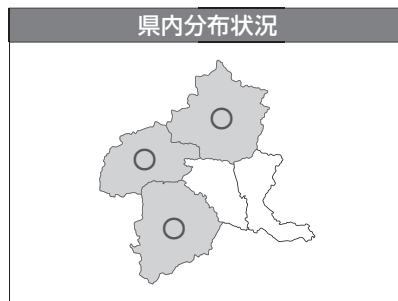
種子植物・キジカクシ目
ラン科

Calanthe nipponica Makino

評価理由	5地点中3地点で生育が確認されたが、いずれの地点でも株数はわずかである。園芸採取が継続している。
主な危険要因	園芸採取、森林伐採、動物食害* 伐採の影響を受けたが、近年の最大の危険要因は園芸採取と考えられる。また、近年ニホンジカやイノシシの個体数が増加しつつある生育地が多い。
特記事項	栽培が難しい種であるが、園芸目的の採取が絶えない。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	3
5	不明	0
	絶滅	2



*動物食害：ニホンジカ、イノシシ

ナツエビネ

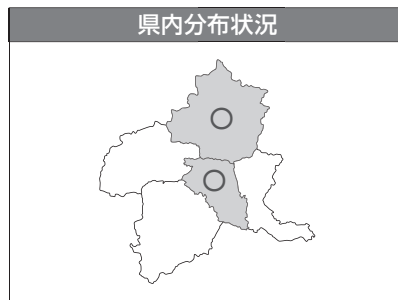
種子植物・キジカクシ目
ラン科

Calanthe puberula Lindl. var. *reflexa* (Maxim.) M.Hiroe

評価理由	7地点中4地点で生育が確認されたが、いずれにおいても株数はわずかである。残り3地点のうち2地点では園芸採取により絶滅した。
主な危険要因	園芸採取、動物食害（シカ） 個体数が少ないため、園芸採取によるリスクが高い。また、ニホンジカの個食害が目立ってきた生育地もある。
特記事項	特定県内希少野生動植物種に指定されている。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	4
7	不明	1
	絶滅	2



サルメンエビネ

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Calanthe tricarinata* Lindl.

評価理由

17地点で記録されているが、現在は11地点に少数の個体が生育するのみである。加えて典型的な園芸採取の対象であり、減少・絶滅が危惧される。

主な危険要因

園芸採取、森林伐採
生育地が限られていたり、独特な花形をしていることから園芸採取の対象種となっている。

特記事項

もともと限られた環境の中に、単独個体が生育するか少数の株が散生することが多い種である。森林伐採やリゾート開発などによる環境変化にも弱く、生育環境を広範囲にわたって保全することが望ましい。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

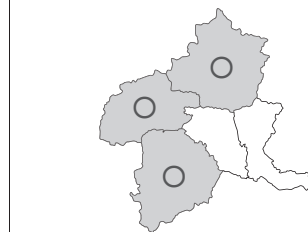
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準

定量簡易ACD

産地数	現存	11
17	不明	5
	絶滅	1

県内分布状況



ユウシュンラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Cephalanthera erecta* (Thunb.) Blume var. *subaphylla* (Miyabe et Kudô) Ohwi

評価理由

4地点中2地点でごく少数の株が確認された。踏みつけや園芸採取が危惧される。

主な危険要因

園芸採取、踏みつけ、その他（崩壊）
現存個体数はごくわずかである。園芸採取に加え、土壌が浅い場所に生育するため、土壌の崩壊や流出の影響も危惧される。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。発生個体数が少ないため、わずかな園芸採取であっても致命的な事態に直結する。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2012)	情報不足
群馬県 (2001)	情報不足
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準

定量D

産地数	現存	2
4	不明	2
	絶滅	0

県内分布状況



クゲヌマラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Cephalanthera longifolia* (L.) Fritsch

評価理由

1地点でごく少数の株が確認されたのみである。園芸採取によりすべて持ち去られることも考えられる。

主な危険要因

園芸採取、道路工事
比較的目に付きやすい場所に発生するため、園芸採取に遭う危険性が高い。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。ギンラン（絶滅危惧Ⅱ類：210ページ）の品種ヤビツギランが本種と誤認されることも多く、注意が必要である。県内で過去にクゲヌマランとされたものは、すべてヤビツギランで、2019年にそれらとは別地点で確認された。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

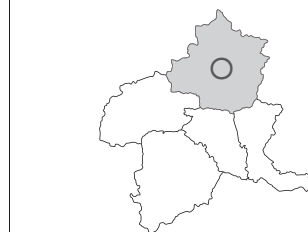
群馬県 (2018)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準

定量D

産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



ムカデラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Cleisostoma scolopendrifolium (Makino) Garay

評価理由	3地点中1地点で生育が確認されたが、株数はわずかである。園芸目的のためわずかに残った株まで採取されている。
主な危険要因	園芸採取、その他（擁壁工事）、分布限界 ダム工事や擁壁工事により減少したが、近年は園芸採取による減少が顕著である。
特記事項	特定県内希少野生動植物種に指定されている。ただし、わずかに残った株が無性的に増えてはまた園芸採取に遭う、という事態を繰り返している。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数 3	現存	1
	不明	0
	絶滅	2



マヤラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Cymbidium macrorhizon Lindl.

評価理由	5地点で生育が確認されているが、いずれの地点でも株数が少ない。雑木林の遷移進行のほか、分布域が大規模なソーラー発電所の集中する地域と一致する。
主な危険要因	自然遷移、土地造成（ソーラー）、園芸採取 遷移にともなう環境の変化とともに、大規模なソーラー発電所の建設によって、生育環境ごと消失する可能性がある。
特記事項	県内における初記録は2004年（証拠標本：GMNHJ-BS-8021）。過去10年間に新たに3地点から記録されたが、分布地点が増えたと言うより、本種を含むラン科植物に関心をもつ人が増え、発見機会が増えたことによるものと考えられる。1生育地の林が皆伐され、数年開花はなかったが、林の再生に伴い復活した。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量 D	
産地数 5	現存	5
	不明	0
	絶滅	0



サガミランモドキ

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Cymbidium nipponicum (Franch. et Sav.) Rolfe

評価理由	3地点中2地点で生育が確認されている。生育株数は合計50株未満である。また、分布域が大規模なソーラー発電所の集中する地域と一致する。
主な危険要因	自然遷移、土地造成（ソーラー）、園芸採取 遷移にともなう環境の変化とともに、大規模なソーラー発電所の建設によって、生育環境ごと消失する可能性がある。
特記事項	県植物誌改訂版（1987）では1地点で記録があるのみだった。前回と今回のレッドデータブック改訂調査時にそれぞれ1地点から新規に発見された。かつてはマヤランの品種とされることが多かったが、現在は独立した種として扱われる。1生育地の林が皆伐され、数年開花は認めなかったが、林の再生に伴い少数復活した。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	絶滅危惧 I B 類

判定基準	定量 D	
産地数 3	現存	2
	不明	0
	絶滅	1



クマガイソウ

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Cypripedium japonicum* Thunb. var. *japonicum*

評価理由

12地点で記録があるが、そのうち9地点で絶滅し、生育が確認されたのは1地点のみである。園芸採取の対象として採取され減少した。

主な危険要因

園芸採取、動物食害（シカ）、管理放棄
人里近くの分布地は、短期間に園芸目的の採取が行われて絶滅した。山地に残る分布地は、園芸採取に加えて管理放棄や動物食害もあり環境が悪化している。

特記事項

山地に残る1地点は、地元の保護団体による見守り活動が行われている。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)

群馬県 (2012)

群馬県 (2001)

環境省 (2020)

絶滅危惧ⅠA類

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

判定基準

定量簡易ACD

産地数

12

現存

1

不明

2

絶滅

9

県内分布状況



アツモリソウ

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Cypripedium macranthos* Sw. var. *speciosum* (Rolfe) Koidz.

評価理由

15地点で記録があるが、13地点で絶滅した。今回確認できたのは1地点のみで、他の1地点は過去10年間に確認できない状態になった。

主な危険要因

園芸採取、管理放棄、草地開発
花が目立つため、開花期になると報道されることがある。産地の情報はインターネット上で知れわたり、残りわずかになった生育地でも園芸採取されている。

特記事項

国内希少野生動植物種に指定され、販売や採取に対して規制が設けられている。しかし法施行前に大量に採取されたことに加え、法施行後も園芸目的で採取されていると思われる。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)

群馬県 (2012)

群馬県 (2001)

環境省 (2020)

絶滅危惧ⅠA類

絶滅危惧ⅠA類

情報不足

絶滅危惧Ⅱ類

判定基準

定量簡易ACD

産地数

15

現存

1

不明

1

絶滅

13

県内分布状況



アオチドリ

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Dactylorhiza viridis* (L.) R.M.Bateman, A.M.Pridgeton et M.W.Chase

評価理由

8地点中4地点で生育が確認されたが、いずれの地点でも株数はわずかである。遷移によるササの繁茂や園芸採取により減少している。

主な危険要因

自然遷移、園芸採取
遷移進行によるササの繁茂のほか、園芸採取の影響が大きいと考えられる。

特記事項

群生することがなく単体または数個体で生えており確認が難しいため、過去に記録がある地点でも、再確認できない場合が多い。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)

群馬県 (2012)

群馬県 (2001)

環境省 (2020)

絶滅危惧ⅠA類

絶滅危惧ⅠA類

指定なし

指定なし

判定基準

定量D

産地数

8

現存

4

不明

2

絶滅

2

県内分布状況



セッコク

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Dendrobium moniliforme (L.) Sw.

評価理由	かつて岩上や樹上に広く生育していたと思われるが、人の手が届く生育地の多くは園芸採取によって消滅した。
主な危険要因	園芸採取、森林伐採、特殊分布 園芸採取圧の高い種であり、相当な危険を冒してまで採取する事例が後を絶たない。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 A	
産地数	現存	6
9	不明	3
	絶滅	0



キリガミネアサヒラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Eleorchis japonica (A.Gray) F.Maek. var. *conformis* (F.Maek.) F.Maek. ex H.Hara et M.Mizush.

評価理由	2地点で過去20年以内に生育が確認されているが、いずれも同一地域内にある。個体数は極めて少ない。
主な危険要因	特殊分布、その他（希少） 株数が少なく気づかれることは少ない。また、局所的な環境の変化で消失するリスクがある。
特記事項	生育地は国立公園内にある。生育株数は極めて少ない。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 I B 類

判定基準	定性	
産地数	現存	2
2	不明	0
	絶滅	0



カキラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Epipactis thunbergii A.Gray

評価理由	20地点中9地点で生育が確認された。園芸採取が続き、厳重な監視がとられている場所を除き、極端に減少している。
主な危険要因	園芸採取、動物食害（シカ） ニホンジカが侵入した生育地もあるが、園芸採取が最大の減少要因である状態が続いている。
特記事項	現在まとまった株数がみられる生育地は厳重な監視体制がある場所だけである。それ以外の場所では、一度に数10株単位の園芸採取さえ横行している。監視体制への支援とともに、不法取引の厳罰化が求められる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	絶滅危惧 II 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 II 類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 A	
産地数	現存	9
20	不明	1
	絶滅	10



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅危惧 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

トラキチラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Epipogium aphyllum* Sw.

評価理由

緑葉をもたない植物で発見自体が困難であり、1地点で記録があるのみである。記録された地点の環境は安定しており、現存するが極めて少数と考えられる。

主な危険要因

その他（希少）、自然遷移
菌類に生育を依存する植物のため、林床の劣化によって菌類が生育できなくなると絶滅する。

特記事項

生育地は国立公園内にある。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

群馬県 (2018)

群馬県 (2012)

群馬県 (2001)

環境省 (2020)

絶滅危惧 I A 類

情報不足

絶滅危惧 I B 類

判定基準

定性

産地数

現存

0

1

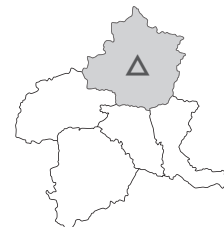
不明

1

絶滅

0

県内分布状況



アオキラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Epipogium japonicum* Makino

評価理由

真菌類に依存して生活するランで、緑葉をもたないため、発見が困難であり、2地点で記録があるのみである。

主な危険要因

その他（希少）、動物食害（シカ）、自然遷移
記録された地点は溪側の登山道脇で、豪雨による増水で流されたり、入山者の踏み付けに遭う危険性がある。

特記事項

県内における初記録は1988年（証拠標本：GMNHJ-BS-31944）であるが、今回生育地が1地点増えた。いずれの地点でも生育情報はあるが、ニホンジカの数が増えて林床の裸地化が進行し、生育環境の悪化が憂慮される。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

群馬県 (2018)

群馬県 (2012)

群馬県 (2001)

環境省 (2020)

絶滅危惧 I A 類

絶滅危惧 I A 類

絶滅危惧 I 類

絶滅危惧 I A 類

判定基準

定量 D

産地数

現存

2

2

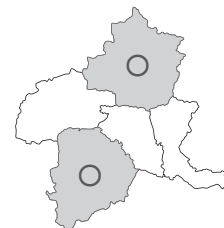
不明

0

絶滅

0

県内分布状況



シロテンマ

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Gastrodia elata* Blume var. *pallens* Kitag.

評価理由

6地点中3地点のみで生育が確認された。緑葉をもたない植物で発見自体が困難である。生育地あたりの株数はわずかであり、合計株数は50未満と推定される。

主な危険要因

園芸採取、自然遷移、動物食害（シカ）
栽培困難であるにもかかわらず採取されることがある。ニホンジカの落ち葉喰いなどで林床環境が変化し、生育環境が悪化しつつある。

特記事項

過去にはしばしばオニノヤガラの変種とされてきたが、サイズ、唇弁の形、花数、花期（オニノヤガラより遅い）が明らかに異なり、近年は変種以上の違いがあるとする見解が支持されることが多い。確認地点数は増加したが、生育環境は悪化している。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

群馬県 (2018)

群馬県 (2012)

群馬県 (2001)

環境省 (2020)

絶滅危惧 I A 類

絶滅危惧 I A 類

指定なし

絶滅危惧 I A 類

判定基準

定量 D

産地数

現存

3

6

不明

1

絶滅

2

県内分布状況



アキザキヤツシロラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Gastrodia verrucosa Blume

評価理由	同一市町村内の5地点で生育が確認された。最大生育地に道路着工の予定があり、また、特定の菌類に栄養を依存する生態のため、生育基盤が脆弱である。
主な危険要因	道路工事、森林伐採、管理放棄 限られた種類の竹林に依存しているため、生育は限定的である。竹林の開発計画、管理放棄が目立っているため、今後発生しなくなることも考えられる。
特記事項	2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。2016年に生育が確認された。生育立地はやや特殊で、特定の菌に依存するため、生育基盤は脆弱と考えられる。生育環境のわずかな変化によって発生しなくなることも考えられる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし
判定基準	定量 C
産地数	現存 5 不明 0 絶滅 0
5	
県内分布状況	

ツリシュスラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Goodyera pendula Maxim.

評価理由	6地点中4地点で確認された。各地点で確認個体数は5未満である。ただし、周辺に生育可能な環境はある。多くは高木上に着生しており、発見は難しい。
主な危険要因	園芸採取、森林伐採、自然遷移 渓流や湿地に近い場所の大木に着生が限定され、生育環境が脆弱である。特異な草姿から園芸の対象になる。
特記事項	県レッドデータブック (2001) 及び (2012) では、県内での分布パターンからヒロハツリシュスランを分けていた。しかし、利根沼田地域においても狭義ツリシュスランに該当するものが記録され、狭義ツリシュスランとヒロハツリシュスランの葉形やサイズの変異は段階的であるため、今回両者を統合し、評価した。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし
判定基準	定量 D
産地数	現存 4 不明 2 絶滅 0
6	
県内分布状況	

ヒメミヤマウズラ

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Goodyera repens (L.) R.Br.

評価理由	4地点中2地点で生育が確認された。個体数は今回確認されなかった産地を含め10未満である。
主な危険要因	園芸採取、動物食害 (シカ) 個体数が極めて少なく、園芸採集の対象となりうることから、どの地点でも絶滅しうる状況にある。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	指定なし
判定基準	定量 D
産地数	現存 2 不明 2 絶滅 0
4	
県内分布状況	

ムカゴソウ

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Herminium lanceum* (Thunb. ex Sw.) J.Vuijk

評価理由

5地点中1地点のみでごく少数の生育が確認された。現存産地以外の記録はいずれも30年以上前のもので、絶滅リスクは極めて高いと考えられる。

主な危険要因

園芸採取、自然遷移、管理放棄
生育地の管理放棄にともなう大形植物の侵入に加えて園芸や標本目的の採取が主な危険要因である。

特記事項

特定県内希少野生動植物種に指定されている。現存する生育地はニホンジカの侵入が著しい。本来は関係者以外立ち入らない場所であるが、近年盗掘被害がみられる。本種は生育個体数が少なく、分布地点が限定されるので、一度の採取であっても絶滅の危険性が增大する。

今回評価

絶滅危惧IA類

群馬県 (2018)

群馬県 (2012)

群馬県 (2001)

環境省 (2020)

絶滅危惧IA類

指定なし

絶滅危惧IB類

判定基準

定量D

産地数

5

現存

1

不明

3

絶滅

1

県内分布状況



フガクスズムシソウ

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Liparis fujisanensis* F.Maek. ex F.Konta et S.Matsumoto

評価理由

4地点で生育が確認された。生育環境は特殊で、局所的な環境の変化に対する脆弱性が極めて高いと思われる。

主な危険要因

特殊分布、園芸採取
生育環境は特殊で、周辺の環境変化に対する脆弱性が高いと考えられる。

特記事項

県植物誌改訂版(1987)には記録がなく、県内ではその後発見された。分布地は国立公園内にあり、一般人が立ち入れないところにも生育環境はある。

今回評価

絶滅危惧IA類

群馬県 (2018)

群馬県 (2012)

群馬県 (2001)

環境省 (2020)

絶滅危惧IA類

絶滅危惧IA類

指定なし

絶滅危惧II類

判定基準

定量D

産地数

4

現存

4

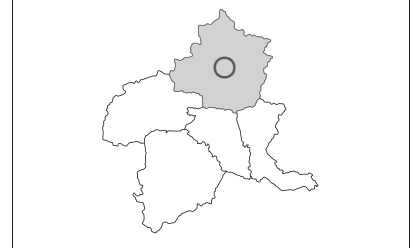
不明

0

絶滅

0

県内分布状況



セイタカスズムシソウ

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Liparis japonica* (Miq.) Maxim.

評価理由

3地点中1地点でごく少数の生育が確認できたのみである。花期には目立つため、園芸採取の影響が危惧される。

主な危険要因

園芸採取、動物食害(シカ)
アクセスが難しくなく、保護体制が整っていない地域に生育する。この属も愛好家が多く、園芸採取の対象になりやすい。

特記事項

監視体制の向上とともに、自生域の山林への無秩序な立ち入りを制限する必要がある。国立公園内の生育地も、監視体制は必ずしも整っていない。

今回評価

絶滅危惧IA類

群馬県 (2018)

群馬県 (2012)

群馬県 (2001)

環境省 (2020)

絶滅危惧IA類

絶滅危惧IA類

指定なし

指定なし

判定基準

定量D

産地数

3

現存

1

不明

2

絶滅

0

県内分布状況



シテンクモキリ

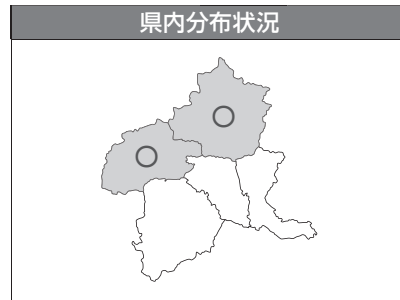
種子植物・キジカクシ目
ラン科

Liparis purpureovittata Tsutsumi, Yukawa et M.Kato

評価理由	6地点から確認されたが、分布が1地域に偏っており、かつ生育地あたりの個体数が少ない。園芸採取のリスクも高い。
主な危険要因	園芸採取、動物食害（シカ） 産地あたりの個体数は少ない。そのため、園芸採取による生育地の消滅が危惧される。また、分布域の一部にニホンジカが侵入している。
特記事項	Tsutsumi <i>et al.</i> (2008) で新種記載されたもので、従来クモキリソウと混同されてきた。今後、認知度が高まるにつれ分布が明らかになると思われるが、それは併せて園芸採取リスクも高まることを意味する。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	6
8	不明	0
	絶滅	2



ホザキイチヨウラン

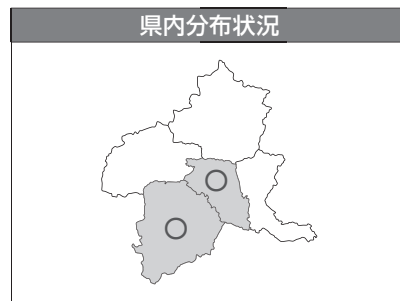
種子植物・キジカクシ目
ラン科

Malaxis monophyllos (L.) Sw.

評価理由	7地点中4地点で生育が確認されたが、どの生育地でも株数は少ない。採取によって減少し、多くの生育地はニホンジカの侵入によって周囲に食害が認められる。
主な危険要因	園芸採取、動物食害（シカ） 比較的分布地点が少なく、園芸採取により減少した。分布域の多くにはニホンジカが侵入し、林床や林縁の植生が変化している。
特記事項	県レッドデータブック (2012) では絶滅危惧 I B 類に評価されたが、1地点あたりの生育個体数が少ないため、今回評価を見直した。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	4
7	不明	2
	絶滅	1



ヤチラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Malaxis paludosa (L.) Sw.

評価理由	3地点で生育が確認された。もともと分布地点や生育環境が限定され、株数が少ないため、生育基盤が極めて脆弱であると考えられる。
主な危険要因	特殊分布、動物食害（シカ） 生育環境が限定され、さらに生育面積も極端に小さいため、ニホンジカの踏み荒らしなどの局所的な環境変化によって容易に絶滅しうると考えられる。
特記事項	生育地はすべて国立公園内にある。ニホンジカの踏み付けによって地表の攪乱が起きており、今後、本種の生育に影響を及ぼす危険性がある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 I B 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	3
3	不明	0
	絶滅	0



ヒメムヨウラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Neottia acuminata* Schltr.

評価理由

緑葉をもたない植物で発見自体が困難であり、1地点で記録があるのみである。過去10年間の記録はないが、生育環境は残存している。

主な危険要因

自然遷移、動物食害（シカ）

生育地は人為的な影響が少ないが、ニホンジカによる落ち葉食いや林床破壊による土壌流出により生育環境の劣化が進んでいるとみられる。

特記事項

他の緑葉をもたないランと同様に何年も開花せず根は地中で生存し続けていると考えられるが、実態は不明である。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定性	
産地数	現存	0
1	不明	1
	絶滅	0

県内分布状況



サカネラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Neottia papilligara* Schltr.

評価理由

緑葉をもたない植物で発見自体が困難であり、1地点で記録があるのみである。産地は遷移によりササが繁茂しており、絶滅した可能性もある。

主な危険要因

自然遷移

生育地一帯の林床は遷移によってササが密生した場所が多い。このため、生育可能立地は減少していると考えられる。

特記事項

他の緑葉をもたないランと同様に何年も開花せず根は地中で生存し続けていると考えられるが、実態は不明である。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	情報不足
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定性	
産地数	現存	0
1	不明	1
	絶滅	0

県内分布状況



ムカゴサイシン

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Nervilia nipponica* Makino

評価理由

2018年に本県で初めて自生が確認された。生育は1地域2地点で、年により個体数に変動があり、実態は不明。開花個体は極めて少数である。

主な危険要因

園芸採取、自然遷移

生育地情報が知られれば、盗掘や踏みつけで即絶滅となりかねない。生育地は豪雨等で土砂崩れの危険性もあり脆弱である。タケ類やつる性植物が拡張しつつある。

特記事項

生育地の一部には電気機器等が不法投棄されている。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定量 D	
産地数	現存	2
2	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



ヨウラクラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Oberonia japonica (Maxim.) Makino

評価理由	2地点で記録があるが、今回の調査では再確認できなかった。手の届くところの株は採取しつくされたが、発見困難な種であり、残存している可能性もある。
主な危険要因	園芸採取、森林伐採、特殊分布 採取困難な場所に残存する可能性がある。分布域が特定されると未知の産地を含めて探索される危険性がある。
特記事項	「日本の野生植物 草本編Ⅰ」では、渋川市で1971年に撮影された写真が用いられている（里見 1982）が、場所は不明のままである。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	情報不足
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定性	
産地数	現存	0
2	不明	2
	絶滅	0



コケイランモドキ

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Oreorchis coreana Finet

評価理由	今回の調査期間に1地点で記録された。個体数は20株ほどで、局所的である。
主な危険要因	園芸採取、動物食害（シカ） 局所的な種のため、1回の園芸採取によっても絶滅することが想定される。
特記事項	2016年に国内に生育することが報告された（Takashima et al. 2016）。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0



イヌマムカゴ

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Platanthera iinumae (Makino) Makino

評価理由	過去に記録がある地点では、その後の確認されていない。それとは別に今回1地点で新たに確認された。
主な危険要因	園芸採取、動物食害（シカ）、森林伐採 分布地点、個体数がともに少ない種のため、わずかな採取であっても致命的な影響が考えられる。
特記事項	県内では長らく証拠標本さえみつからない状態だったが、2018年に、過去に記録された地点とは別地点から発見された。このため、ランクを絶滅危惧ⅠA類に確定した。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	情報不足
群馬県 (2001)	情報不足
環境省 (2020)	絶滅危惧ⅠB類

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
2	不明	1
	絶滅	0



- (1) 絶滅
- (2) 野生絶滅
- (3) 絶滅危惧ⅠA類
- (4) 絶滅危惧ⅠB類
- (5) 絶滅危惧Ⅱ類
- (6) 準絶滅危惧
- (7) 情報不足

ツレサギソウ

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Platanthera japonica* (Thunb.) Lindl.

評価理由

15地点中4地点で、いずれも少数個体の生育が確認された。もともと生育地あたりの株数は少ない上に、継続的な減少が認められる。

主な危険要因

園芸採取、動物食害^{*}、その他（植林）
自然遷移や草地への植林によって生育地が減少傾向にあることに加え、園芸採取によっても減少していると考えられる。

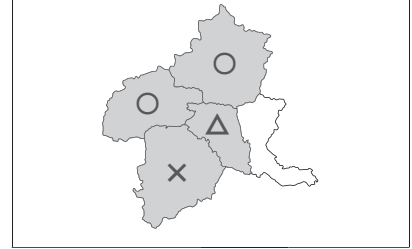
特記事項

*動物食害：ニホンジカ、イノシシ

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易ACD	
産地数	現存	4
15	不明	8
	絶滅	3

県内分布状況



ミヤマチドリ

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Platanthera takedae* Makino subsp. *takedae*

評価理由

1地点で記録があるが、今回の調査では現存が確認できなかった。もともとまれな種である上に収集家による採取圧が高いと考えられる。

主な危険要因

園芸採取、自然遷移
もともと産地が限られる。収集家による採取や撮影する際の踏み付け被害が大きいと考えられる。

特記事項

群馬県レッドデータブック（2012）の記録地点のうち、西部地域の1地点は、本種の分布域・生育環境と矛盾するため、誤同定の可能性が高いと考えられる。このため、今回過去の記録地点は1地点に修正した。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定性	
産地数	現存	0
1	不明	1
	絶滅	0

県内分布状況



ニョホウチドリ

種子植物・キジカクシ目
ラン科*Ponerorchis joo-iokiana* (Makino) Nakai

評価理由

3地点中2地点で生育が確認された。分布地点が少なく生育環境が限られる上に、取引を伴う園芸採取の対象となっている。

主な危険要因

園芸採取、動物食害（シカ）
大がかりな園芸採取による被害が確認されている。また、分布域はニホンジカの生息域となっている。

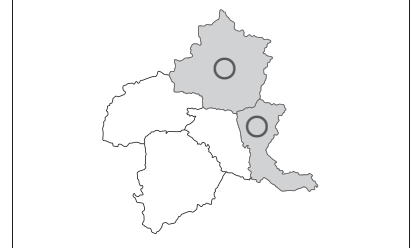
特記事項

特定県内希少野生動植物種に指定されているにもかかわらず、継続的に園芸採取の痕跡が確認されている。園芸採取が続いているため、今回ランクを修正した。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠB類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量A	
産地数	現存	2
3	不明	1
	絶滅	0

県内分布状況



ヒトツボクロ

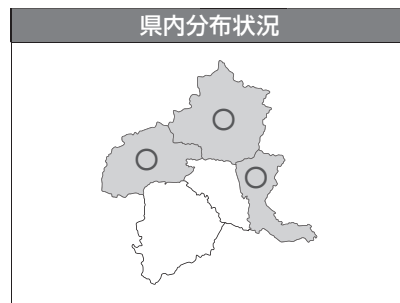
種子植物・キジカクシ目
ラン科

Tipularia japonica Matsum. var. *japonica*

評価理由	目立たない植物であるため新たに生育地が発見され11地点で記録がある。林床植物のため環境変化の影響を受けやすく、減少傾向にある。
主な危険要因	森林伐採、動物食害（シカ以外）、園芸採取 園芸採取の対象とされ、また、生育地が植林地に適した場所では、森林伐採や管理放棄で環境が変化すると衰退すると考えられる。
特記事項	もともと単独個体が生育するか少数個体が散生する種である。また登山道脇などに生育し、全体が目立たないため踏み付けによる被害も考えられる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数 11	現存	9
	不明	1
	絶滅	1



キバナノショウキラン

種子植物・キジカクシ目
ラン科

Yoania amagiensis Nakai et F. Maek.

評価理由	3地点中2地点で少数株が確認された。その周辺にも未確認の記録があるが、発見が難しい上に個体群密度は極めて低いと推定される。
主な危険要因	特殊分布、動物食害（シカ） 分布の北限に近く、もともと少ない上に、分布域の林床はニホンジカの落ち葉食いや踏み荒らしにより荒廃している。
特記事項	2018年のレッドリスト部分改訂時に絶滅危惧 I A 類にランクされた。腐葉土を分解する真菌類に依存して生活するランで、緑葉をもたないため発見が難しい。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	情報不足
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 I B 類

判定基準	定量 D	
産地数 3	現存	2
	不明	1
	絶滅	0



ヒメイズイ

種子植物・キジカクシ目
クサスギカズラ科

Polygonatum humile Fisch. ex Maxim.

評価理由	2地点中1地点で生育が確認された。園芸採取や遷移により容易に絶滅する状態にあると考えられる。
主な危険要因	園芸採取、自然遷移、道路工事 現状不明の産地では過去に大量に採取された。今回確認された生育地も園芸採取されやすい立地にある。
特記事項	国立公園内にあるが、何度も園芸目的で採取された。現在では植物やチョウの不法採取や捕獲に対して監視が行われている。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 C	
産地数 2	現存	1
	不明	1
	絶滅	0



ミズアオイ

種子植物・ツクサ目
ミズアオイ科*Monochoria korsakowii* Regel et Maack

評価理由

8地点で記録があるが、今回の調査では生育が確認できなかった。少なくとも3地点で近年の開花結実の記録がある。攪乱があれば発芽する可能性は高い。

主な危険要因

池沼開発、農薬汚染、土地造成（圃場整備）
平野部に生育地が限定されるため、圃場整備や除草剤散布の影響を受けやすい。また、池沼の護岸工事により消失する場合も多い。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。攪乱により大発生した後急速に衰退し、埋土種子で何年も経過することが多い。攪乱依存種で1年生草本のため生育が不安定である。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠB類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定性	
産地数	現存	0
8	不明	3
	絶滅	5

県内分布状況



ナガエミクリ

種子植物・イネ目
ガマ科*Sparganium japonicum* Rothert

評価理由

大規模な集団が1流域に存在する。一方、4地点で絶滅した。大集団が存在する河川にも侵略的外来種が侵入している。

主な危険要因

池沼開発、河川開発、外来種競合・交雑
保護されている地下水に依存しているため、生育環境が脆弱である。さらに競合する侵入外来種の繁茂により、一部生育が阻害されている。

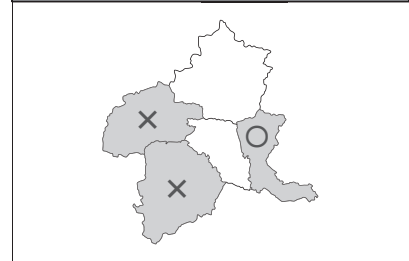
特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠB類。太陽光発電に伴う池沼改変や溜池の放棄により東部地域以外からはほぼ消失した。また、特定外来種と競合する生育地もある。地域の住民によって、保護活動がされるようになってきている。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	絶滅危惧ⅠB類
群馬県 (2012)	絶滅危惧Ⅱ類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量 A	
産地数	現存	1
5	不明	0
	絶滅	4

県内分布状況



ホソイ

種子植物・イネ目
イグサ科*Juncus setchuensis* Buchenau var. *effusoides* Buchenau

評価理由

1地点で生育が少数の確認されたほか、別の1地点で採集記録がある。河川流域で他の生育地がある可能性は高い。

主な危険要因

河川開発、外来種競合・交雑、その他（災害）
河川敷の開発のほか、氾濫に伴う埋没や流出が懸念される。外来種・コゴメイと生態や形態が類似し、競合関係にある。

特記事項

同定がやや難しく、関心をもたれにくいグループのため、正しく認識されず、コゴメイやイグサとの誤認が多い。県内での証拠標本を伴う記録はないが、湿地や休耕田にも生育する。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
2	不明	1
	絶滅	0

県内分布状況



ハタガヤ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Bulbostylis barbata (Rottb.) Kunth

評価理由	6地点で記録があるが、今回生育を確認できなかった。攪乱地や自然裸地に生育し、遷移や外来種との競合により減少した。
主な危険要因	自然遷移、農薬汚染、外来種競合・交雑 裸地的な環境を好み、遷移とともに消失する。また、畑や河川敷の公園では除草剤散布の影響を受ける。メリケンカルカヤなどの外来種と競合関係にある。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	0
6	不明	2
	絶滅	4



ハコネイトスゲ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Carex hakonemontana Katsuy.

評価理由	今回の調査期間に1地点で記録された。株数はごくわずかで、局所的である。
主な危険要因	特殊分布、動物食害（シカ） 生育地周辺は、何の保護制度の対象にもなっていない。生育地周辺にはニホンジカが侵入している。
特記事項	本種は関東南西部の山地のほかに、奥秩父、宮城県に隔離分布する（勝山 2015）。本県の生育地もそれら同様、特異な隔離分布地点と考えられる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0



アサマスゲ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Carex lithophila Turcz.

評価理由	1地点のみで生育が確認されている。生育地は極めて狭く、大半がソーラー発電施設造成工事の影響を受けた。
主な危険要因	土地造成（ソーラー） もともと生育面積は狭かったが、生育地のすぐ隣にソーラー発電施設が造成された。
特記事項	県内の生育地は当初河川改修や農地整備の影響が懸念されたが、ソーラー発電所造成に伴い、2019年現在花茎数6本まで減少した。全国的にも生育地点が少なく、保護された生育地がない種で、今後の保全と系統保存が求められる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0



I

II

1

2

3

4

種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅危惧 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

オオアオスゲ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科*Carex lonchophora* Ohwi

評価理由

1地点で250株が確認されたが、別の2地点では生育を確認できなかった。遷移の進行により衰退すると考えられる。

主な危険要因

自然遷移、土地造成（その他）
湿地林周辺の遷移の進行による大幅な減少が確認された。過去に記録がある1地点は公園・遊歩道造成がなされた。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。森林の遷移進行により急速に衰退する。また、現存生育地は保護地として管理されている。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

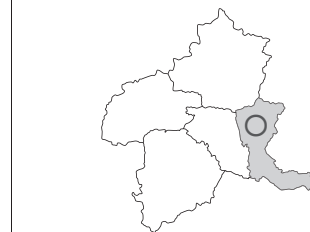
定量C

産地数

3

現存	1
不明	1
絶滅	1

県内分布状況



タチスゲ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科*Carex maculata* Boott

評価理由

1地点から2集団20個体が確認された。1集団では安定しているが、他方の集団は管理放棄により森林化が進み絶滅寸前である。

主な危険要因

管理放棄、池沼開発、踏み付け
休耕田の管理放棄・森林化により1地点では大幅に減少している。ため池の集団は池沼開発や釣り人の踏み付けが懸念される。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2012)	情報不足
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

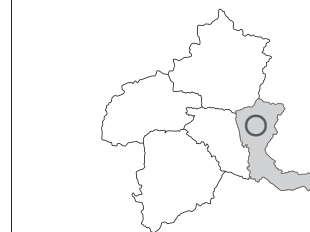
定量簡易ACD

産地数

1

現存	1
不明	0
絶滅	0

県内分布状況



ヌマクロボスゲ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科*Carex meyeriana* Kunth

評価理由

3地点中2地点では絶滅し、現存する1地点でも生育環境は劣悪な状態にある。

主な危険要因

湿地開発、自然遷移、水質汚濁
現存生育地は農地造成に加え、排水工事により乾燥化し、遷移が進行している。

特記事項

現存個体数が極端に少なく、かつ衰退傾向にあるため、施設等による系統保存も視野に入れる必要がある。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準

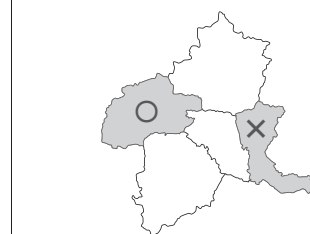
定量簡易ACD

産地数

3

現存	1
不明	0
絶滅	2

県内分布状況



クグスゲ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Carex pseudocyperus L.

評価理由

同一地域内の2地点で生育が確認されたが、うち1地点では池の水位上昇により数個体が残るだけである。既知の他の1地点では確認できなくなっていた。

主な危険要因

池沼開発、その他（水位変動）、自然遷移
池畔に生育するため、改修工事で絶滅する可能性がある。
1地点では水位上昇により大半の株が水没した。

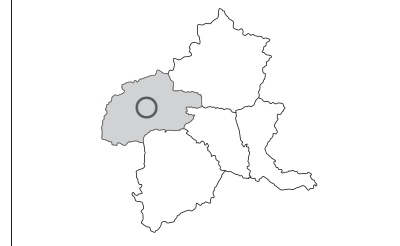
特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。すべての生育地が私有地にある。個体数は池や流域の管理方針に大きく左右される。生育基盤が脆弱なため、施設等による系統保存も視野に入れる必要がある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 I B 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数 3	現存	2
	不明	0
	絶滅	1

県内分布状況



キンスゲ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Carex pyrenaica Wahlenb. var. *altior* Kük.

評価理由

1地点のごく狭い範囲に生育が確認された。株数が少ない上に生育地が登山道に隣接しているため、踏みつけにより生育環境が悪化している。

主な危険要因

踏みつけ、特殊分布
生育面積が小さく、登山道に接しているため踏みつけによって絶滅する可能性がある。

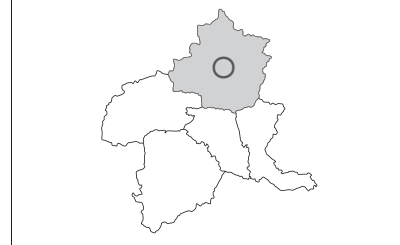
特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。群馬県植物誌改訂版（1987）に記載がある地点とは別の地点から近年発見された。登山道が生育地を通っており、踏みつけとともに種子散布の支障になっていると考えられる。登山道以外に踏み込まないための具体的な方策や、抜本的には登山道の付け替えが望まれる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数 1	現存	1
	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



シロウマスゲ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Carex scita Maxim. var. *brevisquama* (Koidz.) Ohwi

評価理由

1地点で今回の調査期間中に生育が確認された。生育株数・集団数については不明な点があるが、生育環境が特殊であるため、多数は見込めない。

主な危険要因

特殊分布、その他（崩落）
崩壊しやすい岩場に生育し、崩壊によって生育地が失われる可能性がある。

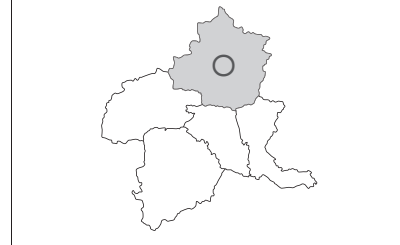
特記事項

従来アシボソスゲ (var. *tenuiseta* (Franch.) Yonek.) に含める見解が多かったが、現在、アシボソスゲは鳥海山に分布する果胞の嘴や雌鱗片の先が著しくとがるものに限定し、本州中部のものはシロウマスゲとする見解がとられている（勝山 2015）。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	準絶滅危惧：アシボソスゲとして

判定基準	定量 D	
産地数 1	現存	1
	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅 II 危惧類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

タチヒメクグ (マメクグ)

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Cyperus kamtschatica (Meinsh.) Yonek.

評価理由

1 地点で生育が確認されているのみである。湿地開発の影響を受けたと考えられ、今後も除草剤散布や圃場整備により消失することが危惧される。

主な危険要因

農薬汚染、土地造成（圃場整備）、湿地開発
生育環境が低地の湿地や湿田周辺に限定されるため、圃場整備や除草剤散布の影響を極めて受けやすいと考えられる。

特記事項

平野部の湿田とその周辺や干上がった沼底に生育する。このため圃場整備や公園・釣り池造成で大半が失われ、残存生育地も除草剤の影響があると考えられる。近年まで市販の図鑑に掲載がなかったことも、本種の認識の低さと関係があると考えられる。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

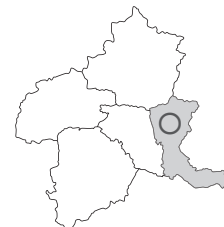
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量 D

産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



シロガヤツリ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Cyperus pacificus (Ohwi) Ohwi

評価理由

5 地点で記録があるが、今回の調査では 1 地点のみで確認できた。ため池や湿地の開発、除草剤散布により絶滅寸前の状態である。

主な危険要因

池沼開発、土地造成（その他）、農薬汚染
分布域は平野部の都市近郊のみで、ため池改修や駐車場・宅地造成の影響を受けやすい。

特記事項

形態的に類似する複数の種が存在するため同定は難しく、また、採集時に敬遠される傾向がある。まず、分布を正確に把握することが必要である。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量 D

産地数	現存	1
5	不明	2
	絶滅	2

県内分布状況



スジヌマハリイ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Eleocharis equisetiformis (Meinsh.) B.Fedtsch.

評価理由

東部地域の 1 地点で群落が確認された。裸地に大きな群落を急に形成した後、衰退することが多い。群馬県の生育地も増加期に入り気づかれたものと考えられる。

主な危険要因

自然遷移
先駆的な種で、ヨシなどの高茎の草本が侵入すると消失する。もっぱら、種子繁殖よりも地下茎の栄養繁殖に頼っているため、遷移進行により消失する。

特記事項

2018 年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。2016 年に生育が確認された。遷移の初期に出現する種で、遷移とともにいったん地上部が消失することが多い。一方で、地下茎によって旺盛に繁殖し、県外では休耕田一面を覆うこともある。

今回評価

絶滅危惧 I A 類

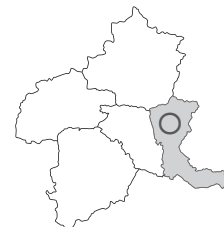
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準

定量 D

産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



コツブヌマハリイ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Eleocharis parvinox Ohwi

評価理由

5地点で記録があるが、今回の調査では現存が確認できなかった。攪乱により突発的に発生し、生育地は長続きしない。

主な危険要因

自然遷移、土地造成（圃場整備）、湿地開発
先駆的な種で、攪乱依存の傾向がある。このため、遷移進行により消失する場合が多い。

特記事項

存在さえ知られておらず、正確な同定がなされない場合が多い。山地の池沼に多いオオヌマハリイと、平野部に分布が限定される本種はしばしば混同される。形態や分布域の認識が不足していることも本種の保全上の問題になっていると考えられる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 II 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定性
産地数	現存 0 不明 4 絶滅 1
5	

県内分布状況



コアゼテンツキ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Fimbristylis aestivalis (Retz.) Vahl

評価理由

3地点中1地点のみで今回確認された。攪乱により突発的に発生し、生育地は長続きしない。

主な危険要因

管理放棄、踏み付け、土地造成（その他）
平野の湿地や、ダム湖、ため池の攪乱地に生育し、管理依存の傾向がある。生育可能な環境は湿地開発や圃場整備により大幅に減少した。

特記事項

メアゼテンツキまたはヒメヒラテンツキを本種と誤同定されることが多い。生育環境が不安定なため、出現が一時的で、埋土種子を形成することが多く、分布の把握が難しい。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
産地数	現存 1 不明 2 絶滅 0
3	

県内分布状況



アオテンツキ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Fimbristylis dipsacea (Rottb.) C.B.Clarke

評価理由

2地点で記録があるが、今回の調査では現存が確認できなかった。近年記録がなく絶滅した可能性もある。

主な危険要因

池沼開発、土地造成（その他）、管理放棄
平野部のため池や水路に生育する種のため、開発や改修工事の影響を受けやすい。

特記事項

平野部のため池の減水した岸や河畔の減水湿地、水たまりを調査する必要がある。近年記録がないが、過去も現在も、前述の環境では十分調査されていないので、絶滅したとは言えない。今後生育環境を意識した現地調査が必要である。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定性
産地数	現存 0 不明 2 絶滅 0
2	

県内分布状況



I

II

1

2

3

4

種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

ハタケテンツキ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科*Fimbristylis stauntonii* Debeaux et Franch. var. *stauntonii*

評価理由

1地点のみで生育が確認された。生育地が道路により分断され、さらに除草剤散布により半数以上が失われた。

主な危険要因

道路工事、土地造成（圃場整備）、農薬汚染
生育地の中心を道路が通り、集団が分断された。加えて農道傍に散布された除草剤の影響も大きい。

特記事項

生育地の分断と環境悪化のため、ランクを修正した。本県では2006年に発見された。当時本種は環境庁レッドデータブック（2000）で絶滅危惧ⅠA類に指定されていたにもかかわらず、生育地の中心に道路が建設された。さらに、農道の整備も検討されている。

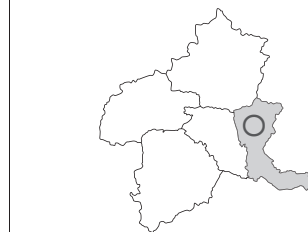
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県（2018）	
群馬県（2012）	絶滅危惧ⅠB類
群馬県（2001）	指定なし
環境省（2020）	絶滅危惧ⅠB類

判定基準 定量A

産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



コイヌノハナヒゲ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科*Rhynchospora fujitana* Makino

評価理由

3地点で記録があるが、1地点では絶滅し、残り2地点でも生育を確認できなかった。既に絶滅している可能性もある。

主な危険要因

湿地開発、自然遷移
湿地の開発や遷移進行により壊滅的な状態にあると思われる。小規模な湿地では湧水量の変化やヨシ、大型スゲ類の侵入により生育できなくなる場合が多い。

特記事項

都市近郊の湿地や保護体制のない山地の小規模な湿地のみで記録がある。県北部の高層湿原の普通種・ミヤマコイヌノハナヒゲと混同されることも、本種が絶滅危惧種と認識されない理由にあげられるかもしれない。

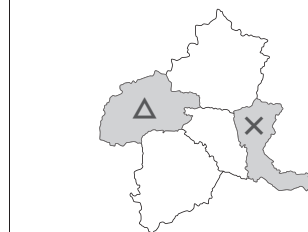
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県（2018）	
群馬県（2012）	絶滅危惧ⅠA類
群馬県（2001）	指定なし
環境省（2020）	指定なし

判定基準 定性

産地数	現存	0
3	不明	2
	絶滅	1

県内分布状況



イヌノハナヒゲ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科*Rhynchospora rugosa* (Vahl) Gale

評価理由

絶滅とされた2地点中1地点で掘り下げ試験により出現したが生育面積は小さい。他の生育地では遷移が進行し、その後行われた複数の調査では確認されていない。

主な危険要因

湿地開発、自然遷移、その他（富栄養化）
生育地は湿原への流入河川の改修工事や周辺開発による乾燥化、富栄養化によりヨシやオギなどが優占する高茎の植生に変化し、本種は衰退していった。

特記事項

群馬県立自然史博物館収蔵の最新の標本は1962年採集のものである（GMNHJ-BS-6575～6577）。2014年頃乾燥化した湿原の掘り下げ試験を行ったところ、複数の希少種と共に出現した。

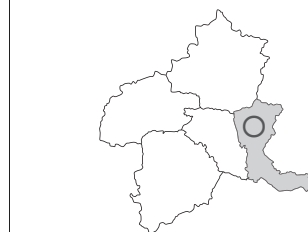
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県（2018）	
群馬県（2012）	絶滅
群馬県（2001）	指定なし
環境省（2020）	指定なし

判定基準 定性

産地数	現存	1
2	不明	0
	絶滅	1

県内分布状況



コホタルイ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Schoenoplectiella komarovii (Roshev.) J.Jung et H.K.Choi

評価理由	3地点で記録がある。うち1地点で埋土種子集団から一度復活したが、遷移進行によって2017年には生育が確認できなくなっている。
主な危険要因	池沼開発、自然遷移 先駆的な種で、攪乱依存の傾向がある。このため、遷移進行により消失する場合が多い。過去には池沼開発によって埋土種子集団ごと消失した。
特記事項	2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。遷移初期に出現する種のため、株のままの保存は難しい。近年発生した地点では埋土種子集団を形成していると考えられる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	絶滅
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定性	
産地数 3	現存	0
	不明	1
	絶滅	2



コシンジュガヤ

種子植物・イネ目
カヤツリグサ科

Scleria parvula Steud.

評価理由	1地点で生育が確認された。しかし、個体数は少なく、遷移進行とともに消失するおそれがある。
主な危険要因	自然遷移、湿地開発 先駆的な種で、攪乱依存の傾向がある。このため、遷移進行により消失する場合が多い。
特記事項	2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。発生地点周辺に裸地や植被の低い部分を作ることが株の維持には必要である。自生地では、試験区として保護されている。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	情報不足
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数 1	現存	1
	不明	0
	絶滅	0



ユキクラヌカボ

種子植物・イネ目
イネ科

Agrostis hideoi Ohwi

評価理由	1地点のみで確認されている。生育環境は特殊である。ダム建設によって生育地が広い範囲にわたり水没したと考えられる。
主な危険要因	特殊分布、ダム建設、分布限界 生育地は一般的な登山の対象とならない地域にある。現状どおり立ち入り困難な状態を維持することが本種の保全上重要であると考えられる。
特記事項	県植物誌改訂版 (1987) には記録がないが、長野県植物誌の国内分布に本県の産地が引用され (白井ほか 1997)、その下流域でも記録がある。危険な渓谷が連続する地域に生育しているため、分布の詳細を解明するのは困難と考えられる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 II 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 I B 類

判定基準	定性	
産地数 1	現存	1
	不明	0
	絶滅	0



ヒメアブラススキ

種子植物・イネ目
イネ科*Capillipedium parviflorum* (R. Br.) Stapf

評価理由

3地点中2地点で生育が確認されており、1地点では絶滅した。株数は少なく、また、管理放棄や開発により生育環境は悪化している。

主な危険要因

草地開発、管理放棄、ゴルフ場
丘陵地の田畑脇の草地の管理放棄や農地周辺の草地や林縁の基盤整備に伴う開発が近年の減少理由である。分布域はゴルフ場が多い地域にある。

特記事項

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
------	------

産地数	現存	2
	不明	0
	絶滅	1

県内分布状況



ムツオレグサ

種子植物・イネ目
イネ科*Glyceria acutiflora* Torr. subsp. *japonica* (Steud.) T. Koyama et Kawano

評価理由

分布は局地的である。2地点中1地点で絶滅し、1地点のみで確認された。目立たない種のため他に産地がある可能性はあるが、減少率は極めて高いと思われる。

主な危険要因

土地造成（圃場整備）、管理放棄、農薬汚染
湿田や水路に生育する雑草的な草本で、圃場整備により大半の生育地が消失したと考えられる。管理放棄や周辺水田での除草剤の散布も減少要因になる。

特記事項

現在確認されている地点は休耕田1枚のみである。現在のところ管理されている。過去には圃場整備に伴う乾田化や水路改修、湿田の埋め立てにより大量に絶滅したと考えられる。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
------	------

産地数	現存	1
	不明	0
	絶滅	1

県内分布状況



ウキガヤ

種子植物・イネ目
イネ科*Glyceria depauperata* Ohwi var. *infirma* (Ohwi) Ohwi

評価理由

分布は局地的である。5地点すべてで現状不明である。目立たない種のため見逃されている可能性は否定できないが、減少率は極めて高いと思われる。

主な危険要因

土地造成（圃場整備）、外来種競合・交雑、農薬汚染
低湿地や小河川に生育し、圃場整備により大半の生育地が消失したと考えられる。周辺水田での除草剤の散布や外来種との競合も減少要因として考えられる。

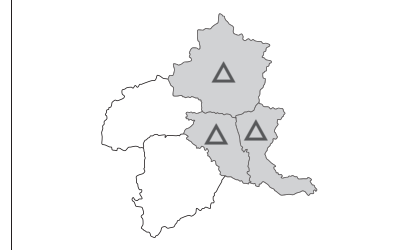
特記事項

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定性
------	----

産地数	現存	0
	不明	5
	絶滅	0

県内分布状況



ササクサ

種子植物・イネ目
イネ科

Lophatherum gracile Brongn.

評価理由	4地点で記録があるが、開発や管理行為によって生育地が消失し、今回生育が確認されたのは1地点のみである。
主な危険要因	土地造成（その他）、その他（除草）、管理放棄 もともと生育地点が限定されていた。人里周辺の明るい林や林縁に多く、除草の対象になりやすい。また、近年生育地の1つはヘリポート造成により消失した。
特記事項	そう果はいわゆるひつつき虫で、人の集まる神社や森林公園に群生することがあるため、厄介な雑草として除草されることがある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定性	
産地数	現存	1
4	不明	0
	絶滅	3



タマミゾイチゴツナギ

種子植物・イネ目
イネ科

Poa acroleuca Steud. var. *submoniliformis* Makino

評価理由	4地点で記録されているが、2地点で絶滅した。うち1地点は除草剤によって消失した群落がある。生育環境が林縁や水湿地のため、不安定な環境に生育している。
主な危険要因	湿地開発、河川開発、農薬汚染 神社の空き地に生育していたものは、管理放棄により絶滅した。散策路に生育していたものは、除草剤で絶滅した。
特記事項	河川敷内や低層湿原の周りに、自生しているものが見つかったが、生育環境が不安定である。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	2
4	不明	0
	絶滅	2



アリマシノ

種子植物・イネ目
イネ科

Sasaella kogasensis (Nakai) Nakai ex Koidz. var. *yoshinoi* (Koidz.) Sad. Suzuki

評価理由	2地点中1地点のみで生育が確認された。群落は小規模で生育地が1地点と限られているため、開発によって一気に生育地を失う可能性がある。
主な危険要因	土地造成（その他）、森林伐採 雑木林内に生育しており、森林伐採や土地造成などが危険要因となる。
特記事項	2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。県有施設により、系統保存されている。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	1
2	不明	0
	絶滅	1



I
II
種
の
解
説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅危惧 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

ケスエコザサ

種子植物・イネ目
イネ科*Sasaella leucorhoda* (Koidz.) Koidz. var. *kanayamensis* (Nakai) Sad.Suzuki

評価理由

3地点中1地点で生育が確認されたが、1地点でダム運用開始により絶滅し、県内の個体数の90%が失われた。

主な危険要因

ダム建設、森林伐採、土地造成（その他）
県内最大の生育地はダムの運用開始により絶滅した。他方の生育地も前述のダム運用開始以前に駐車場整備や除伐が行われた。

特記事項

2019年のダム運用開始により、県内の確実な生育地は、都市近郊にある小面積の緑地を残すのみという状態になった。このため、今回ランクを絶滅危惧ⅠA類に修正した。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠB類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

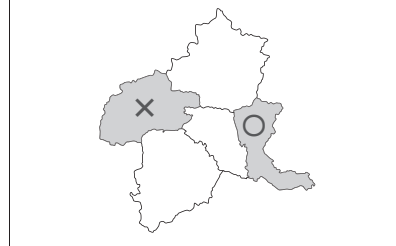
定量A

産地数

3

現存	1
不明	1
絶滅	1

県内分布状況



マツモ

種子植物・マツモ目
マツモ科*Ceratophyllum demersum* L.

評価理由

12地点中6地点で今回生育が確認された。池沼の消失や改修などにより減少した。個体数の変動は不安定なことが多い

主な危険要因

池沼開発、土地造成（圃場整備）、その他*
圃場整備を含む池沼の開発のほか、農薬流入、引き抜き・園芸種の植栽などの管理によって消失・減少した事例もある。

特記事項

過去に記録がある池沼池での絶滅とともに、近年新たに記録される事例もある。アクアリウムで飼育していた生物の放流に伴うことも考えられる。本種は世界的に分布する種のため、在来系統か外来系統かの判断に迷うこともある。

※その他：非意図的管理

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

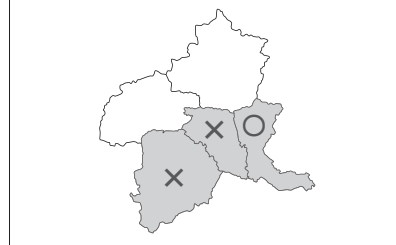
定量簡易ACD

産地数

12

現存	6
不明	0
絶滅	6

県内分布状況



コマクサ

種子植物・キンボウゲ目
ケシ科*Dicentra peregrina* (Rudolph) Makino

評価理由

草津本白根山とその周辺に分布が限られる。育種系統の品種の植栽活動に伴って在来系統の個体数は激減し、また、交雑による遺伝子汚染も見られる。

主な危険要因

その他（人工品種との競合・交雑）、その他（災害）
かつて薬用に採取・栽培されたが、誤用とわかり放置された。観光客の増加による荒廃で減少したため保護活動が行われ、育種系統の品種が大量に播種・植栽された。

特記事項

地元で作出された深紅花の育種系統の品種「黎明」が草津本白根山に無数に生育し、薄桃色花の在来系統の個体数が激減している。両者の交雑による中間型個体も増加している。また2018年1月23日に発生した水蒸気爆発により、最大の野生個体群は壊滅的打撃を受けたと推測される。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定性

産地数

1

現存	0
不明	1
絶滅	0

県内分布状況



トガクシソウ

種子植物・キンポウゲ目
メギ科*Ranzania japonica* (T.Itô ex Maxim.) T.Itô

評価理由

4地点で生育が確認された。人が立ち入らない場所に生育しているため園芸採取の影響は考えにくい、生育地周辺にはニホンジカが侵入している。

主な危険要因

自然遷移、動物食害（シカ）、その他（災害・崩落）
生育地は国立公園内で登山対象とならない地域にある。急斜面によく生えるため比較的ニホンジカの食害は受けにくい、一定の食害は受けていると推定される。

特記事項

現状のまま立ち入り困難な状態を維持することが本種の保全上重要であると考えられる。また、本種は本来ニホンジカの嗜好性が低い種と考えられたが、現在では葉への食害が確認されている（大森 2016）。

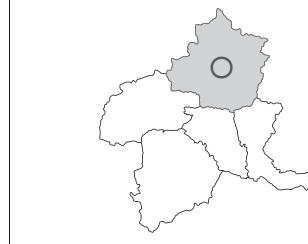
今回評価 絶滅危惧 I A 類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準 定量簡易 ACD

産地数	現存	4
4	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



オンタケブシ

種子植物・キンポウゲ目
キンポウゲ科*Aconitum metajaponicum* Nakai

評価理由

1地点のみで生育が確認された。分布面積が極めて狭く株数が極めて少ない上に生育地は全く保護されていない。

主な危険要因

外来種競合・交雑、道路工事、分布限界
2集団存在したが、うち1集団はマダケの繁茂により完全に消滅した。残る集団にもマダケが侵入している。また、農道工事によっても消失する危険性がある。

特記事項

2020年に国内希少野生動植物種に指定された。2010年より継続的にモニタリングされているが、2集団から1集団に減少し、結実に至らない年もある。また、訪花昆虫は確認されても結実率は低い。種子の低温保存は行われているが、種子撒きだしによる栽培下での系統保存も必要な状態と言える。

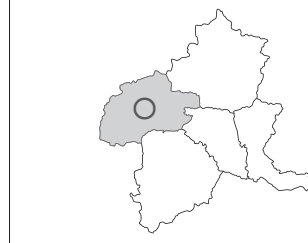
今回評価 絶滅危惧 I A 類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 I A 類

判定基準 定量 D

産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



キタザワブシ

種子植物・キンポウゲ目
キンポウゲ科*Aconitum nipponicum* Nakai subsp. *micranthum* (Nakai) Kadota

評価理由

5地点中3地点で生育を確認できた。ニホンジカによる食害による矮小化と株数の減少が認められる。日光白根山の大規模な防鹿ネット内での個体数は少ない。

主な危険要因

動物食害（シカ）、分布限界
ニホンジカの嗜好性が高く防鹿ネットでしか開花株はみられない状況。管理依存の状況にあると言える。

特記事項

猛毒であるにもかかわらずニホンジカによる高い摂食圧を受け、防鹿ネットの外で開花株を見るのは困難な状態になっている。日光白根山の群馬県側防鹿ネット内の個体数はホンバトリカブトに比べてはるかに少ない。

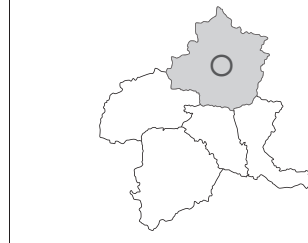
今回評価 絶滅危惧 I A 類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準 定量 A

産地数	現存	3
5	不明	2
	絶滅	0

県内分布状況



ミヤマオダマキ

種子植物・キンポウゲ目
キンポウゲ科*Aquilegia flabellata* Siebold et Zucc. var. *pumila* (Huth) Kudô

評価理由

4地点で生育が確認されているが、各地点とも個体数は極めて少ない。園芸採取の対象となり、絶滅が危惧される。

主な危険要因

園芸採取、自然遷移、特殊分布
 著名な高山植物で、かつ希少なため、園芸採取される可能性が高い。

特記事項

大部分の生育地は国立公園内にある。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県(2018)

群馬県(2012)

群馬県(2001)

環境省(2020)

絶滅危惧ⅠA類

絶滅危惧Ⅰ類

指定なし

判定基準

定量D

産地数

4

現存

4

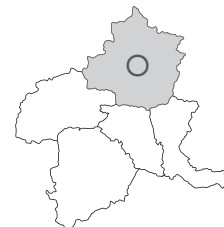
不明

0

絶滅

0

県内分布状況



エンコウソウ

種子植物・キンポウゲ目
キンポウゲ科*Caltha palustris* L. var. *enkoso* H.Hara

評価理由

7地点中3地点で生育が確認され、うち1地点には複数の局所個体群が存在する。現在の生育地では開発とともに、交雑による純粋な系統の減少が危惧される。

主な危険要因

湿地開発、土地造成(その他)、外来種競合・交雑
 多くの生育地が公園や開墾により消失した。生育地に隣接して変種のリュウキンカが植栽された地点もあり、交雑が懸念される。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。吾妻地域では小河川への土砂や除草剤の流入によって今回確認できなかった。観光開発により生育地にリュウキンカやミズバショウが植栽される事例もある。特にリュウキンカは同じ種に属するため、交雑が懸念される。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県(2018)

群馬県(2012)

群馬県(2001)

環境省(2020)

絶滅危惧ⅠA類

絶滅危惧ⅠB類

指定なし

指定なし

判定基準

定量A

産地数

7

現存

3

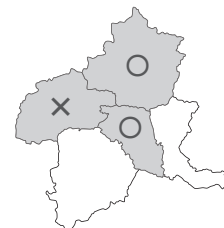
不明

0

絶滅

4

県内分布状況



ミヤマハンショウヅル

種子植物・キンポウゲ目
キンポウゲ科*Clematis alpina* (L.) Mill. subsp. *ochotensis* (Pall.) Kuntze var. *fusijamana* Kuntze

評価理由

7地点中5地点で生育が確認されたが、いずれも30株未満である。遷移や園芸採取に加え、ニホンジカによる食害も進行しつつある。

主な危険要因

自然遷移、動物食害(シカ)、園芸採取
 遷移進行に伴う林縁群落の変化が最大の減少要因と考えられる。加えてニホンジカによる食痕も確認された。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。ほぼすべての生育地で衰退傾向にあると考えられる。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県(2018)

群馬県(2012)

群馬県(2001)

環境省(2020)

絶滅危惧ⅠA類

絶滅危惧ⅠB類

指定なし

指定なし

判定基準

定量C

産地数

7

現存

5

不明

1

絶滅

1

県内分布状況



カザグルマ

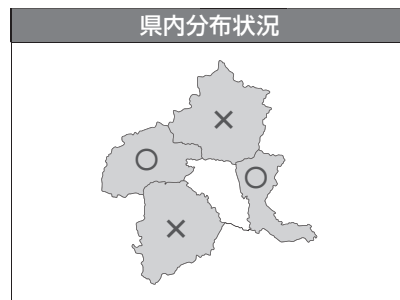
種子植物・キンポウゲ目
キンポウゲ科

Clematis patens C.Morren et Decne.

評価理由	14地点中3地点で生育が確認されたが、確認地点は10年前の半数である。吾妻地域の大規模な生育地がダム運用開始に伴い水没し、東部地域でも急減している。
主な危険要因	園芸採取、ダム建設、道路工事 ダム運用開始により大規模な生育地が減少した。園芸採取の対象となっている。さらに、道路工事や除草作業に伴って除伐されることがある。
特記事項	吾妻地域では生育地がダムで水没するため、移植がなされた。東部地域については、過去10年間で確認できなくなった生育地が複数存在する。工事や自然遷移とともに園芸採取の影響もあると推定される。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	3
14	不明	0
	絶滅	11



チチブシロカネソウ

種子植物・キンポウゲ目
キンポウゲ科

Enemion raddeanum Regel

評価理由	7地点で生育が確認されているが2地点で絶滅、2地点で不明である。さらに近年個体数が大幅に減少している。
主な危険要因	動物食害（シカ）、その他（自然災害）、園芸採取 分布地が限定され、ニホンジカに被食され壊滅的な生育地が確認された。加えて園芸採取も大きな減少要因となっている。過去には自然林の伐採によって減少した。
特記事項	シカの食害は拡大しており、矮小化とともに開花個体数が大きく減少している。また、近年の山野草ブームによって採取圧を受けている。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	3
7	不明	2
	絶滅	2



セツブンソウ

種子植物・キンポウゲ目
キンポウゲ科

Eranthis pinnatifida Maxim.

評価理由	1地点のみで生育が確認された。ニホンジカおよびイノシシの食害や掘り起こしと販売目的の採取によって現存開花個体数は10未満まで減少している。
主な危険要因	園芸採取、動物食害（シカ、シカ以外） 生育地ではニホンジカおよびイノシシいずれもの食害や掘り起こしが確認されている。また、生育地点が特定されると販売目的の採取を受ける可能性がある。
特記事項	生育地へのニホンジカ、イノシシの侵入を防止する柵の設置等が必要である。ただし、生育地点が明らかになると採取される可能性があるため、柵を広めに設置するなどの工夫が求められる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

オキナグサ

種子植物・キンポウゲ目
キンポウゲ科*Pulsatilla cernua* (Thunb.) Bercht. et J.Presl

評価理由

21地点から記録があるが、今回の調査期間中は生育を確認できなかった。管理放棄や工事に伴って減少し、近年の園芸採取が追い打ちをかけた。

主な危険要因

園芸採取、管理放棄

かつては管理放棄や河川・草地の開発などによって激減したが、現在では園芸採取が最大の危険要因であると考えられる。

特記事項

山草園芸の対象として大量に採取されるが、一方で過去に記録がない地点から、栽培由来と考えられる株が記録されることもある。来歴がはっきりしている個体は、系統保存や野生復帰に積極的に使用する価値があると考えられる。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2018)	
群馬県(2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省(2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定性	
産地数	現存	0
21	不明	3
	絶滅	18

県内分布状況



コキツネノボタン

種子植物・キンポウゲ目
キンポウゲ科*Ranunculus chinensis* Bunge

評価理由

1地点のみで確認されている。河川敷、水湿地という脆弱な環境に生育していること、多くは群生しないことなどから、環境の変化により失われる危険性が高い。

主な危険要因

河川開発、湿地開発

生育地ではここ数年大規模な河川工事が行われ、絶滅が危惧される。

特記事項

低地生の攪乱依存種のため、平野部の氾濫原が広がる周辺の水湿地には普通に見られる。河川工事が一段落すれば、戻ってくる可能性は期待できる。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2018)	
群馬県(2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2001)	指定なし
環境省(2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定量D	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



ヒメカラマツ

種子植物・キンポウゲ目
キンポウゲ科*Thalictrum alpinum* L. var. *stipitatum* Y.Yabe

評価理由

本州中部固有で、本県では1地点のみ生育が確認されている。高山生である。

主な危険要因

特殊分布、踏み付け

生育地は国立公園内だが、園芸採取の対象になりかねない。目立たないので登山者による踏み付けも危惧される。

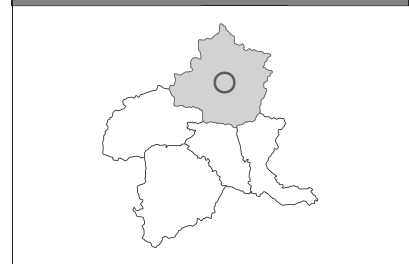
特記事項

生育地を通る登山道の廃止があったが、その後も登山者があるようである。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2018)	
群馬県(2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2001)	指定なし
環境省(2020)	指定なし

判定基準	定性	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



ヤマシャクヤク

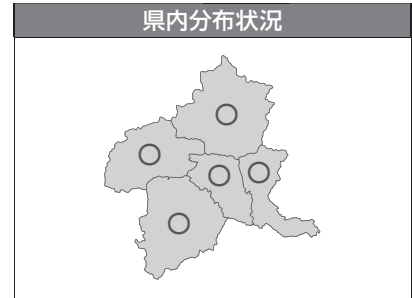
種子植物・ユキノシタ目
ポタン科

Paeonia japonica (Makino) Miyabe et Takeda

評価理由	39地点中25地点で生育が確認された。いずれの生育地でも、株数が少ない上に大型の株が少ない。園芸採取によって著しく減少していると考えられる。
主な危険要因	園芸採取、森林伐採 ニホンジカによる嗜好性は低いため、開花個体の減少は主に園芸採取によるものと考えられる。
特記事項	山草園芸の対象となっている。開花サイズの個体はもれなく採取される。県外では群生地もあるが、大半の県内の生育地は開花個体が1～3株である。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量簡易 ACD
産地数	現存 25 不明 5 絶滅 9
39	



ベニバナヤマシャクヤク

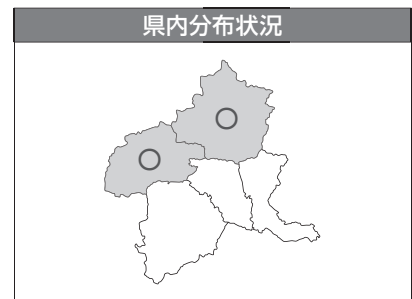
種子植物・ユキノシタ目
ポタン科

Paeonia obovata Maxim.

評価理由	12地点中8地点で生育が確認された。いずれの生育地でも開花個体が極端に少なく、園芸採取によって著しく減少していると考えられる。
主な危険要因	園芸採取、自然遷移、森林伐採 もともと遷移や開発によって減少傾向にあったが、近年の園芸採取が追い打ちをかけている。
特記事項	山草園芸の対象となっている。生育地付近で本種の苗が販売されていた事例もあり、販売品の中には山採り苗も含まれると考えられる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量簡易 ACD
産地数	現存 8 不明 2 絶滅 2
12	



ヤブサンザシ

種子植物・ユキノシタ目
スグリ科

Ribes fasciculatum Siebold et Zucc.

評価理由	過去に記録のない1地点で新たに確認されたが、分布面積は小さく、個体数は非常に少ない。生育地はまったく保護体制が整っていない。
主な危険要因	土地造成 (その他)、自然遷移、河川開発 今回記録された地点は、公園造成、河川開発のほか自然遷移による衰退が危惧される。過去に記録があった地点はリゾート開発が行なわれている地域にある。
特記事項	今回生育情報が得られたため、ランクを絶滅危惧 I A 類に確定した。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	情報不足
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
産地数	現存 1 不明 1 絶滅 0
2	



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅
(2) 野生絶滅
(3) 絶滅危惧 I A 類
(4) 絶滅危惧 I B 類
(5) 絶滅危惧 II 類
(6) 準絶滅危惧
(7) 情報不足

ヤワタソウ

種子植物・ユキノシタ目
ユキノシタ科*Peltoboykinia tellimoides* (Maxim.) H.Hara

評価理由

12地点で生育が確認された。西部と東部地域に主な生育地があるが、北毛地域でも見つかった。1地点あたりの個体数は少なく、地質が古い地域に局在している。

主な危険要因

動物食害（シカ）、園芸採取、自然遷移
近年ニホンジカの食害により個体数の減少やサイズ低下が顕著である。さらに、生育立地の特性から流失する危険性がつきまとう。園芸採取、森林伐採も脅威である。

特記事項

ヤワタソウ属は、本種（関東・中部地方の8都県）とワタナベソウ（四国・九州地方の4県）の2種が知られているが、いずれも希少である。その中でも本県は最も多く分布すると思われる。本種は日本固有とされてきたが中国福建省崇安に隔離分布することがわかっている（潘1992）。

今回評価

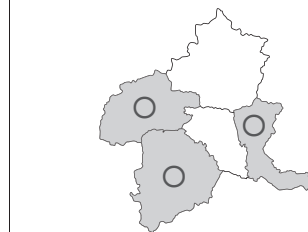
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量簡易 ACD

産地数	現存	12
14	不明	0
	絶滅	2

県内分布状況



タコノアシ

種子植物・ユキノシタ目
タコノアシ科*Penthorum chinense* Pursh

評価理由

11地点中5地点で生育が確認された。開発や自然遷移によって減少し、現存する産地の個体数の変動も不安定である。

主な危険要因

池沼開発、河川開発、自然遷移
低湿地の攪乱地に生育するため、河川敷や湿地の開発・工事、さらに遷移による大型草本の繁茂が危険要因になる。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。攪乱が起きた後急増し、その後遷移の進行とともに衰退することが多い。埋土種子を含めた保全が求められる。

今回評価

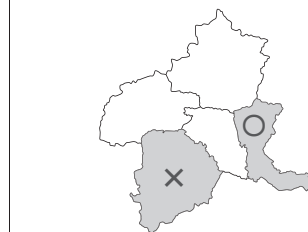
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準

定量 C

産地数	現存	5
11	不明	0
	絶滅	6

県内分布状況



タヌキマメ

種子植物・マメ目
マメ科*Crotalaria sessiliflora* L.

評価理由

11地点中1地点のみで継続的な生育が確認されている。刈り取り管理に依存するため、管理放棄による衰退が危惧される。

主な危険要因

管理放棄、園芸採取、河川開発
高茎の草本が繁茂すると衰退することが多い。県内に現存する生育地では、草地の刈り取り管理に依存している。また、園芸採取の対象となる。

特記事項

もともと主として平野部や丘陵域の農村や河川周辺の草地に生育していた。このため開発によって早い時期に失われた生育地が多い。奥山には生育しない植物のため、かえって意識されることがなかったと考えられる。

今回評価

群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量簡易 ACD

産地数	現存	1
11	不明	4
	絶滅	6

県内分布状況



ニワフジ

種子植物・マメ目
マメ科

Indigofera decora Lindl.

評価理由	2地点で記録されているが、そのうち生育が確認できたのは1地点で、株数は50未満である。
主な危険要因	園芸採取、自然遷移、その他（希少） 登山道沿いに分布するため、園芸採取の可能性が大きく、踏み付けなどにより生育地が消失する危険性が高い。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
産地数	現存 1 不明 1 絶滅 0
2	



レンリソウ

種子植物・マメ目
マメ科

Lathyrus quinquenervius (Miq.) Litv.

評価理由	13地点中1地点でのみ生育が確認された。現存する生育地の周囲には外来種が侵入している。
主な危険要因	河川開発、管理放棄、外来種競合・交雑 公園造成などの河川敷の開発、オオブタクサやナヨクサフジなどの外来種との競合など、平地河川に特有な生育環境の破壊と劣化が深刻である。
特記事項	平野の河川沿いを中心に分布するため、河川改修などによって早い時期に大半の生育地が失われたと考えられる。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 C
産地数	現存 1 不明 7 絶滅 5
13	



イヌハギ

種子植物・マメ目
マメ科

Lespedeza tomentosa (Thunb.) Siebold ex Maxim.

評価理由	15地点中5地点で生育が確認された。河川開発や外来種の侵入に加え、河川の増水やそれに関連する工事によって生育環境が悪化している。
主な危険要因	河川開発、自然遷移、外来種競合・交雑 河川敷の開発とオオブタクサやセイタカアワダチソウなどの外来種との競合が危険要因である。近年豪雨災害による生育地の破壊の危険性も高まっている。
特記事項	近年林道の切り通しや山間部の造成地で本種が記録されることがある。これらは吹きつけ種子由来の外来系統である可能性が高く、注意が必要である。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定量簡易 ACD
産地数	現存 5 不明 5 絶滅 5
15	



I
II
種
の
解
説

(1)
絶
滅

(2)
野
生
絶
滅

(3)
絶
滅
危
惧
Ⅰ
A
類

(4)
絶
滅
危
惧
Ⅰ
B
類

(5)
絶
滅
危
惧
Ⅱ
類

(6)
準
絶
滅
危
惧

(7)
情
報
不
足

タンキリマメ

種子植物・マメ目
マメ科

Rhynchosia volubilis Lour.

評価理由

6地点中3地点で生育が確認された。いずれの地点でも個体数は少なく、路傍や中小河川沿いのやぶのため、まったく保護されていない。

主な危険要因

管理放棄、農薬汚染、外来種競合・交雑
遷移によって消滅するほか、除草剤の影響も考えられる。つる性の雑草のため、アレチウリなどの外来種との競合も考えられる。

特記事項

過去の記録は主要都市近郊のみで、山岳域での記録はない。このことがかえって絶滅のリスクが高い種であるとの認識を低くしていると思われる。

今回評価

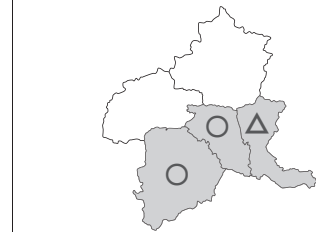
今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量 D

産地数	現存	不明	絶滅
6	3	0	3

県内分布状況



ザイフリボク

種子植物・バラ目
バラ科

Amelanchier asiatica (Siebold et Zucc.) Endl. ex Walp.

評価理由

12地点中7地点で自生が確認された。極端な立地に生育し、いずれの生育地でも株数が少ない。過去には伐採や山火事などで大幅に減少した事例がある。

主な危険要因

森林伐採、自然遷移、その他（斜面崩壊）
低山や渓谷の崖に生育するため、生育可能な立地が少ない。防災工事や道路工事に伴って伐採される場合がある。

特記事項

断崖や急斜面に生育することが多い。過去に山火事により焼失した自生地では、その後実生が定着し、生育が継続していることが確認された。

今回評価

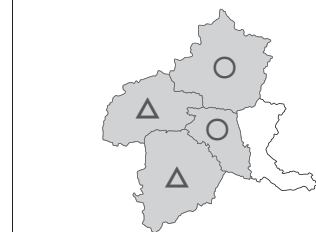
今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量 D

産地数	現存	不明	絶滅
12	7	5	0

県内分布状況



ブコウマメザクラ

種子植物・バラ目
バラ科

Cerasus incisa (Thunb.) Loisel. var. *bukosanensis* (Honda) H.Ohba

評価理由

12地点中11地点で生育が確認された。局所的な環境に依存すると考えられ株数が少ない。衰退傾向にある上に、一部生育地で除伐された。

主な危険要因

石灰採掘、森林伐採、動物食害（シカ）
乾燥による枯死、石灰岩の採掘、生育地へのニホンジカの侵入により衰退傾向の地点が多い。加えて除伐による減少も確認された。

特記事項

2000年代以降複数の新産地が見つかったため、県レッドデータブック（2012）ではいったん絶滅危惧 I B 類に評価された。しかし、複数の生育地で減少率が高まったため、絶滅危惧 I A 類に修正した。

今回評価

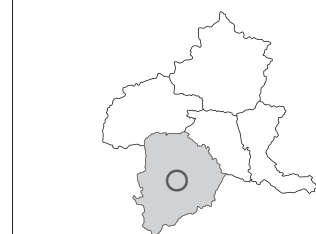
今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 I B 類

判定基準

定量簡易 ACD

産地数	現存	不明	絶滅
12	11	1	0

県内分布状況



ヒロハノカワラサイコ

種子植物・バラ目
バラ科

Potentilla niponica Th. Wolf

評価理由	3地点で記録があるが、今回の調査では確認できなかった。河川敷の遷移進行の結果衰退し、わずかに残った生育地も氾濫の影響で土砂の堆積がみられた。
主な危険要因	河川開発、管理放棄、その他（災害） 河川流域を通じた開発とそれに伴う河川敷の安定化、さらに外来種との競合による影響が大きい。また、衰退後の災害による生育地埋没は致命的であると考えられる。
特記事項	上流域のダム等による開発によって河川の攪乱頻度が減少し、本種が生える裸地的な河原が減少した。さらに平野部の河川沿いの産地一帯は、令和元年台風19号により厚く土砂が堆積し、生育している可能性は低くなった。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定性	
産地数	現存	0
3	不明	2
	絶滅	1



アオナシ

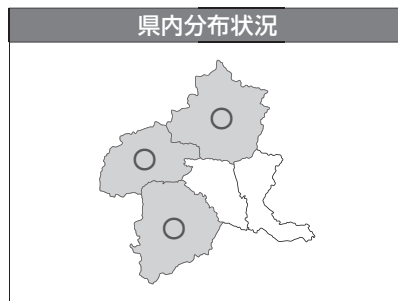
種子植物・バラ目
バラ科

Pyrus ussuriensis Maxim. var. *hondoensis* (Nakai et Kikuchi) Rehder

評価理由	10地点中8地点で生育が確認された。個体密度が低く、1地点あたりの株数は少ない。森林伐採や自然遷移のほか、観光開発によっても消失している。
主な危険要因	森林伐採、自然遷移、土地造成（その他） カラマツ植林のため伐採されたと考えられる。生育地周辺はリゾート地で、別荘やゴルフ場が多数立地している。造成工事によっても減少したと考えられる。
特記事項	生育地あたりの個体数が少なく、枯死例もみられるため絶滅危惧 I A 類にランクを修正した。ヤマナシと混同され、正しく認識されていない。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量 D	
産地数	現存	8
10	不明	0
	絶滅	2



オオタカネバラ

種子植物・バラ目
バラ科

Rosa acicularis Lindl.

評価理由	今回の調査期間中、1地点で個体が発見された。個体数が少ない上に、ニホンジカによる食害が懸念される。
主な危険要因	動物食害（シカ）、自然遷移 生育地はニホンジカの食害が激しい地域にある。登山道から離れた位置にあるために園芸採取は考えにくい。
特記事項	風穴に遺存することが多い植物だが、本県の生育地は風穴とは関係がない。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅危惧 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

ホザキシモツケ

種子植物・バラ目
バラ科

Spiraea salicifolia L.

評価理由

同一市町村内の4地点で生育が確認されている。ササの繁茂や乾燥化により生育環境が悪化した生育地が多い。

主な危険要因

自然遷移、道路工事、その他（乾燥化）
過去に道路工事による生育地の消失があった。遷移に伴ってササと競合関係にある生育地や側溝整備により乾燥化している生育地もある。

特記事項

戦後北海道から導入したシラカンバが苗木に混入していた可能性があるとのホームページ記述がある。ただし、生育地は1地域にとどまらず、地形や周辺環境は他の自生地と矛盾はない。また、すべての生育地が苗畑であった証拠はなく、少なくともいくつかの生育地は自生と考えた方が自然である。

今回評価

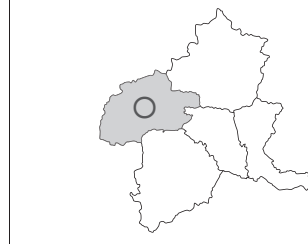
今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	情報不足
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量 D

産地数	現存	不明	絶滅
4	4	0	0

県内分布状況



ヨコグラノキ

種子植物・バラ目
クロウメモドキ科

Berchemiella berchemiifolia (Makino) Nakai

評価理由

全国的にもまれであり、単独または数本単位でしか生育していない。今回の調査では確認されなかった。1産地では石灰岩の採掘のため絶滅した。

主な危険要因

その他（工事のための除伐）、森林伐採、石灰採掘
単独で自生していることが多く、貴重樹種として認識されず、簡単に除伐されてしまうと考えられる。生育地の溪谷や岩礫地などは山腹工事の対象となることが多い。

特記事項

登山道整備の際、低木を皆伐して消滅した地点もある。石灰岩採掘現場に通じる道路の壁面工事により除伐され絶滅した地点もある。生存すると思われた地点でも護岸工事のためか除伐されてしまった。

今回評価

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定性

産地数	現存	不明	絶滅
3	0	1	2

県内分布状況



アカガシ

種子植物・ブナ目
ブナ科

Quercus acuta Thunb.

評価理由

2地点で確認された。いずれも分布面積は小さく、また伐採されやすい場所にある。

主な危険要因

その他（土地管理）、道路工事
いずれの生育地も保全地域などに指定されておらず、道路工事や防災工事による伐採が危惧される。

特記事項

調査期間中に新たに1地点で生育が確認されたが、大半は伐採された。

今回評価

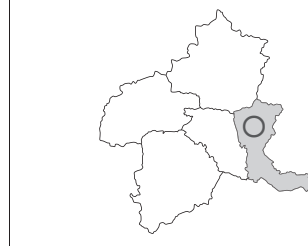
今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量 D

産地数	現存	不明	絶滅
2	2	0	0

県内分布状況



ナラガシワ

種子植物・ブナ目
ブナ科

Quercus aliena Blume

評価理由	3地点で確認された。いずれも分布面積は小さく、個体数はごくわずかである。
主な危険要因	森林伐採、河川開発 中山間地の沢に沿った斜面や丘陵地に生育し、伐採が懸念される。近年豪雨災害が多発する地域では、大規模な護岸等の工事の可能性もある。
特記事項	十分認識されておらず、コナラとカシワの雑種との誤同定が非常に多い。東部地域で本種として採取された標本はすべて誤同定であった。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
産地数	現存 3 不明 0 絶滅 0
3	



ツクバナガシ

種子植物・ブナ目
ブナ科

Quercus sessilifolia Blume

評価理由	1地点でのみ生育が確認された。本県では希少性が高い。
主な危険要因	森林伐採 もともと個体数が少ない上、民有地にあるため伐採される可能性がある。
特記事項	県植物誌 (1968) 及び県植物誌改訂版 (1987) には妙義山に記録があるが、その後の記録はない。沢沿いの急斜面に多いため、まだ気付かれていない生育地が残っている可能性もある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD
産地数	現存 1 不明 0 絶滅 0
1	



サクラバハンノキ

種子植物・ブナ目
カバノキ科

Alnus trabeculosa Hand.-Mazz.

評価理由	1地点のみで確認された。その群落は木本としては小規模で株数も少ない。
主な危険要因	湿地開発、自然遷移 人造湖の端にできた湿地に生育しているため、人造湖の改修や湿地の開発により伐採される可能性がある。
特記事項	東海地方以外ではまれな種で、県内ではこの1地点で確認されているのみである。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量 D
産地数	現存 1 不明 0 絶滅 0
1	



I
II
種
の
解
説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅危惧 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

オオツルウメモドキ

種子植物・ニシキギ目
ニシキギ科*Celastrus stephanotifolius* (Makino) Makino

評価理由

10地点中9地点で生育が確認された。いずれの地点でも個体数が少ない。また、除伐によって減少または個体数が抑えられた生育地が多い。

主な危険要因

森林伐採、道路工事、土地造成（その他）
道路沿いや植林地の林縁のつる植物で、林木、道路、電線などの管理に支障を来すため除伐されることが多い。

特記事項

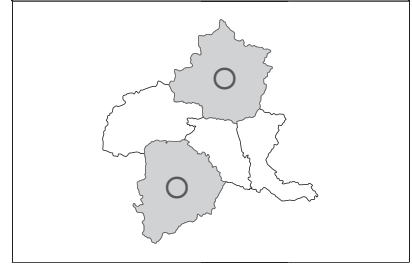
除伐される事例が相次いで報告され、減少率が増加したため、ランクを修正した。この仲間は果実をつけたつるが生け花や手芸材料として利用される。そのために散布できる種子量が減少している可能性もある。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠB類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易ACD
------	---------

産地数	現存	不明	絶滅
10	9	0	1

県内分布状況



アゼオトギリ

種子植物・キントラノオ目
オトギリソウ科*Hypericum oliganthum* Franch. et Sav.

評価理由

3地点中2地点で生育が確認されたが、管理放棄によるヨシなどの侵入によって生育が脅かされている。

主な危険要因

湿地開発、管理放棄、河川開発
相次ぐ管理放棄、河川敷内の田の休耕田化や河川の改修などで生育地が狭められている。

特記事項

ヨシやオギなどの高茎植物が侵入してくると、生育できないため、生育環境に限られる。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	絶滅危惧ⅠB類

判定基準	定量簡易ACD
------	---------

産地数	現存	不明	絶滅
3	2	0	1

県内分布状況



タチスミレ

種子植物・キントラノオ目
スミレ科*Viola raddeana* Regel

評価理由

3地点中2地点で確認されたが、いずれも残存株数はわずかである。かつての生育地の大規模な破壊に加え、過去20年間で工事により主要な生育地が消滅した。

主な危険要因

河川開発、湿地開発、土地造成（その他）
河川敷の大規模な開発によって激減したのに加え、わずかに残った生育地でも公園整備により壊滅的な影響を受けた。

特記事項

特定県内希少野生動植物種に指定されている。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定量C
------	-----

産地数	現存	不明	絶滅
3	2	0	1

県内分布状況



カイフウロ

種子植物・フウロソウ目
フウロソウ科

Geranium shikokianum Matsum. var. *kaimontanum* (Honda) Honda et H.Hara

評価理由	5地点中3地点で生育が確認された。管理放棄や自然遷移による衰退に加え、ニホンジカによる食害のため、開花個体数は10年間で90%以上減少した。
主な危険要因	動物食害（シカ）、管理放棄 遷移によって衰退傾向にあった。さらに、遷移の影響が少なかった地点でも、ニホンジカによる食害によって減少率が加速している。
特記事項	近年のニホンジカによる食害のため、ランクを大幅に修正した。ニホンジカの激しい食害によって、日光白根山のハクサンフウロのように、草丈数cmで開花している個体もみられる。過去にも遷移進行による減少が確認されたが、過去10年間で急激に減少率は上昇している。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 II 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量 A	
産地数	現存	3
5	不明	1
	絶滅	1



ヒメビシ

種子植物・フトモモ目
ミソハギ科

Trapa incisa Siebold et Zucc.

評価理由	1地点で少数個体が確認された以外は、近年の記録はコオニビシの誤同定である。大半の生育地では50年以上前に絶滅したと推定される。
主な危険要因	水質汚濁、自然遷移、池沼開発 分布が平野部の池沼や湿田に限定されるため、水質汚濁や開発の影響を受けやすい。
特記事項	2018年レッドリスト部分改訂版では絶滅危惧 I A 類。コオニビシの果実がない状態や、小型の株は本種と誤認されることが多い。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	絶滅危惧 II 類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	1
6	不明	1
	絶滅	4



カラフトアカバナ

種子植物・フトモモ目
アカバナ科

Epilobium ciliatum Raf. subsp. *ciliatum*

評価理由	1山域の特定の沢にごく少数の株が生育する。加えて砂防ダムによる埋没も危惧される。
主な危険要因	動物食害（シカ）、河川開発、その他（災害） 生育地付近は源流近くまで砂防工事がなされている。生育地はニホンジカの生息密度が非常に高い。
特記事項	2018年レッドリスト部分改訂版では絶滅危惧 I A 類。分類が難しい上に花が小さく、現地での確認は難しい。生育地がある山域の隣接県側でも記録があり、精査すると別地点にも生育している可能性がある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅危惧 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

ミズユキノシタ

種子植物・フトモモ目
アカバナ科*Ludwigia ovalis* Miq.

評価理由

3地点中2地点で絶滅し、残りの地点も今回の調査では確認されなかったが、最近まで生育していたため、埋土種子から復活する可能性はある。

主な危険要因

池沼開発、外来種競合・交雑、土地造成（ソーラー）
近年の減少理由はハゴロモモの侵入及びソーラー発電所の造成工事である。過去には池沼開発により絶滅した事例もある。

特記事項

2012年以降に消失した生育地の自生株は、群馬県水産試験場に移植された。

今回評価

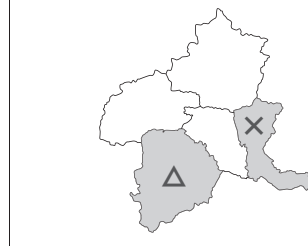
今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定性

産地数	現存	0
3	不明	1
	絶滅	2

県内分布状況



フユザンショウ

種子植物・ムクロジ目
ミカン科*Zanthoxylum armatum* DC. var. *subtrifoliatum* (Franch.) Kitam.

評価理由

9地点で記録されているが、1地点は現在石灰岩の採掘が行われ立ち入りが禁止され、現状は不明である。生育地には単木または2～4本しかない。

主な危険要因

森林伐採、道路工事
道路斜面の吹きつけ工事や除伐、石灰岩の採掘によって絶滅することが懸念される。

特記事項

県植物誌（1968）には記録がない。県植物誌改訂版（1987）では、4地域の分布が記されている。前回調査より確認地点が増えた。

今回評価

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量 D

産地数	現存	8
9	不明	1
	絶滅	0

県内分布状況



コガンピ

種子植物・アオイ目
ジンチョウゲ科*Diplomorpha ganpi* (Siebold et Zucc.) Nakai

評価理由

5地点で記録があるが、草地開発によって減少し、現在は1地点で少数の株が残存するのみとなった。

主な危険要因

管理放棄、草地開発、分布限界
過去に生育していた草地は農地やゴルフ場、宅地に転用された。現在では草地の管理放棄によりアズマネザサが侵入し、残存株数はわずかである。

特記事項

本県は内陸における本種の分布域の北限である。

今回評価

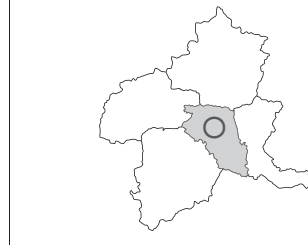
今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	情報不足
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量 D

産地数	現存	1
5	不明	0
	絶滅	4

県内分布状況



クモマナズナ

種子植物・アブラナ目
アブラナ科

Draba sakuraii Makino var. *nipponica* (Makino) Takeda

評価理由	2地点で記録があるが、1地点でのみ生育が確認され、残る1地点では絶滅していた。局所的で、株数は少ない。
主な危険要因	その他（災害）、特殊分布、自然遷移 集中豪雨による出水や崩落の影響がある地点に生育している。また、遷移により生育可能な立地が狭まっている。
特記事項	環境省レッドリスト（2020）ではクモマナズナとして評価された。群馬県のレッドデータブックにおける分類群の取り扱い及び名称は I -2- (5) 2012年版レッドデータブックから、名称や分類群に関する取り扱いが変化した種について（8 ページ）参照。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数 2	現存	1
	不明	0
	絶滅	1



ハクセンナズナ

種子植物・アブラナ目
アブラナ科

Macropodium pterospermum F.Schmidt

評価理由	3地点中2地点で生育が確認された。いずれの地点もニホンジカが周辺まで侵入している。また、1地点ではニホンジカ食害により確認できない状態である。
主な危険要因	動物食害（シカ）、動物食害（シカ以外） ニホンジカの嗜好性が高い植物で、執拗な食害を受ける。また、ニホンジカが入らない急峻な沢でもカモシカは侵入し摂食する。
特記事項	古くから知られる生育地はニホンジカの食害により確認できない状態である。新たに発見された2地点では今のところニホンジカの侵入の形跡はないが、周辺はニホンジカの分布密度増加域である。ニホンジカが生育地にたどりつけるルートを開発すると急に衰退することが想定される。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数 3	現存	2
	不明	1
	絶滅	0



アオヒメタデ

種子植物・ナデシコ目
タデ科

Persicaria erectominor (Makino) Nakai f. *viridiflora* (Nakai) I.Ito

評価理由	4地点中2地点で生育が確認され、2地点で絶滅が確認された。工事や圃場整備により生育域が狭められ、減少が著しい。
主な危険要因	池沼開発、土地造成（圃場整備）、湿地開発 平地の沼畔や河川敷に自生するが、識別が難しいため希少種の認識がない。圃場整備で分布面積が減少し、河川敷やため池などの工事に伴って消失してきた。
特記事項	2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I B 類。近年の工事に伴う個体数の減少のため、再びランクを見直した。ヒメタデの品種として扱われる場合が多いが、生態型や地方型の可能性もある。ただし地域的・生態的にまとまった出現傾向を示すため、ヒメタデと区別する見解もある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2012)	絶滅危惧 II 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数 4	現存	2
	不明	0
	絶滅	2



ナガバノウナギツカミ

種子植物・ナデシコ目
タデ科*Persicaria hastatosagittata* (Makino) Nakai

評価理由

3地点中1地点のみで確認された。分布が限られ、生育地が少ないこと、生育環境が脆弱でかつ乾燥化と外来植物の侵入により悪化していることから、減少が著しい。

主な危険要因

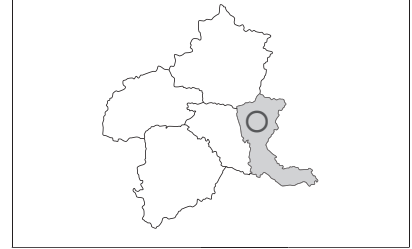
池沼開発、自然遷移、外来種競合・交雑
生育地の乾燥化とキシノウブやオオブタクサなどの外来植物の侵入、公園整備などで植生の大きな変化が起こっている。

特記事項

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2018)	
群馬県(2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2001)	指定なし
環境省(2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量簡易ACD	
産地数 3	現存	1
	不明	1
	絶滅	1

県内分布状況



ヌカボタデ

種子植物・ナデシコ目
タデ科*Persicaria taquetii* (H.Lév.) Koidz.

評価理由

7地点中1地点で生育が確認されたが、残り6地点では2000年以降確認されていない。確実な生育地の生育環境が不安定であり、減少傾向にある。

主な危険要因

湿地開発、池沼開発、その他(公園整備)
湿地開発によって生育環境が消失した。調査間中に新たに確認された場所以外で過去に記録がある産地では発見されなかった。

特記事項

現存する生育地は、不安定な環境にある休耕田や池沼の周りである。特定の休耕田で多量に生育しているが、耕地整理などで失われる危険性が高い。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2018)	
群馬県(2012)	絶滅危惧ⅠB類
群馬県(2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省(2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定量簡易ACD	
産地数 7	現存	1
	不明	0
	絶滅	6

県内分布状況



マダイオウ

種子植物・ナデシコ目
タデ科*Rumex madaio* Makino

評価理由

6地点中2地点で生育が確認された。ダム運用開始に伴い、県内最大の集団が消失し、残る生育地も外来種との交雑が進行している。

主な危険要因

外来種競合・交雑、ダム建設、農薬汚染
ダム建設により最大の集団が消失した。同属の外来種エゾノギシギシと交雑しやすい。また、山間地の水田周辺に生育するため、除草剤の影響を受ける。

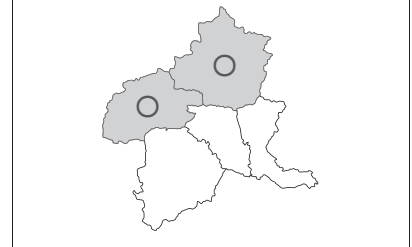
特記事項

最大産地の消失や、外来種エゾノギシギシとの交雑の進行によって、大幅なランクアップとなった。県内最大の集団は純粋なマダイオウのみからなる東日本でもまれな集団だったが、2019年にダム運用開始により消失した。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2018)	
群馬県(2012)	絶滅危惧Ⅱ類
群馬県(2001)	絶滅危惧Ⅱ類
環境省(2020)	指定なし

判定基準	定量簡易ACD	
産地数 6	現存	2
	不明	1
	絶滅	3

県内分布状況



タガソデソウ

種子植物・ナデシコ目
ナデシコ科

Cerastium pauciflorum Steven ex Ser. var. *amurense* (Regel) M.Mizush.

評価理由	1地点から調査期間中に確認された。個体数が少ない上に、ニホンジカによる食害が懸念される。
主な危険要因	分布限界、動物食害（シカ） 生育地はニホンジカの生息密度が高い。生育地に至る急斜面のため今のところ食害はないが、いつまでも捕食されない保証はない。
特記事項	国内では長野県だけに分布すると考えられてきた植物である。それほど目立つ植物ではなく、また周辺環境からも植栽起源とは考えにくい。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量 D
産地数	現存 1 不明 0 絶滅 0
1	



ビランジ

種子植物・ナデシコ目
ナデシコ科

Silene keiskei Miq. var. *minor* (Takeda) Ohwi et H.Ohashi f. *minor* (Maxim.) Takeda

評価理由	7地点で記録があるが、分布範囲が限定され、かつ園芸採取により減少している。また、生育地の1つは石灰岩の採掘により大部分が消失している。
主な危険要因	園芸採取、道路工事 園芸採取の対象となる。最近では道路擁壁工事によって大部分が消失した生育地もある。
特記事項	オオビランジの品種とされる場合もあり、Flora of Japan はこれを支持している。しかし、県内では分布域がまとまり、より極端な立地に生育するため、本書では変種として扱った。近年発見された生育地もあるが極めて局所的で個体数は少ない。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD
産地数	現存 7 不明 0 絶滅 0
7	



ツルビランジ

種子植物・ナデシコ目
ナデシコ科

Silene keiskei Miq. var. *minor* (Takeda) Ohwi et H.Ohashi f. *procumbens* (Takeda) Ohwi et H.Ohashi

評価理由	4地点でそれぞれ少数の個体が確認された。園芸採取に加え、一部でカモシカによる食害が確認された。
主な危険要因	園芸採取、特殊分布、動物食害（シカ以外） 山草園芸の対象となっており、記録のある生育地でも園芸採取されているとみられる。また、一部でカモシカによる食害が確認された。
特記事項	主な生育地が垂直な岩崖のためビランジやオオビランジとの区別が付きにくく、確認は赤紫色が目立つ花期に限られる。特に遠望では萼筒等の腺毛の有無や茎の伸長の程度など識別が困難であるが、いずれも同程度に絶滅リスクを抱えているので保護、保全に種類間で差をつける必要はないと考える。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 C
産地数	現存 4 不明 0 絶滅 0
4	



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅危惧 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

シラオイハコベ

種子植物・ナデシコ目
ナデシコ科*Stellaria fenzlii* Regel

評価理由

1地点の狭い範囲に50個体未満が確認されている。産地が局限されるため、絶滅のリスクが高いと考えられる。

主な危険要因

特殊分布

本県の生育地は、崩壊しやすい立地の高茎草原や低木林である。そのため、生育基盤が脆弱と考えられる。

特記事項

2018年部分改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。2016年に生育が確認された。現在のところ生育地にはニホンジカの侵入は確認されない。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量D

産地数

1

現存

1

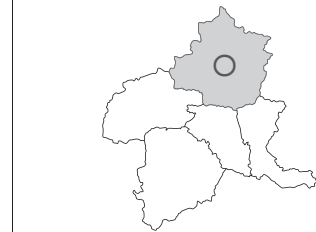
不明

0

絶滅

0

県内分布状況



イトハコベ

種子植物・ナデシコ目
ナデシコ科*Stellaria filicaulis* Makino

評価理由

6地点中1地点のみで生育が確認された。この生育地も湿原の遷移進行により、生育可能な場所は非常に限られている。

主な危険要因

湿地開発、自然遷移、農薬汚染

湿地開発によって産地が大幅に減少した。自然遷移及び乾燥化が最大の危険要因である。

特記事項

記録のある生育地の大部分は開発や遷移進行によって消失した。現存する生育地は県指定天然記念物の地域内にあるが、遷移進行や乾燥化、さらに富栄養化によってごく一部が残るのみである。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準

定量D

産地数

6

現存

1

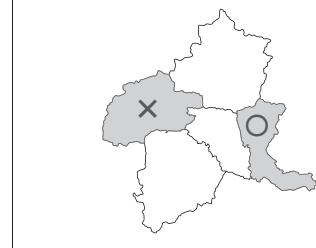
不明

0

絶滅

5

県内分布状況



イワアカザ

種子植物・ナデシコ目
ヒユ科*Chenopodium gracilispicum* H.W.Kung

評価理由

2地点で記録があり、1地点でわずかな個体数を確認できたが、残る1地点では調査を行えなかった。株数は少なく、遷移や工事の影響を受けやすいと考えられる。

主な危険要因

道路工事、その他(災害)、外来種競合・交雑

道路工事や外来種との競合が脅威となっている。集中豪雨による生育地の破壊も確認された。

特記事項

過去に本種とミドリアカザ(情報不足:273ページ)は同一のものとして扱われた。現在では、果皮表面の模様からミドリアカザとは異なる種として扱われる(Clemans 2006)。今までに県内で標本を伴って記録されたものはすべてイワアカザであった。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧ⅠA類

判定基準

定量簡易ACD

産地数

2

現存

1

不明

1

絶滅

0

県内分布状況



ガクウツギ

種子植物・ミズキ目
アジサイ科

Hydrangea scandens (L.f.) Ser.

評価理由	2地点から記録があるが、1地点でごく少数が確認され、残りの地点では確認できない状態である。ニホンジカ、イノシシの増加により生育環境が悪化している。
主な危険要因	動物食害*、外来種競合・交雑 分布域にニホンジカとイノシシが侵入し、植生が変化している。また、竹林が急速に拡大していることも減少の一因である。
特記事項	2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧I A類。

※動物食害：ニホンジカ、イノシシ

今回評価	絶滅危惧I A類
群馬県 (2018)	絶滅危惧I A類
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易ACD	
産地数 2	現存	1
	不明	1
	絶滅	0



ワタラセツリフネソウ

種子植物・ツツジ目
ツリフネソウ科

Impatiens ohwadae M.Watan. et Seriz.

評価理由	2地点のみで生育が確認された。分布域が極めて狭いことに加えて、生育地は開発を受けやすい場所にある。
主な危険要因	河川開発、池沼開発、湿地開発 低地の河川や湿地に限って生育する。本種の生育地は河川改修や公園造成の対象になりやすい。認識が低い種のため、開発の事前調査で見逃される危険性もある。
特記事項	個体数の変動や生育環境の脆弱性を考慮し、ランクを見直した。低地の湿地に生える一年草で、個体数の変動や、生育地の環境は不安定である。

今回評価	絶滅危惧I A類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧I B類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易ACD	
産地数 2	現存	2
	不明	0
	絶滅	0



カッコソウ

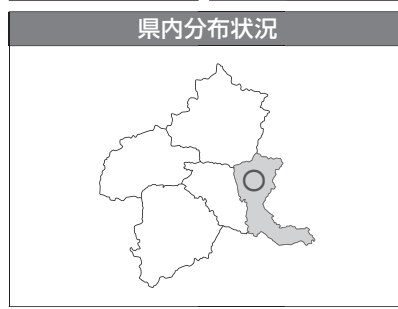
種子植物・ツツジ目
サクランソウ科

Primula kisoana Miq. var. *kisoana*

評価理由	自生状態のものは2地点で確認された小規模な集団のみである。正常に種子繁殖することが困難な状況で、クローン成長で個体群を維持している状況である。
主な危険要因	園芸採取、その他（集団の分断） 園芸採取に加え、集団が分断され、受粉効率の低下から種子による繁殖率が極端に低下している。
特記事項	国内希少野生動植物種に指定されている。しかし、指定前後に大量に園芸採取された。植林や生育地の分断により、集団が孤立化し、有性繁殖の効率が極度に低下しているため、自生地での回復は困難な状況である。

今回評価	絶滅危惧I A類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧I A類
群馬県 (2001)	絶滅危惧I類
環境省 (2020)	絶滅危惧I A類

判定基準	定量簡易ACD	
産地数 2	現存	2
	不明	0
	絶滅	0



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧I A類

(4) 絶滅危惧I B類

(5) 絶滅危惧II類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

ミョウギイワザクラ

種子植物・ツツジ目
サクラソウ科*Primula reinii* Franch. et Sav. var. *myogiensis* H.Hara

評価理由

11地点で生育が確認されているが、特定の山域に限定される。地点あたりの生育面積は極めて小さい上に、園芸採取が確認されている。

主な危険要因

園芸採取、分布限界、特殊分布
継続的に園芸採取されていると考えられる。分布域は極めて限られる。

特記事項

よく知られた産地では大型の株が極端に少ない生育地があり、花が目立つサイズになると採取されてしまうと考えられる。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	絶滅危惧ⅠA類

判定基準	定量簡易ACD
------	---------

産地数	現存	11
	11	不明
	絶滅	0

県内分布状況



コイワザクラ

種子植物・ツツジ目
サクラソウ科*Primula reinii* Franch. et Sav. var. *reinii*

評価理由

1山域の2地点で生育が確認されているが、分布域は狭い。継続的に園芸採取され減少したと考えられ、極めて限られた場所にしか残存していない。

主な危険要因

園芸採取、自然遷移、特殊分布
園芸採取のために危険な箇所以外は失われた。また、一部では遷移によって生育地が減少した。

特記事項

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定量D
------	-----

産地数	現存	2
	2	不明
	絶滅	0

県内分布状況



イワウメ

種子植物・ツツジ目
イワウメ科*Diapensia lapponica* L. var. *obovata* (F.Schmidt) Hultén

評価理由

1地点のみで5株未満の生育が確認された。個体数が少ない上に踏み付けにより減少し、個体サイズも小型化している。

主な危険要因

踏み付け、特殊分布
生育地は登山者の踏み付けにより広い範囲にわたって裸地化している。残った株も踏み付けられている。

特記事項

生育地は国立公園内にあるが、生育地は登山者が休憩のため集中する場所にあり、開花ができないほどに衰退している。周辺も含めた踏み付けを回避する対策が必要である。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量D
------	-----

産地数	現存	1
	1	不明
	絶滅	0

県内分布状況



ウラジロヒカゲツツジ

種子植物・ツツジ目
ツツジ科

Rhododendron keiskei Miq. var. *hypoglaucum* Sutô et T.Suzuki

評価理由

3地点で確認されているが、生育地が偏っている。環境省レッドデータブック（2014）では、1都3県でのみ分布が確認されている。

主な危険要因

園芸採取、動物食害（シカ）、特殊分布
園芸採取の対象となったり、生育地の崩落によって個体数が減少する危険性がある。

特記事項

国内希少野生動植物種に指定されている。生育地は比較的安定しており、1992から1994年にかけて行われた調査時と個体数は大きく変動していないと思われる。危険を伴う場所であるため登山者が少ないことも幸いしている。大規模な園芸採取が懸念される。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県（2018）	
群馬県（2012）	絶滅危惧ⅠA類
群馬県（2001）	絶滅危惧Ⅰ類
環境省（2020）	絶滅危惧ⅠA類

判定基準	定量簡易ACD
産地数	現存 3 不明 0 絶滅 0
3	

県内分布状況



オオヤマツツジ

種子植物・ツツジ目
ツツジ科

Rhododendron transiens Nakai

評価理由

3地点中1地点で確認された。現存個体数は極めて少ないと思われる。

主な危険要因

園芸採取、管理放棄
園芸採取が主な要因と考えられる。

特記事項

県レッドデータブック（2012）で絶滅とされた地域で、付近の株に由来する個体が植栽されている。植栽地の近くで新たに自生が確認された。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県（2018）	
群馬県（2012）	絶滅危惧ⅠA類
群馬県（2001）	指定なし
環境省（2020）	指定なし

判定基準	定量D
産地数	現存 1 不明 1 絶滅 1
3	

県内分布状況



ヒメツルコケモモ

種子植物・ツツジ目
ツツジ科

Vaccinium microcarpum (Turcz. ex Rupr.) Schmalh.

評価理由

1地点で標本記録があり、現存が確認された。同地域の他の湿原でも文献記録がある。ごく小規模な集団があるのみで、さらにニホンジカによる食害がみられる。

主な危険要因

特殊分布、動物食害（シカ）
湿原内の微地形に対応した狭い範囲にしか生育していない。また、ニホンジカによる摂食が確認された。

特記事項

草津・志賀地域や利根川源流域で採取された標本はDNA解析の結果、ツルコケモモであった（大井一東馬哲雄氏の私信による）。今回、尾瀬産の標本が東京都立大学牧野標本庫で発見された（MAK441631）。ラベルの情報をもとに現地調査した結果、ごく小規模な集団が確認された。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県（2018）	
群馬県（2012）	情報不足
群馬県（2001）	情報不足
環境省（2020）	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定量D
産地数	現存 1 不明 1 絶滅 0
2	

県内分布状況



I

II

1

2

3

4

種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧ⅠA類

(4) 絶滅危惧ⅠB類

(5) 絶滅危惧Ⅱ類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

ヤツガタケムグラ

種子植物・リンドウ目
アカネ科*Galium triflorum* Michx.

評価理由

1 山域の2地点にごく少数の株が生育する。加えて生育地は谷壁の崩落や泥流発生など攪乱が起りやすく不安定である。

主な危険要因

特殊分布、その他（災害）
生育環境に限られ、かつ生育地の基盤は不安定である。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。2015年に生育が確認された。生育地は現在のところ砂防工事や伐採は行われていない。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧ⅠA類

判定基準

定量D

産地数	現存	2
2	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



オオキヌタソウ

種子植物・リンドウ目
アカネ科*Rubia chinensis* Regel et Maack

評価理由

4地点で記録があるが、いずれも現状不明である。前回調査（2012）でも過去に生育記録のあった場所は、ササが高密度に群生しており見つからなかった。

主な危険要因

自然遷移
山地林下にあった本種も、森林伐採によって環境が変わり、その後ササなどの侵入によって植生が遷移して衰退したと考えられる。

特記事項

県植物誌（1968）では2地域に分布が示され、県植物誌改訂版（1987）はそれをそのまま引用している。このほか1977年に別地点で標本が採取されているが（GMNHJ-BS-26937、34846）、現地の状況から生存の可能性は低いと思われる。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定性

産地数	現存	0
4	不明	4
	絶滅	0

県内分布状況



トウヤクリンドウ

種子植物・リンドウ目
リンドウ科*Gentiana algida* Pall.

評価理由

1地点のみで生育が確認された。分布域が狭く特定の立地に依存することに加え、ニホンジカによる食害により減少している。

主な危険要因

動物食害（シカ）、園芸採取
もともと生育立地が限られていた。加えてニホンジカの食害が進んでいる。園芸採取に対しても注意が必要である。

特記事項

食害が高標高域や急斜面にまで及び、減少が加速しているため、ランクを見直した。生育地は国立公園内だが、園芸採取の形跡が確認されたこともある。もっぱら種子繁殖により増えるため、ニホンジカ食害による開花数の減少は、今後の個体数の減少に直結すると考えられる。

今回評価

絶滅危惧ⅠA類

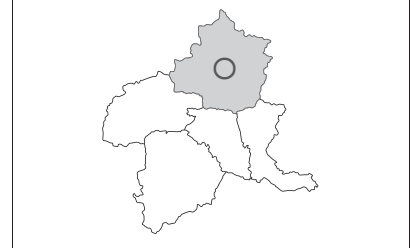
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠB類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量簡易ACD

産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



コケリンドウ

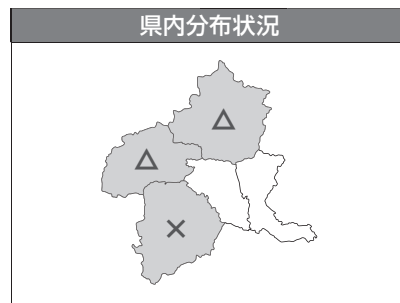
種子植物・リンドウ目
リンドウ科

Gentiana squarrosa Ledeb.

評価理由	5地点すべてで近年生育を確認できず、うち1地点で絶滅していた。産地のほとんどは植生が変化している。既に絶滅した可能性もある。
主な危険要因	管理放棄、草地開発、土地造成（その他） 管理放棄による木本やササの侵入、草地の開発、牧野改良により導入された外来牧草によって減少した。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	情報不足
環境省 (2020)	指定なし

判定基準		定性	
産地数	5	現存	0
		不明	4
		絶滅	1



チチブリンドウ

種子植物・リンドウ目
リンドウ科

Gentianopsis contorta (Royle) Ma

評価理由	2地点中1地点で少数が確認され、別の地点では絶滅した。特殊かつ不安定な環境に依存し、近年減少傾向にある。1年草かつ低茎草本のため遷移には極めて弱い。
主な危険要因	動物食害（シカ）、自然遷移、踏み付け 生育環境が特殊で脆弱性が高い。近年ニホンジカの個体数の増加により、周囲の植生の変化が見られる。人の立ち入りに伴う踏み付けも危惧される。
特記事項	1957年に叶山山頂でも標本記録があるが、石灰岩採掘のため絶滅したと考えられる（証拠標本：GMNHJ-BS-54820）。自生地が知られるようになり、本種をよく理解しない者により採取されている可能性がある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 I B 類

判定基準		定量簡易 ACD	
産地数	2	現存	1
		不明	0
		絶滅	1



ムラサキセンブリ

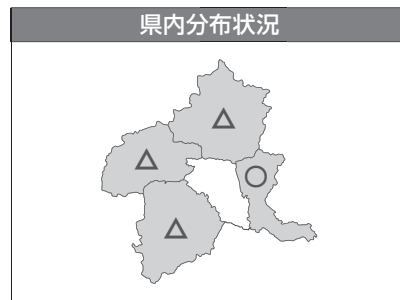
種子植物・リンドウ目
リンドウ科

Swertia pseudochinensis H.Hara

評価理由	10地点中1地点のみで確認された。草地の管理放棄や開発によって失われた生育地が多い。
主な危険要因	草地開発、土地造成（その他）、薬用採取 管理放棄によりササや木本が繁茂し、生育環境が劣化、消失した生育地が多い。
特記事項	県レッドデータブック（2012）の調査時に未報告だった生育地が確認された。記録がある（もしくはあった）地点はすべて十分な調査がなされておらず、また、有名採集地でも観察地でもない。このため、他にも未確認の生育地が存在する可能性はある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準		定量簡易 ACD	
産地数	10	現存	1
		不明	8
		絶滅	1



イヌセンブリ

種子植物・リンドウ目
リンドウ科*Swertia tosaensis* Makino

評価理由

3地点中1地点で生育が確認された。群落の規模は小さく、年によって発生個体数の変動が大きい。草地の刈り取り管理に依存しているものと考えられる。

主な危険要因

湿地開発、管理放棄

生育面積が極めて小さいため、小規模な工事でも絶滅する危険性がある。管理放棄や管理方法の変更によって衰退することも考えられる。

特記事項

県レッドデータブック（2001）では絶滅とされた。草刈りの頻度や時期によって個体数が変動する。適切な管理が続くことが、個体群維持のための条件と考えられる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数 3	現存	1
	不明	1
	絶滅	1

県内分布状況



ヒメナエ

種子植物・リンドウ目
マチン科*Mitrasacme indica* Wight

評価理由

4地点中1地点のみで生育が確認された。生育面積はごくわずかで、遷移進行の影響を受けやすい。

主な危険要因

湿地開発、自然遷移

低茎の植物で、遷移進行により容易に衰退する。また、生育地の多くは低湿地のため、開発の影響を受けやすい。

特記事項

微小な植物のため、環境調査の時でも見落とされやすい。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量 D	
産地数 4	現存	1
	不明	0
	絶滅	3

県内分布状況



チョウジソウ

種子植物・リンドウ目
キョウチクトウ科*Amsonia elliptica* (Thunb.) Roem. et Schult.

評価理由

現在残存する生育地は1地点のみで、株数も極端に少ない。生育環境が河川敷という不安定な環境のため、絶滅が危惧される。

主な危険要因

河川開発、管理放棄、外来種競合・交雑

架橋による河川敷の大規模な開発とそれに伴う地下水位の変動、外来植物の侵入によって、生育地の植生が大きく変化した。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。直接的には河川敷での工事によって危機的な状況である。工事後もオオブタクサやセイタカアワダチソウなどの外来種の侵入、遷移進行が想定される。現在保全対策に依存して生存している状況である。挿し芽による生育地外保存も必要な段階であると考えられる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数 8	現存	1
	不明	0
	絶滅	7

県内分布状況



フナバラソウ

種子植物・リンドウ目
キョウチクトウ科

Vincetoxicum atratum (Bunge) C.Morren et Decne.

評価理由	8地点中1地点のみでごく少数の生育が確認できた。一方、大半の地点では長らく確認できず、現状不明の生育地の中にはすでに絶滅した地点もあると考えられる。
主な危険要因	管理放棄、園芸採取、草地開発 草地への植林や開発、管理放棄が減少理由として考えられる。現存生育地では草刈り管理に依存していると考えられる。
特記事項	県レッドデータブック（2012）の調査時に未報告だった生育地が確認された。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	1
8	不明	4
	絶滅	3



イヌムラサキ

種子植物・ムラサキ目
ムラサキ科

Lithospermum arvense L.

評価理由	8地点中1地点で少数個体が確認された。路傍や雑草群落の植物のため、消長を含め個体群の変動は極めて不安定と考えられる。
主な危険要因	外来種競合・交雑、土地造成（その他）、草地開発 路傍や原野など攪乱地に生育するため、外来種と競合しやすい。まったく保護体制のない場所に生育するため、維持管理すら難しい。
特記事項	2021年に、過去に記録のない地点で確認されたためランクを絶滅危惧 I A 類に修正した。生育環境や、生育地点の植物相を考慮し、在来系統と判断した。東部地域の市街地や工場周辺でも記録があるが、これらは明らかに外来系統と考えられるため、対象から除外した。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	情報不足
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
8	不明	7
	絶滅	0



ムラサキ

種子植物・ムラサキ目
ムラサキ科

Lithospermum erythrorhizon Siebold et Zucc.

評価理由	14地点で記録があるが、今回の調査で確認されたのは1地点のみである。近年まで生育が確認されていた生育地もニホンジカの増加とともに確認できなくなった。
主な危険要因	草地開発、動物食害（シカ）、薬用採取 草地の管理放棄により衰退した生育地が多い。加えて草地の開発や染色材料目的の採取も減少要因となる。また、ニホンジカの食害を受けている可能性もある。
特記事項	2000～2010年の間に県内最大の生育地が開発により消失した。県内ではそれに次ぐ規模の生育地でも2010年代半ばから再確認されていない。本種のニホンジカへの嗜好性は不明であるが、ニホンジカ食害が激化した頃に本種が確認できなくなったことから、食害にあった可能性は否定できない。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	1
14	不明	8
	絶滅	5



ルリソウ

種子植物・ムラサキ目
ムラサキ科*Omphalodes krameri* Franch. et Sav. var. *krameri*

評価理由

1地点のみで生育が確認されたが、個体数は50未満で、生育地にニホンジカが侵入している。

主な危険要因

園芸採取、動物食害（シカ）
園芸採取による減少傾向から回復できていない状態である。ニホンジカは直接摂食しないが、林床環境の劣化が懸念される。

特記事項

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2018)	
群馬県(2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省(2020)	指定なし

判定基準	定量D
------	-----

産地数	現存	1
	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



マメダオシ

種子植物・ナス目
ヒルガオ科*Cuscuta australis* R.Br.

評価理由

2地点で記録があるが、うち1地点では既に絶滅し、残りの地点も再確認できていない。既に絶滅している可能性もある。

主な危険要因

自然遷移、外来種競合・交雑、湿地開発
詳しい減少の理由は不明。湿地の遷移や開発、さらに近縁な外来種アメリカネナシカズラとの競合が考えられる。

特記事項

過去の記録は誤同定であることが明らかになった。アメリカネナシカズラとの識別は難しい。低湿地の草地に生育し、寄主はマメ科のみならず、キク科、タデ科など多様である。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2018)	
群馬県(2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2001)	指定なし
環境省(2020)	絶滅危惧ⅠA類

判定基準	定性
------	----

産地数	現存	0
	不明	1
	絶滅	1

県内分布状況



アオホオズキ

種子植物・ナス目
ナス科*Physaliastrum japonicum* (Franch. et Sav.) Honda

評価理由

4地点中3地点で現状不明、1地点のみで生育が確認されたが、産地あたりの個体数は少ない。また、生育環境が急速に失われている。

主な危険要因

森林伐採、動物食害（シカ）
植生自然度の高い森林内に生育するため、伐採によって消失した。ニホンジカの直接的な摂食は確認されていないが、裸地化など林床変化に伴う影響は考えられる。

特記事項

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2018)	
群馬県(2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2001)	希少
環境省(2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定量D
------	-----

産地数	現存	1
	不明	3
	絶滅	0

県内分布状況



マルバノホロシ

種子植物・ナス目
ナス科

Solanum maximowiczii Koidz.

評価理由	以前から記録のある1地点では現状不明である。県レッドデータブック(2012)の調査で、新たに1地点から少数だがまとまった個体が確認された。
主な危険要因	自然遷移 登山道沿いなど攪乱された環境の林縁に生育するつる植物のため、二次遷移により森林化が進行すると、生育地を失い衰退する。
特記事項	関東地方が分布東限にあっているため、産地や個体数も限定されている。明るい林縁など、攪乱された立地に依存して生活しており、遷移が進めば生育地を失う。しかし、部分的伐採や倒木などでランダムに林縁的環境が形成されることによって、生育地が維持されると考えられる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県(2018)	
群馬県(2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県(2001)	指定なし
環境省(2020)	指定なし

判定基準	定量 D
産地数	現存 1 不明 1 絶滅 0
2	



オオアブノメ

種子植物・シソ目
オオバコ科

Gratiola japonica Miq.

評価理由	7地点中3地点で生育が確認された。生育地は開発の影響を受けやすいことに加え、本種は年によって株数が変動するケースが多く、生育基盤が脆弱である。
主な危険要因	土地造成(その他)、農薬汚染、湿地開発 湿地や沼畔の埋め立て、干拓のほか、周辺農地からの除草剤流入が主要な減少要因である。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県(2018)	
群馬県(2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県(2001)	絶滅危惧 I 類
環境省(2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量簡易 ACD
産地数	現存 3 不明 3 絶滅 1
7	



シソクサ

種子植物・シソ目
オオバコ科

Limnophila chinensis (Osbeck) Merr. subsp. *aromatica* (Lam.) T. Yamaz.

評価理由	1地点のみから少数集団が確認された。過去の生育地の大半が失われた。
主な危険要因	湿地開発、池沼開発、管理放棄 生育地が湿地開発や管理放棄などで植生が大きく変化した。
特記事項	2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。今回新たに生育が確認された。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県(2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県(2012)	情報不足
群馬県(2001)	指定なし
環境省(2020)	指定なし

判定基準	定量 D
産地数	現存 1 不明 1 絶滅 1
3	



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅危惧 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

コキクモ

種子植物・シソ目
オオバコ科*Limnophila trichophylla* (Kom.) Kom.

評価理由

10地点中7地点で生育が確認された。もともと分布が限られ、個々の生育地が小規模であることに加え、沼畔の開発や除草剤の使用により減少した。

主な危険要因

湿地開発、土地造成（圃場整備）、農薬汚染
湿地・池沼の干拓と圃場整備により大規模な産地が失われた。加えて観光地化に伴う沼畔の整備などの開発行為が主要な減少要因である。

特記事項

確認地点数は7地点であるが、3地点は1つの大きな分布域が干拓や分断化して孤立化した集団と考えられる。今後自生地の真ん中に道路の建設が予定されている。

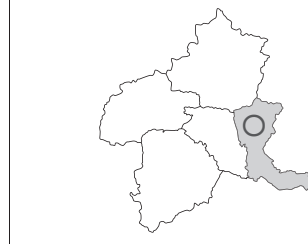
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準 定量 D

産地数	現存	7
10	不明	1
	絶滅	2

県内分布状況



ヒメトラノオ

種子植物・シソ目
オオバコ科*Veronica rotunda* Nakai var. *petiolata* (Nakai) Albach

評価理由

11地点で記録があるが、今回の調査では生育は確認できなかった。現存している可能性は高いが、管理放棄などにより大幅に減少したことは確かである。

主な危険要因

管理放棄、草地開発
草地の開発や管理放棄によって生育地、株数とも大幅に減少した。また、草地開発によって生育地が破壊された。

特記事項

1996年までは採集記録があり、その産地の中には遷移が進行しながらも草地が残っている場所もあるため、草地内にわずかに現存している可能性が考えられる。

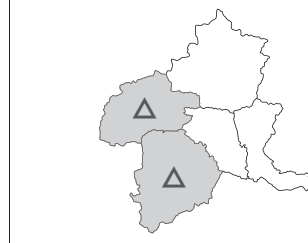
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準 定性

産地数	現存	0
11	不明	10
	絶滅	1

県内分布状況



ミヤマクワガタ

種子植物・シソ目
オオバコ科*Veronica schmidtiana* Regel subsp. *senanensis* (Maxim.) Kitam. et Murata

評価理由

2地点で記録があり、生育地に変化は見られない。現存すると考えられるが、生育地は多数の株が生育できるだけの面積はない。

主な危険要因

踏み付け、特殊分布
少数の登山者による踏み付けでも影響が危惧される。

特記事項

生育地は自然環境保全地域内にある。

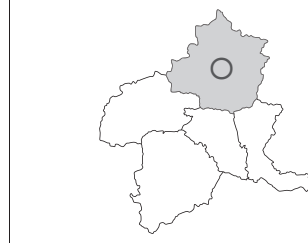
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準 定性

産地数	現存	2
2	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



ゴマノハグサ

種子植物・シソ目
ゴマノハグサ科

Scrophularia buergeriana Miq.

評価理由	2地点で記録があり、1地点のみで生育が確認された。生育環境は遷移の影響を受け不安定であり、株数も少ない。
主な危険要因	湿地開発、河川開発、管理放棄 過去に行われた河川や湿地の開発・改修で生育地の大部分が失われた。生育地によっては刈り取りをやめてしまったことにより衰退した。
特記事項	県レッドデータブック（2001）では絶滅とされたが、後に東部地域で生育が確認された。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
	不明	0
	絶滅	1



コウシンソウ

種子植物・シソ目
タヌキモ科

Pinguicula ramosa Miyoshi

評価理由	1地点のみで生育が確認されている。園芸採取によって株数が半分に減少し、その後元のレベルに回復していない。
主な危険要因	園芸採取、特殊分布、動物食害（シカ） 生育地は人が容易に立ち入りできる場所ではないにもかかわらず、採取された形跡がある。岩棚にはニホンジカが侵入した形跡がある。
特記事項	大規模な採取が行われ、今後もそのリスクがあることから、ランクを絶滅危惧 I A 類に修正した。特定県内希少野生動植物種に指定されている。巡視強化と条例の厳格な適用が必要と考えられる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量 C	
産地数	現存	1
	不明	0
	絶滅	0



ミミカキグサ

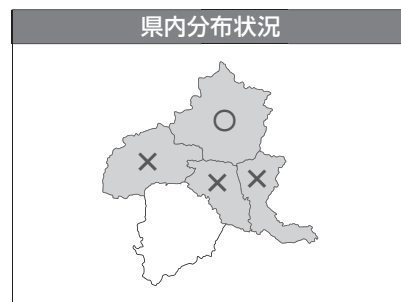
種子植物・シソ目
タヌキモ科

Utricularia bifida L.

評価理由	4地点中1地点で生育が確認された。生育面積は極めて小さく、環境変化により絶滅する可能性がある。
主な危険要因	池沼開発、自然遷移、湿地開発 湿地やため池の開発や改修で生育地が失われた。現存する生育地は規模が小さいため、遷移により大型の植物が侵入すると絶滅する危険性がある。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
	不明	0
	絶滅	3



タヌキモ

種子植物・シソ目
タヌキモ科*Utricularia japonica* Makino

評価理由

1地点で生育が確認された。池沼沿岸部の整備や遷移によって絶滅する可能性がある。

主な危険要因

池沼開発、自然遷移、水質汚濁
池沼の干拓や浚せつによって完全に消失する場合がある。水質汚濁により急減するが、その後水質の改善や春先の大雨による希釈で復活する場合もある。

特記事項

2000年以前に県内で採集され、タヌキモとされた同定可能な標本はすべてイヌタヌキモであった。また、イヌタヌキモは角野(1994)に紹介されるまで、十分な認識はなかった。したがって文献記録がある大型のタヌキモ類もイヌタヌキモの誤認の可能性が高い。現在タヌキモと同定できるものの産地は1地点しかない。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



クマツヅラ

種子植物・シソ目
クマツヅラ科*Verbena officinalis* L.

評価理由

9地点中4地点で生育が確認された。先駆性の種のため、生育地が長続きしないことが多い。また、河川敷の開発や豪雨災害などによっても減少している。

主な危険要因

河川開発、農薬汚染、その他(災害)
平野の河川敷や周辺の畑を主な生育環境とするため、河川敷の開発や高茎草本群落への遷移が最大の減少要因であると考えられる。

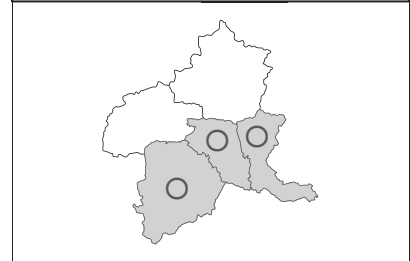
特記事項

生育地の大半が令和元年台風第19号に伴い、土砂の堆積や決壊があった河川内にある。災害の影響を考慮し、今回ランクを修正した。今後現地の再調査を行う必要がある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	4
9	不明	4
	絶滅	1

県内分布状況



ツルカコソウ (ケブカツルカコソウを含む)

種子植物・シソ目
シソ科*Ajuga shikotanensis* Miyabe et Tatew.

評価理由

5地点で記録があるが、近年の記録はない。既に絶滅している可能性もある。

主な危険要因

管理放棄、ゴルフ場、草地開発
生育地の大部分は草地の管理放棄で衰退したか、ゴルフ場または別荘地造成によって消失した。

特記事項

群馬県立自然史博物館に収蔵された最新の標本は1967年採集のもの(GMNHJ-BS-71268)である。その後は生育地の環境の変化や開発により、現存するか確認できない状況にある。環境省レッドリスト(2020)ではツルカコソウとして評価された。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定性	
産地数	現存	0
5	不明	5
	絶滅	0

県内分布状況



キセワタ

種子植物・シソ目
シソ科

Leonurus macranthus Maxim.

評価理由	25地点中4地点で生育が確認されたが、いずれの地点でも管理放棄により激減したか、ニホンジカの食害により深刻な個体サイズの矮小化が起きている。
主な危険要因	管理放棄、動物食害（シカ）、道路工事 草地の管理放棄や道路等の工事による路傍の草地の喪失に加え、比較的残存株数の多い生育地にニホンジカが侵入し、激しい食害を受けている。
特記事項	山野草の通販サイトでも売られており、園芸採取される危険もある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	4
25	不明	14
	絶滅	7



ミズネコノオ

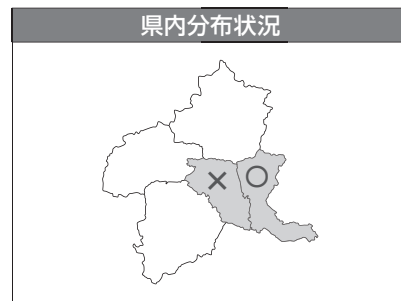
種子植物・シソ目
シソ科

Pogostemon stellatus (Lour.) Kuntze

評価理由	4地点で記録があるが、現在では生育を確認するのは困難である。
主な危険要因	湿地開発、管理放棄、外来種競合・交雑 生育地が管理放棄や湿地開発などで大きな影響を受け、急激に生育数を減らしている。
特記事項	1年草であるため、環境変化に大きく依存する。しばらく確認されていない。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
4	不明	0
	絶滅	3



ミズトラノオ

種子植物・シソ目
シソ科

Pogostemon yatabeanus (Makino) Press

評価理由	2地点で記録があるが、今回の調査でも生育は確認されなかった。生育地は開発され、近年の記録はない。既に絶滅している可能性もある。
主な危険要因	湿地開発、管理放棄 生育地は湿地開発された。また、水位の変動や富栄養化によるヨシなどの大型の水生植物の侵入が減少要因として考えられる。
特記事項	湿地開発後の復活は確認できていない。このため、すでに絶滅した可能性もある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定性	
産地数	現存	0
2	不明	1
	絶滅	1



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅
(2) 野生絶滅
(3) 絶滅危惧 I A 類
(4) 絶滅危惧 I B 類
(5) 絶滅 II 類
(6) 準絶滅危惧
(7) 情報不足

イヌニガクサ

種子植物・シソ目
シソ科*Teucrium veronicoides* Maxim. var. *brachytrichum* Ohwi

評価理由

1 地点に少数の株が生育しているだけである。草地の管理放棄やニホンジカ食害の影響により衰退することが考えられる。

主な危険要因

管理放棄、動物食害（シカ）
草地の中でも限られた環境に生育し、管理放棄による影響が危惧される。また生育地は近年ニホンジカの個体数が増加している。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。基本変種エゾニガクサは多様な種で、イヌニガクサもその変異に含まれるかもしれない。本県のは形態的には山形県産のイヌニガクサとよく合致する。

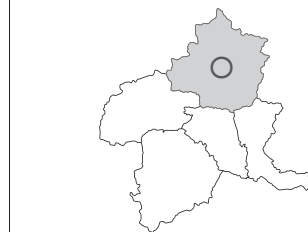
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧ⅠA類

判定基準 定量 D

産地数	現存	1
1	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



スズメノハコベ (スズメハコベ)

種子植物・シソ目
ハエドクソウ科*Microcarpaea minima* (K.D.Koenig ex Retz.) Merr.

評価理由

4 地点中2地点で生育が確認された。個々の生育地は通常小規模である。平野部の田園地帯に分布が限られ、生育基盤は脆弱である。

主な危険要因

池沼開発、湿地開発、農薬汚染
圃場整備やため池・調整池の改修により消失する場合が多い。除草剤の流入による減少も危惧される。

特記事項

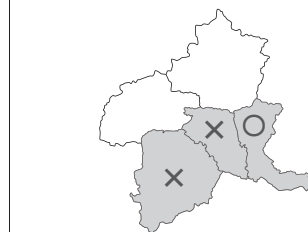
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準 定性

産地数	現存	2
4	不明	0
	絶滅	2

県内分布状況



ナンバンギセル

種子植物・シソ目
ハマウツボ科*Aeginetia indica* L.

評価理由

6 地点中3地点で記録されたが、集団は小規模である。管理放棄や工事により、今後も減少することが想定される。

主な危険要因

管理放棄、園芸採取、土地造成（ソーラー）
管理放棄によるススキ草地の喪失が主な減少要因であると考えられる。また、分布域は大規模なソーラー発電所が多く立地する場所にある。

特記事項

ススキなど寄生する宿主が生える貯水池の堰堤改良工事で失われるケースも生じている。

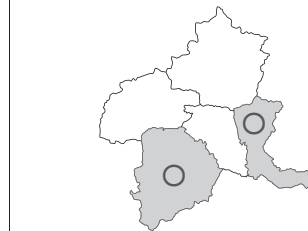
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準 定量 D

産地数	現存	3
6	不明	2
	絶滅	1

県内分布状況



オオナンバンギセル

種子植物・シソ目
ハマウツボ科

Aeginetia sinensis G.Beck

評価理由	5地点で記録があるが、今回の調査では再確認できなかった。極めて危機的と考えられる。
主な危険要因	管理放棄、園芸採取、ゴルフ場 管理放棄によるススキや小型スゲ類の草地の喪失が主な減少要因であると考えられる。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定性	
産地数	現存	0
5	不明	1
	絶滅	4



オニク

種子植物・シソ目
ハマウツボ科

Boschniakia rossica (Cham. et Schltldl.) B.Fedtsch.

評価理由	2地点中1地点で生育が確認された。寄生植物で発見が難しい上に採取圧が高い。発生個体数は少ないと考えられる。
主な危険要因	薬用採取、特殊分布 本種の生育には、植生と林床の状態が保全され続けることが必要である。また、薬草としての需要が高い。
特記事項	大規模な薬用採取にあった場合、絶滅は免れない。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	1
2	不明	1
	絶滅	0



ハンカイシオガマ

種子植物・シソ目
ハマウツボ科

Pedicularis gloriosa Bisset et S.Moore

評価理由	6地点で記録があるが、4地点で既に絶滅した。残る1地点でも大半が失われた。
主な危険要因	動物食害 (シカ)、自然遷移 ササなどの侵入や遷移により衰退した。また、唯一の生育地では登山道整備のため花期前に刈り払いが行われ、加えてニホンジカの嗜好性が高く、減少が止まらない。
特記事項	1995年の調査で生育していた場所には今回全く見つからず、2010年の調査では同一地域ではあったがかなり離れた場所に12株見つかった。しかし、2011年8月では1株も見当たらなかった。多年草である本種のこうした消長がどのように起こるのかは不明である。ここ5年間は見つかっていない。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	1
6	不明	1
	絶滅	4



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

ヒキヨモギ

種子植物・シソ目
ハマウツボ科*Siphonostegia chinensis* Benth. ex Hook. et Arn.

評価理由

23地点で記録があり、8地点で今回記録された。総個体数は50ほどで、生育状況は不安定と考えられる。

主な危険要因

草地開発、踏み付け、自然遷移
草丈の低い草原に生えるため、遷移により消失しやすい。また、丘陵や低山地の植物であるため、開発の影響を受けてきた。

特記事項

県レッドデータブック（2012）の調査時には確認地点数0となった。今回の調査期間中に別の地点で確認されたが、いずれも生育株数は少なく、危険な状態である。1年草であるため、低茎草原が維持されることが生存には必須である。

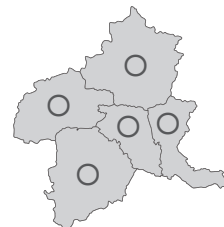
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準 定量D

産地数	現存	8
23	不明	10
	絶滅	5

県内分布状況



オオヒキヨモギ

種子植物・シソ目
ハマウツボ科*Siphonostegia laeta* S.Moore

評価理由

6地点中3地点で生育が確認された。株数が少なく極端な環境に生育するため、環境の変化に対して脆弱であると考えられる。

主な危険要因

動物食害（シカ）、自然遷移、特殊分布
土壌が薄く乾燥しやすい場所に生育し、遷移とともに、異常気象によって枯死や衰退することがある。生育地周辺はいずれも近年ニホンジカの個体数が増加している。

特記事項

一部の生育地では、遷移進行により衰退が著しい。1年草であるため、低茎草原が維持されることが生存には必須である。

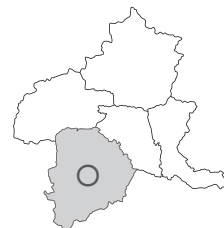
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準 定量簡易ACD

産地数	現存	3
6	不明	2
	絶滅	1

県内分布状況



ミヤマウメモドキ

種子植物・モチノキ目
モチノキ科*Ilex nipponica* Makino

評価理由

1地点で記録があるが今回確認できなかった。生育個体数はごくわずかと考えられる。

主な危険要因

動物食害（シカ）、自然遷移
もともと個体数が少ないと考えられる。周辺部ではニホンジカによる低木層の食害が著しい。

特記事項

生育地は国立公園内。

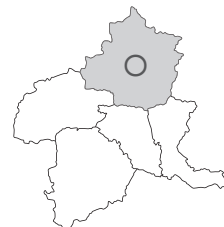
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準 定性

産地数	現存	0
1	不明	1
	絶滅	0

県内分布状況



バアソブ

種子植物・キク目
キキョウ科

Codonopsis ussuriensis (Rupr. et Maxim.) Hemsl.

評価理由	6地点中3地点で生育が確認された。管理放棄のため衰退した生育地が多い個体群の動態が不安定な生育地もみられる。
主な危険要因	管理放棄、草地開発、動物食害（シカ） 開発や植林によって生育地が失われた。現在では草地や林縁の管理放棄によって減少傾向にある。
特記事項	2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。2015年頃に比べてより増加した生育地もあるが、草刈りが行われたための一時的な増加と考えられる。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠB類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定量簡易ACD	
産地数 6	現存	3
	不明	1
	絶滅	2



キキョウ

種子植物・キク目
キキョウ科

Platycodon grandiflorum (Jacq.) A.DC.

評価理由	7地点から100個体以上が確認されたが、その大部分は特定生育地に存在し、大半の生育地では個体数は10未満である。過去30年間連続した減少傾向にある。
主な危険要因	管理放棄、動物食害*、園芸採取 草原の管理放棄や園芸採取によって減少している場所が多い。いくつかの生育地にニホンジカやカモシカが侵入し、食害も見られる。
特記事項	2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。本種の生存には、草原の維持管理が必要となる。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2012)	絶滅危惧Ⅱ類
群馬県 (2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定量C	
産地数 39	現存	7
	不明	24
	絶滅	8



*動物食害：ニホンジカ、カモシカ

ヒメシロアサザ

種子植物・キク目
ミツガシワ科

Nymphoides coreana (H.Lév.) H.Hara

評価理由	1地域の水田及びその周辺の湿地の狭い範囲に生育している。生育環境は非常に劣悪で、減少傾向にある。
主な危険要因	湿地開発、管理放棄、農薬汚染 生育地点周辺は農薬散布と継続的な水田耕作がない状態が続いている。個体数は極めて少ない。
特記事項	生育不可能な耕作地、あるいは長年の耕作放棄地が増えて、植生の変化によって減少傾向にある。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定量D	
産地数 7	現存	2
	不明	0
	絶滅	5



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧ⅠA類

(4) 絶滅危惧ⅠB類

(5) 絶滅危惧Ⅱ類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

ガガブタ

種子植物・キク目
ミツガシワ科*Nymphoides indica* (L.) Kuntze

評価理由

既に絶滅したと考えられていたが、埋土種子集団由来と推定される集団が確認された。ただし、1つの池の限られた範囲のみ自生する。

主な危険要因

池沼開発、水質汚濁、動物食害（シカ以外）
過去に池沼開発や水質汚染によって大幅に減少した。同水系にソウギョが生息しているため、ソウギョが堰を越えた場合、絶滅の危険性が高まると考えられる。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。遺伝子多型から、複数の種子に由来する株が復活している。ただし、1つの池の中に分布が限られ、生育基盤は極めて脆弱と考えざるを得ない。

今回評価

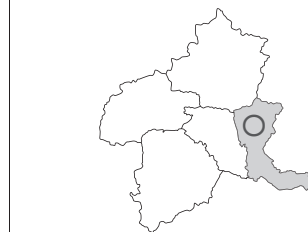
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	絶滅
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準

定量簡易 ACD

産地数	現存	1
3	不明	0
	絶滅	2

県内分布状況



アサザ

種子植物・キク目
ミツガシワ科*Nymphoides peltata* (S.G.Gmel.) Kuntze

評価理由

既に絶滅したと思われていたが、1地点で生育が確認された。土壌シードバンクまたは根茎バンクからの復活と考えられる。

主な危険要因

池沼開発、道路工事
水田や池沼の埋め立てなどで個体群が壊滅的な影響を受けた。また工事の影響で実生の定着や深場での生長の悪化がみられる。さらに生育地に道路建設の計画がある。

特記事項

生育地には短花柱花の株しか残っていないため、種子生産ができない。生育地には新たな道路建設の計画がある。

今回評価

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準

定量簡易 ACD

産地数	現存	1
5	不明	0
	絶滅	4

県内分布状況



ヒメシオン

種子植物・キク目
キク科*Aster fastigiatus* Fisch.

評価理由

10地点中4地点で生育が確認された。新たに小規模な生育地が発見されたが、最大の生育地で個体数が95%以上減少した。

主な危険要因

自然遷移、動物食害*、湿地開発
最大の生育地はヤナギ林への遷移進行や、ニホンジカとイノシシによる食害のため極端に減少した。このほか、低地の湿地やの開発・工事も減少要因となりうる。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。

今回評価

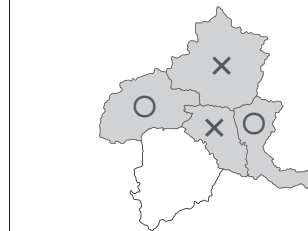
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準

定量 A

産地数	現存	4
10	不明	2
	絶滅	4

県内分布状況



*動物食害：ニホンジカ、イノシシ

アイズヒメアザミ

種子植物・キク目
キク科

Cirsium aidzuense Nakai ex Kitam.

評価理由	6地点中5地点で生育が確認された。生育地点のすべてにニホンジカが侵入し、ほとんどで防鹿ネットなどの対策がないと個体群を維持できない状態になっている。
主な危険要因	動物食害（シカ）、自然遷移、特殊分布 ニホンジカによる被害が著しい地域に分布が偏っている。やや攪乱依存的な性質があり、遷移進行によっても衰退する。
特記事項	特定県内希少野生動植物種に指定されている。ニホンジカの嗜好性が高い種である。2017年以降大規模な生育地を含む複数の生育地が発見されたが、それらの地域でもニホンジカの個体数が急増している。最大の生育地の一部で、防鹿ネットの設置を行っている。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	絶滅危惧 I A 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	5
6	不明	1
	絶滅	0



タチアザミ

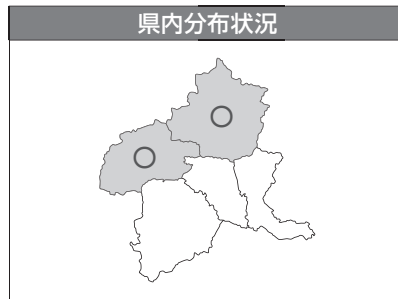
種子植物・キク目
キク科

Cirsium inundatum Makino

評価理由	2地点で生育が確認されたが、残存株数はわずかである。うち1地点では連続した減少傾向にある。
主な危険要因	自然遷移、動物食害（シカ）、その他（災害） 吾妻地域では遷移進行と豪雨による土砂流入のため絶滅寸前である。利根沼田地域の生育地は人為的な影響のない場所だが、規模が小さく不安定であると考えられる。
特記事項	人の立ち入れない沢沿いには他に生育している可能性もある。県レッドデータブック（2012）で記録された、東部地域からの情報は、誤同定と判断されたため今回削除した。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	2
2	不明	0
	絶滅	0



エゾムカシヨモギ

種子植物・キク目
キク科

Erigeron acer L. var. *acer*

評価理由	2地点の狭い範囲に50株未満が確認されている。産地が局限されるため、絶滅の危険性が高いと考えられる。
主な危険要因	特殊分布、その他（崩落） 不安定な立地に依存し、生育個体数が極端に少ない。人為の影響は考えられないが、崩落に伴う減少は考えられる。
特記事項	2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。現在のところ生育地にはニホンジカの侵入は確認されない。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	指定なし
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	2
2	不明	0
	絶滅	0



アズマギク

種子植物・キク目
キク科*Erigeron thunbergii* A.Gray subsp. *thunbergii*

評価理由

17地点で記録があるが、最大の生育地は過去20年間に消失し、今回はいずれの地点でも確認できなかった。

主な危険要因

草地開発、管理放棄、園芸採取

過去20年間に大規模な産地が開発によって失われたことに加え、直近まで確認された地点でも管理放棄による衰退が深刻である。

特記事項

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 II 類
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定性	
産地数 17	現存	0
	不明	11
	絶滅	6

県内分布状況



フジバカマ

種子植物・キク目
キク科*Eupatorium japonicum* Thunb. ex Murray

評価理由

10地点中7地点で生育が確認された。新たな生育地も確認されたが、中部地域では2014年に絶滅した。大部分の生育地は周辺環境の管理に依存している。

主な危険要因

河川開発、管理放棄、外来種競合・交雑

護岸工事や堤防工事によって失われることが多い。大部分は河川管理に伴う周辺環境の整備や草刈りに依存している。

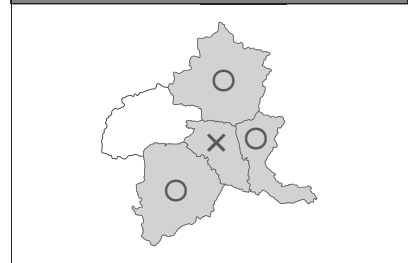
特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧 I A 類。大規模な産地は環境保全とモニタリングの事業によって維持されている。また、湿地環境を維持するビオトープ的な管理により定着した事例もある。一方で、河川工事による産地の喪失や遷移進行による衰退も目立っている。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I B 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数 10	現存	7
	不明	0
	絶滅	3

県内分布状況



ホソバオグルマ

種子植物・キク目
キク科*Inula linariifolia* Turcz.

評価理由

5地点中1地点で生育が確認されたが、開発やヨシ群落への遷移により残存株数はわずかである。

主な危険要因

湿地開発、河川開発、農薬汚染

低地の湿地や河川敷を生育環境とし、開発の影響を受けやすい。また周辺の水田や農道で使用された除草剤の影響を受ける。

特記事項

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定量 C	
産地数 5	現存	1
	不明	0
	絶滅	4

県内分布状況



カワラニガナ

種子植物・キク目
キク科

Ixeris tamagawaensis (Makino) Kitam.

評価理由	11地点で記録があるが、今回の調査では確認できなかった。近年の公的な調査では記録があるため、現存している可能性は高いが、激減したことも事実である。
主な危険要因	河川開発、外来種競合・交雑、自然遷移 河原の開発とシナダレスズメガヤをはじめとする外来種との競合が危険要因である。生育には増水による土砂の運搬・堆積が必要と考えられる。
特記事項	河床の固定化による遷移進行とシナダレスズメガヤの繁茂により壊滅的な状態である。生育可能な裸地が維持できない状態が続いている。河床の固定化は、上流のダムによる流量調節が機能している証であるが、自然遷移を助長し、本種と同様な立地にある多くの植物の衰退を招いている。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	準絶滅危惧

判定基準	定性	
産地数	現存	0
11	不明	8
	絶滅	3



テバコモミジガサ

種子植物・キク目
キク科

Japonicalia tebakaensis (Makino) C.Ren et Q.E.Yang

評価理由	6地点中5地点で生育が確認された。本県は分布の北限域であり、生育地に限られる。
主な危険要因	動物食害（シカ） ニホンジカによる摂食により、矮小化が目立ち、開花個体が激減している。加えて、森林伐採などで環境が改変されることにより消失する危険性が高くなっている。
特記事項	代表的なソハヤキ要素であり、本県は分布の北限域である。埼玉県や東京都には比較的まとまった集団があるが、本県にはまとまった集団は少ない。県植物誌（1968）には、本種の記載はない。西毛地域では山間部の道路工事によって消失した集団もあるが、シカの食害で壊滅的な生育地が多い。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	準絶滅危惧
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	5
6	不明	1
	絶滅	0



ミヤマアキノノゲシ

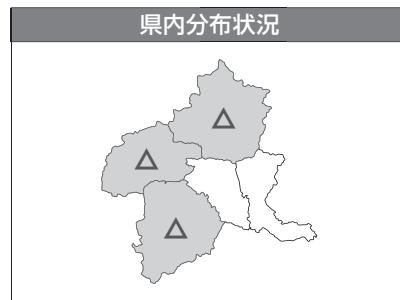
種子植物・キク目
キク科

Lactuca triangulata Maxim.

評価理由	4地点で記録があるが、今回生育を確認できなかった。注目されにくい種である上に分布地点が離散し、分布域でも分布密度が低いいため調査しづらい種である。
主な危険要因	自然遷移、動物食害（シカ） 林冠の閉鎖とともに被陰によって消失する場合がある。また複数の分布域にはニホンジカが侵入している。
特記事項	もともと生育地あたりの個体数が少ないことに加え、再確認できない産地が多いことと、その大部分にニホンジカが侵入していることから、絶滅のおそれが極めて高いと判断し、今回絶滅危惧 I A 類にランクを修正した。関心を集めにくい植物だけに、意識的な調査と保護対策が望まれる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	情報不足
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定性	
産地数	現存	0
4	不明	4
	絶滅	0



ムラサキニガナ

種子植物・キク目
キク科*Paraprenanthes sororia* (Miq.) C. Shih

評価理由

8地点中6地点で約50個体の生育が確認された。遷移進行や軽微な管理行為で消失する可能性がある。また、生育地の大半には多数のニホンジカが生息している。

主な危険要因

動物食害（シカ）、森林伐採、自然遷移
林縁に出現する機会が多い。そのため遷移や植林樹の繁茂により消失しやすい。加えてニホンジカの食害による個体サイズの低下や個体数の減少が目立つ。

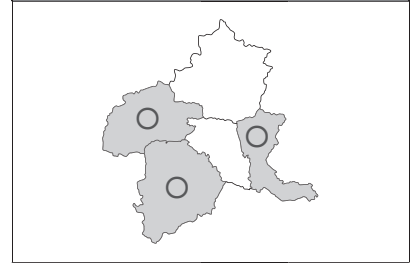
特記事項

林地や林縁の雑草として扱われ、個体数が少ない植物との認識がない場合が多い。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	6
8	不明	1
	絶滅	1

県内分布状況



ニッコウコウモリ

種子植物・キク目
キク科*Parasenecio nantaicus* (Komatsu) Kadota

評価理由

7地点中6地点で生育が確認された。うち1地点は防鹿ネットの中にある。それ以外の生育地はいずれも小規模で、一部でニホンジカの侵入が始まっている。

主な危険要因

動物食害（シカ）
ニホンジカの嗜好性が高く、かつての群生地が完全に消失した事例もある。日光連山以外の生育地もニホンジカの生息密度が高まっている。

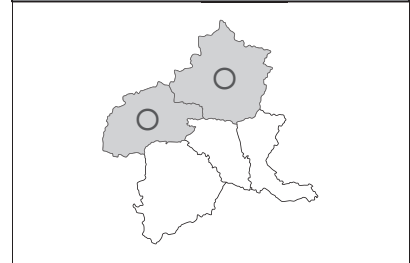
特記事項

日光連山以外からも近年の記録がある。日光白根山周辺では、防鹿ネット内の1地点以外では正常なサイズで開花結実できない。なお、日光白根山のシラネアオイ保護ネット内にも過去には群落があったが、現在は失われた。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 I A 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	6
7	不明	0
	絶滅	1

県内分布状況



カンチコウゾリナ

種子植物・キク目
キク科*Picris hieracioides* L. subsp. *kamtschatica* (Ledeb.) Hultén

評価理由

3地点で生育が確認されているが、分布域が狭く個体数が少ない。特殊な立地に依存し生育基盤が脆弱であることに加え、踏み付けにより生育環境が悪化している。

主な危険要因

踏み付け、特殊分布
生育地は保護されているが、登山道周辺では土砂流出や崩落によって破壊される危険性が高い。近年の集中豪雨により洗掘が進み、影響が懸念される。

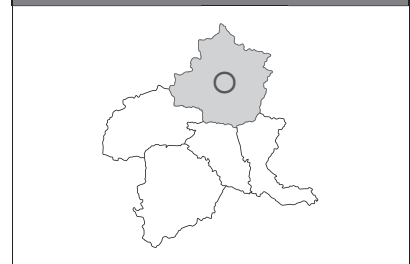
特記事項

生育地は国立公園及び県自然環境保全地域内である。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D	
産地数	現存	3
3	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



アキノハハコグサ

種子植物・キク目
キク科

Pseudognaphalium hypoleucum (DC.) Hilliard et B.L.Burtt

評価理由	17地点中3地点で生育が確認されたが、株数は合計50未満である。記録された地点では後に記録できない場合が多く、生育地は一定しない。
主な危険要因	管理放棄、土地造成（その他）、外来種競合・交雑 生育状況が不安定で、遷移進行や外来種の侵入とともに消失する場合が多い。また、道路や法面の工事で生育地が消失する場合もある。
特記事項	一年草のため、生育地点が一定でなく現状の把握が難しい。外来種タチチコグサやチチコグサモドキ、また形態や生態が類似するアレチノギクやヒメムカシヨモギなどと競合関係になると考えられる。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 II 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 I B 類

判定基準	定量簡易 ACD	
産地数	現存	3
17	不明	12
	絶滅	2



ヒメヒゴタイ

種子植物・キク目
キク科

Saussurea pulchella (Fisch.) Fisch.

評価理由	11地点で記録があるが、管理放棄により減少し、今回の調査では生育を確認できなかった。現存個体数は極めて少ないと思われる。
主な危険要因	管理放棄、草地開発、ゴルフ場 近年の衰退の主な要因は草地の管理放棄によるものである。本種の大規模な生育地であった草地は、相次いでゴルフ場などのリゾート施設に転用された。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	絶滅危惧 I 類
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定性	
産地数	現存	0
11	不明	10
	絶滅	1



オナモミ

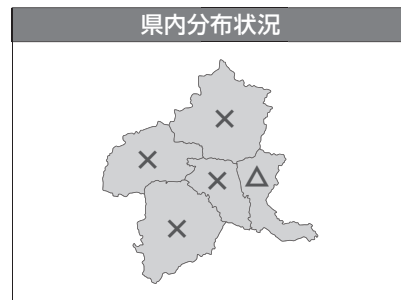
種子植物・キク目
キク科

Xanthium strumarium L.

評価理由	6地点で記録があるが、今回の調査では生育を確認できなかった。外来種との競合や河川・ため池の改修が減少要因と考えられる。
主な危険要因	外来種競合・交雑、河川開発、自然遷移 減少に至った詳しい状況は不明である。近縁な外来種オオオナモミとの競合のほか河川やため池の改修が危険要因として考えられる。
特記事項	『日本の野生植物 草本編Ⅲ』では、前橋市で1974年に撮影された写真が用いられている（北村 1981）。群馬県立自然史博物館収蔵の標本もこれより前のもののみである。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	絶滅危惧 II 類

判定基準	定性	
産地数	現存	0
6	不明	1
	絶滅	5



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧 I A 類

(4) 絶滅危惧 I B 類

(5) 絶滅危惧 II 類

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

エゾニワトコ

種子植物・マツムシソウ目
ガマズミ科*Sambucus racemosa* L. subsp. *kamtschatica* (E.L.Wolf) Hultén

評価理由

8地点で生育が確認された。いずれの地点でも個体数は少なく、かつ、大半の地点でニホンジカによる食害を受けている。

主な危険要因

動物食害（シカ）

主として自然植生下に生育し、生育基盤は安定しているが、ニホンジカの嗜好性がある種で食害により小型化している場合が多い。

特記事項

ニワトコ類は同定が難しいため、分布が正確に把握されたとはいいがたい。生育地の一部では、大きく育った株がキャンプ場の木陰やロープ結びのために利用されている。

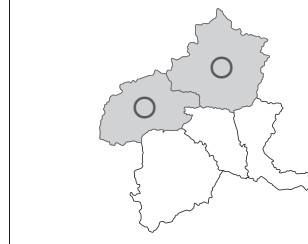
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準 定量D

産地数	現存	8
8	不明	0
	絶滅	0

県内分布状況



ゴマギ

種子植物・マツムシソウ目
ガマズミ科*Viburnum sieboldii* Miq. var. *sieboldii*

評価理由

2地点中1地点で確認された。残りの地点には現存しない。河川工事の影響により衰退傾向にあり、河畔林の遷移進行のため更新できない状況にある。

主な危険要因

河川開発、森林伐採、自然遷移

河川開発やその後の乾燥化により衰退傾向にある。河畔林の植生変化により、林床の照度が極端に減少しており、実生が育たなくなっている。管理放棄も著しい。

特記事項

2018年改訂版レッドリスト絶滅危惧ⅠA類。過去の標本から、板倉町にも分布していたことが判明したが、現存しないことが確認された。鳥散布種子をつける種であり、現在の生育地点での更新を図るとともに、定着可能な河畔林・湿地林の整備・育成が急務である。

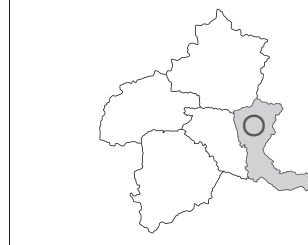
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠB類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	指定なし

判定基準 定量簡易ACD

産地数	現存	1
2	不明	0
	絶滅	1

県内分布状況



ケヨノミ (クロミノウグイスカグラ)

種子植物・マツムシソウ目
スイカズラ科*Lonicera caerulea* L. subsp. *edulis* (Turcz.) Hultén

評価理由

3地点中2地点で生育が確認された。ただし動物食害により株数は減少し、特に開花個体の極端な減少がみられた。

主な危険要因

動物食害（シカ）、特殊分布

ニホンジカによる強い食害を受けている。開花株は極端に少なく、個体サイズの矮小化も目立つ。

特記事項

ケヨノミとクロミノウグイスカグラは、葉の毛の生え方が連続し、明確に区別することは難しい。このため、両者を区別せず評価した。

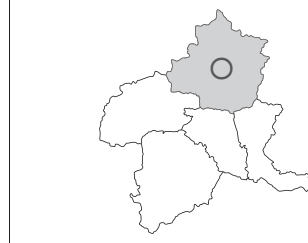
今回評価 絶滅危惧ⅠA類

群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準 定量簡易ACD

産地数	現存	2
3	不明	1
	絶滅	0

県内分布状況



マルバヨノミ

種子植物・マツムシソウ目
スイカズラ科

Lonicera caerulea L. subsp. *edulis* (Turcz.) Hultén var. *venulosa* (Maxim.) Rehder

評価理由	3地点で生育が確認されている。いずれも1地点あたりの個体数は10未満である。
主な危険要因	自然遷移、特殊分布 生育地は人為的な影響は考えにくい。遷移によるササや針葉樹の侵入が危険要因として考えられる。1地点ではニホンジカが侵入し、今後の食害が懸念される。
特記事項	1地点あたりの個体数は10未満であり、未知の産地を考慮しても、総個体数は少ないと考えられる。このため、今回ランクを絶滅危惧ⅠA類に修正した。ケヨノミ（クロミノウグイスカグラ：絶滅危惧ⅠA類）の変種で、中間的なものも存在し、しばしば混同される。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠB類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易ACD	
産地数	現存	3
3	不明	0
	絶滅	0



イボタヒョウタンボク

種子植物・マツムシソウ目
スイカズラ科

Lonicera demissa Rehder var. *demissa*

評価理由	2地点で記録があるが、現存は確認できなかった。既に絶滅している可能性がある。
主な危険要因	動物食害（シカ） 西部地域の生育地ではニホンジカによって低木層が食い尽くされ立ち枯れており、絶滅状態と考えられる。
特記事項	県植物誌改訂版（1987）に記録はない。コゴメヒョウタンボクとされたものの一部が本種に同定された（GMNHJ-BS-36185）。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定性	
産地数	現存	0
2	不明	1
	絶滅	1



コゴメヒョウタンボク

種子植物・マツムシソウ目
スイカズラ科

Lonicera linderifolia Maxim. var. *kanoi* (Makino) Okuyama

評価理由	2012年までの調査の際、2地点中1地点で生育が確認されている。現状不明の地点ではササや低木類の侵入により生育環境の劣化が著しい。
主な危険要因	自然遷移、分布限界 開発や採取など人為的な影響が比較的少ない場所にあるが、遷移によってササや木本が侵入し、衰退傾向にあると考えられる。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県 (2001)	希少
環境省 (2020)	絶滅危惧ⅠB類

判定基準	定量D	
産地数	現存	1
2	不明	1
	絶滅	0



I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅

(2) 野生絶滅

(3) 絶滅危惧ⅠA類

(4) 絶滅危惧ⅠB類

(5) 絶滅Ⅱ危惧

(6) 準絶滅危惧

(7) 情報不足

ハヤザキヒョウタンボク

種子植物・マツムシソウ目
スイカズラ科

Lonicera praeflorens Batalin var. *japonica* H.Hara

評価理由

4地点中3地点で生育が確認された。いずれの生育地も個体数が極めて少なく、わずかな環境変化や工事が絶滅に直結する。

主な危険要因

道路工事、自然遷移、その他（希少）
個体数が極めて少なく、保護体制のない場所に生育するため、道路工事が個体群の消失につながる可能性がある。

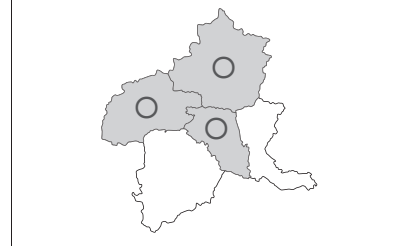
特記事項

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD
------	----------

産地数	現存	不明	絶滅
4	3	1	0

県内分布状況



キンレイカ

種子植物・マツムシソウ目
スイカズラ科

Patrinia triloba (Miq.) Miq. var. *palmata* (Maxim.) H.Hara

評価理由

4地点で生育が確認された。いずれの生育地でもニホンジカによる食害によって矮小化し、開花株は極端に少ない。個体数自体も減少傾向にある。

主な危険要因

動物食害（シカ）、自然遷移
自然遷移による被陰以上にニホンジカによる食害の方が強い減少要因となっていると考えられる。ほとんどが矮小化した個体で、開花個体は非常に少ない。

特記事項

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量 D
------	------

産地数	現存	不明	絶滅
4	4	0	0

県内分布状況



ヤブウツギ

種子植物・マツムシソウ目
スイカズラ科

Weigela floribunda (Siebold et Zucc.) K.Koch

評価理由

4地点中2地点で少数個体が確認されたが、2地点では前回調査から10年間で生育が確認できなくなった。遷移初期や不安定立地の種のため、保全是難しい。

主な危険要因

道路工事、自然遷移、その他（災害）
遷移の進行により早期に消失することが多い。不安定立地においては土砂災害により株や生育地そのものが失われることが考えられる。

特記事項

本県では2006年に初めて確認された（証拠標本：GMNHJ-BS-11478）。過去に記録のない地点からも今回確認されたが、分布域には危険箇所が多く、県内での分布の全貌は不明である。不安定立地における道路工事に際しては、あらかじめ株の存在を確認する必要がある。

今回評価	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2018)	
群馬県 (2012)	絶滅危惧 I A 類
群馬県 (2001)	指定なし
環境省 (2020)	指定なし

判定基準	定量簡易 ACD
------	----------

産地数	現存	不明	絶滅
4	2	0	2

県内分布状況



エキサイゼリ

種子植物・セリ目
セリ科

Apodicarpum ikenoi Makino

評価理由	1地点では絶滅し、別の1地点のごく狭い範囲で生育が確認された。
主な危険要因	湿地開発、その他（希少） 分布面積が狭く局所的なため、掘削や作業道設置などの小規模な工事でも絶滅すると考えられる。
特記事項	県レッドデータブック（2001）では絶滅種とされたが、県レッドデータブック（2012）の調査時生育が確認されている。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県（2018）	
群馬県（2012）	絶滅危惧ⅠA類
群馬県（2001）	絶滅
環境省（2020）	準絶滅危惧
判定基準	定量C
産地数	現存 1 不明 0 絶滅 1
2	
県内分布状況	

ミシマサイコ

種子植物・セリ目
セリ科

Bupleurum stenophyllum (Nakai) Kitag.

評価理由	5地点中4地点は、50年以上前の記録である。生育が確認された1地点でも草地の管理放棄により個体数は少ない。
主な危険要因	管理放棄、薬用採取 草地の管理放棄が最大の減少要因と考えられる。
特記事項	薬草として栽培されることがあり、県内でも逸出事例がある（証拠標本：GMNHJ-BS-36839）。このため、報告がない地域で発見された場合、判別には注意が必要である。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県（2018）	
群馬県（2012）	絶滅危惧ⅠA類
群馬県（2001）	絶滅危惧Ⅰ類
環境省（2020）	絶滅危惧Ⅱ類
判定基準	定量簡易ACD
産地数	現存 1 不明 0 絶滅 4
5	
県内分布状況	

ヤマナシウマノミツバ

種子植物・セリ目
セリ科

Sanicula kaiensis Makino et Hisauti

評価理由	5地点中2地点で生育が確認されたが、いずれの地点でも個体数はわずかである。よく知られた産地ではニホンジカの食害により生育が確認できなくなった。
主な危険要因	動物食害（シカ）、自然遷移、森林伐採 過去には森林伐採や林床のササの繁茂により減少した。地域的にはニホンジカによる食害または林床の攪乱が壊滅的な影響を与えたと考えられる。
特記事項	

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県（2018）	
群馬県（2012）	絶滅危惧ⅠA類
群馬県（2001）	絶滅危惧Ⅰ類
環境省（2020）	絶滅危惧ⅡB類
判定基準	定量簡易ACD
産地数	現存 2 不明 3 絶滅 0
5	
県内分布状況	

I
II
1
2
3
4
種の解説

(1) 絶滅
(2) 野生絶滅
(3) 絶滅危惧ⅠA類
(4) 絶滅危惧ⅡB類
(5) 絶滅Ⅱ類
(6) 準絶滅危惧
(7) 情報不足

ムカゴニンジン

種子植物・セリ目
セリ科*Sium ninsi* L.

評価理由

2012年までの調査の際、10地点中1地点のみで生育が確認された。湿地開発や池沼周辺部の管理放棄、乾燥化による遷移進行によって減少した。

主な危険要因

湿地開発、管理放棄、その他（乾燥化）
低湿地の開発やため池周辺の湿地の管理放棄、排水工事に伴う湿原の乾燥化による大型植物の繁茂など、湿地環境の変化により激減した。

特記事項

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2018)	
群馬県(2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2001)	絶滅危惧Ⅱ類
環境省(2020)	指定なし

判定基準	定性
------	----

産地数	現存	1
	10	不明
絶滅		4

県内分布状況



ヌマゼリ

種子植物・セリ目
セリ科*Sium suave* Walter var. *nipponicum* (Maxim.) H.Hara

評価理由

7地点で記録があるが、湿地開発や池沼周辺部の護岸整備や管理放棄によって減少し、現存するという情報は得られなかった。

主な危険要因

池沼開発、湿地開発、管理放棄
低湿地の開発や、水際の改修工事、管理放棄による木本植物やヨシの侵入など、湿地環境の変化により激減した。

特記事項

2000年頃までは生育していた記録がある。まだ現存している可能性はあるが、湿地林の遷移が進行し、下層にもヨシやクサヨシなどの中～高茎のイネ科草本が生育するため、生育地の状態は極めて劣悪と考えられる。

今回評価	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2018)	
群馬県(2012)	絶滅危惧ⅠA類
群馬県(2001)	絶滅危惧Ⅰ類
環境省(2020)	絶滅危惧Ⅱ類

判定基準	定性
------	----

産地数	現存	0
	7	不明
絶滅		6

県内分布状況

